

鮮烈なのは構わないけど、俺を巻き込まないでください……

ふーあいなむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、帰宅していると倒れている少女を見つけた。手当てしてたら発信機が……。やだナニコレ、面倒ごとの匂い……。これは主人公が、鮮烈な面倒ごとからひたすら逃げたいのに巻き込まれていく物語。

目次

| | |
|-------|----|
| プロローグ | 1 |
| 一話 | 4 |
| 二話 | 7 |
| 三話 | 11 |
| 四話 | 14 |
| 五話 | 17 |
| 六話 | 20 |
| 七話 | 23 |
| 八話 | 26 |
| 九話 | 30 |
| 十話 | 33 |
| 十一話 | 37 |
| 十二話 | 40 |
| 十三話 | 44 |
| 十四話 | 47 |
| 十五話 | 50 |
| 十六話 | 54 |
| 十七話 | 58 |
| 十八話 | 62 |
| 十九話 | 65 |
| 二十話 | 69 |
| 二十一話 | 73 |
| 二十二話 | 77 |
| 二十三話 | 80 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|
| 四十八話 | 四十七話 | 四十六話 | 四十五話 | 四十四話 | 四十三話 | 四十二話 | 四十一話 | 四十話 | 三十九話 | 三十八話 | 三十七話 | 三十六話 | 三十五話 | 三十四話 | 三十三話 | 三十二話 | 三十一話 | 三十話 | 二十九話 | 二十八話 | 二十七話 | 二十六話 | 二十五話 | 二十四話 |
| 159 | 156 | 152 | 149 | 146 | 142 | 139 | 136 | 133 | 130 | 127 | 124 | 121 | 118 | 115 | 111 | 108 | 105 | 102 | 99 | 96 | 93 | 90 | 87 | 84 |

| | |
|------|-----|
| 七十三話 | 242 |
| 七十二話 | 238 |
| 七十一話 | 235 |
| 七十話 | 232 |
| 六十九話 | 229 |
| 六十八話 | 225 |
| 六十七話 | 222 |
| 六十六話 | 218 |
| 六十五話 | 214 |
| 六十四話 | 210 |
| 六十三話 | 207 |
| 六十二話 | 204 |
| 六十一話 | 201 |
| 六十話 | 198 |
| 五十九話 | 195 |
| 五十八話 | 192 |
| 五十七話 | 189 |
| 五十六話 | 184 |
| 五十五話 | 181 |
| 五十四話 | 178 |
| 五十三話 | 175 |
| 五十二話 | 172 |
| 五十一話 | 168 |
| 五十話 | 165 |
| 四十九話 | 162 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|
| 九十五話 | 九十四話 | 九十三話 | 九十二話 | 九十一話 | 九十話 | 八十九話 | 八十八話 | 八十七話 | 八十六話 | 八十五話 | 八十四話 | 八十三話 | 八十二話 | 八十一話 | 八十話 | 七十九話 | 七十八話 | 七十七話 | 七十六話 | 七十五話 | 七十四話 |
| 317 | 314 | 311 | 307 | 304 | 301 | 298 | 295 | 292 | 289 | 286 | 283 | 279 | 275 | 272 | 268 | 264 | 261 | 257 | 253 | 250 | 246 |

プロローグ

「またいるし……」

学校から出ると、校門に知った顔が見える。
できれば知りたくなかった顔だが。

「……うわ、気付かれた」

たたた、と駆け寄ってくる。

それに合わせて俺も後退する。

相手は驚いた顔をして速度をあげてきた。

「な、何で逃げるんですかっ!？」

「似たような言葉で返してやるぜ、ストラトスちゃん。何でことあるごとに俺のところ来るんだよ」

ついに俺は後ろを向いて全力で走り出した。

「待ってくださいー!」

「だが断る!」

時速70キロでやつから逃げたい。

だが現実是非常だ。そんなことはできないし、ましてや格闘技をやっているような人間に身体能力で勝てるわけがない。

例え相手が年下だったとしても。

「くっそ……! 今日速攻で家に帰ってネットゲやる予定だったのに……!」

「あと、少し……!」

ヤバイ。

すぐ後ろからやつのが聞こえた。

「こうなりや……!」

「ストラトスちゃん!」

「な……!」

急ブレーキを掛けて止まり、勢いのまま突っ込んでくるストラトスちゃんを受け止める。

そのままぎゅうつと力を込めて抱き締めた。

「愛してるぜ」

「ふえ……!?!」

ストラトスちゃんは顔を真っ赤にして体を強張らせる。

「今だ……!」

「……なんて、んな訳ねーだろバーカバーカ！ ロリは帰れ！」

「……な、しまった！」

今さら気付いたって遅いわ、小娘！

校門に向かって走る。

「あばよ、ダチ公！」

「ま、待ってください！ 話を……!」

フハハハ、聞こえぬわ！

「……武装形態」

「え」

嫌なのが聞こえちゃった。

その言葉が聞こえた次の瞬間、尻餅をついて俺は空を見ていた。

「お、お前！ 今、一般人に魔法使ったな！」

「……いえ、単なる足払いです」

いつの間にか俺の前にいるストラトスちゃんは先ほどとは違い、大人になっている。

俗に言う変身魔法だ。

「くそ……変態しやがって！ 汚いぞ！」

「変身と言ってください。さあ、今日という今日は聞いてもらいますよ」

一区切りして、ストラトスちゃんは言った。

「手当てのお礼を！」

「それここまでやった挙げ句、キメ顔で言わなきゃいけないことなの？」

「……少し、後悔してます」

ストラトスちゃんは恥ずかしそうに顔を赤らめて俯いた。

ふむ……ついカツとなってやった、というところか。

「つたく……最近のロリっ娘は」

「それを言うなら『若いの』では？」

「いやまだ俺も若いし。高校生だよ?」

どうせ若いのって言ったら『あなたも若いでしょう?』って言うんでしょ!?

ライトノベルとかみたいにい!

「とにかく、わたしの傷を手当てしてくれたのは事実ですから! だからお礼を……」

「はあ……」

なんでこんなことになったのかなあ……。

やっぱりあの時、無視すりゃよかったんだ。

……それは数日前の出来事だった。

まさか、こんな面倒なこと今まで発展するとはなあ……。

俺は溢れ出る後悔と共に、あの日のこと……眼前で仁王立ちする少女、アインハルト・ストラトスと遭遇した日のことを思い出していた。

一話

「うおっー！」

それを見つけたのは学校帰りにゲームセンターにて遊びまくった後、コインロッカーに預けた荷物を取りに行ったときだった。

「おおっ……倒れているロリを発見……」

恐らく中学生だろう。制服に見覚えがある。

よく見ると傷だらけだ。最近噂の通り魔の仕業か？

まあ、何にせよ、

「無視するのみ。さあ帰ってネットゲしよ……」

「……ガシツ。」

「……なんだよ」

足を捕まれた。

しかもかなり強く。

「おい離せ！ 俺はお前みたいな面倒ごとには関わりたくないんだ！

今回はご縁がなかったということ……」

「……う……」

「……なんだよ無意識かよ」

ロリっ娘は意識がないにも関わらず俺の足を掴んだようだ。

まったく離す気配がない。

「はあ……わかったよ。手当てしてやるから離せ」

「………う、あ……」

ロリっ娘が足を離す。

こいつ起きてんじやないだろうな。

「とりあえず包帯とか買って来っから待ってろよ」

「………思えばこの時、そのまま帰ってしまえばよかったのだ。」

「うし、大体オツケーだな」

一通りの手当てをしてやり一息吐く。

まさか自分に看護系の才能があるとは……！

「……う……くる……し……」

「あーはいはいどうせ自己満足な手当てですよ。注文の多いガキン
チヨだぜ」

包帯を緩めてやると苦しそうな顔をしていたロリっ娘は安らかな
表情になる。

その表情を見た俺は一仕事終えたような気分になった。

「……ん？　これなんぞ」

ふと、首の後ろで何かが点滅しているのを見つけた。

ロリっ娘の上半身を支えるように抱き起こしてそれを見る。

これは……

「……発信、機？」

「……ヤバい。凄くヤバい。

明らかに面倒事だ。

思わずロリっ娘を投げ捨てる。

ゴンツ、と凄い音が聞こえたが気にしない。

「……うっ……ん？」

ゲツ。

起きた。

「あな……た、は……？」

左右で色が違う瞳が俺の顔を捉えている。

ばっちり目が合った。

一瞬のはずなのに、それは永遠にも感じられた。

「……う……」

それだけ言うとロリっ娘は再び意識を失った。

綺麗な眼だったな……

「……とか言ってる場合じゃねえ！　顔見られた！」

いや、朦朧としてたし覚えていないかもしれない。

「くそう、やっぱり関わるべきじゃなかったんだ……」

今さら後悔したって遅い。

出来ることがあるとすれば、このガキンチヨが俺を覚えてないこと

を祈るだけだ。

「いや、待てよ……。今この場で二、三発殴つとけば……」
拳を固めてガキンチョを見る――と、首もとで点滅する物が目にはいる。

「忘れてた……発信機！」

ガキンチョを見つけてから大分経っている。

もしこいつが追われてるなら……

「クッ……！ 今日はこの辺で勘弁しやる！ 覚えとけよ――いや、忘れろよガキンチョ！」

倒れているガキンチョを指差し一目散に逃げ出す。

もう二度と会わないことを切に願ってるぞ、ガキンチョ……！

二話

残念なことに。

非常に残念なことに、ガキンチョとはあの夜の二日後に再会した。町の往来のど真ん中で。

「あ……」

「……げっ」

どうやら顔を覚えていたようだ。

どこかに向かっていたのだろうか、足を止めて俺を見つめる。

「……あの」

「……ッ！」

ガキンチョが口を開こうとする。

その前に俺は『でんこうせっか』で来た道を逆走した。

そう、奴との二度目の遭遇は無事に事なきを得たのだ。

得たのだが……問題は三回目のエンカウトだった。

「あの……生徒手帳、落としましたよ」

「ん？ あ、どう……も……」

振り向くとやつがいた。

その手には俺の生徒手帳。

先ほどの声はこいつのか……！

「なん……!?!」

「篠崎^{しのざき}チヒロさん……ですか。変わったお名前ですね」

名前を知られてしまった。

いや、まだだ。まだ焦るような時間^{タイム}じゃない。

名前だけ知られたところで……

「へえ……あの高校に通っているんですか。すごいですね」

オワタ。

「あ、ああ、拾ってくれてアリガトウ！ 拙者用事があるのでこれにて……」

「あ、待ってください！」

ガシツと腕を捕まれる。

何この子……力強い。

「あっ……その……申し訳ありません！」

顔を真っ赤にして腕を離す。

そして姿勢を正すと頭を下げた。

「申し遅れました。私、St・ヒルデ魔法学院中等科一年、アインハルト・ストラトスと申します」

ガキンチョコはストラトスちゃんと言うらしい。

ストラトスちゃんは頭を下げたまま続けた。

「先日は手当てをしていただきありがとうございます。ただ……恥ずかしながら意識が朦朧としていたので、手当てをして下さったのがあなただという確証がないのです。その確認も含めてご挨拶に……」

ゆっくりと顔をあげ、そして固まる。

「……え？」

「……俺はとつくに逃げ出していた。」

「そこから俺とストラトスちゃんの追いかけてここが始まったんだ。それはまるで……そう、三世ととつあんのよう……！」

「そろそろ現代に戻ってきてください」

ああ、現実逃避もここまでか。

このまま過去編とか突入しない？

「やりません。今日という今日はきちんと話をしましょう」

「えー……」

やだよう。

ボクおうち帰りたいよう。

「今日はちよつと用事が……」

「ないですよね？ 今日はこのまま自宅に帰り夕飯までネットゲームをして、その後に生物と数学の宿題をしてから入浴、就寝する予定の
はずです」

「待つて待つてストラトスちゃんちよつと待つて」
え？

なに？ どういう事？
なんで知ってるの？

「調べましたから。チヒロさんはすぐ逃げてしまうので情報は貴重な戦力です。数日、後をつけた甲斐がありました」

「知ってるかい？ 世間一般ではそれをストーキングと呼ぶんだぜ？」

どうやら話を聞いてやらないとマジでヤバいらしいな。
俺のプライバシーが。

「ふう……わかった、わかったよ。話を聞いてやるから……その前に汗を拭け」

「……わかりました」

「あ、いや待て。拭いてやるから目え閉じろ」

ストラトスちゃんは額に汗をかいていた。

まあ、あれだけ全力疾走すればそうなるだろうな。

ポケットからハンカチを出す。

「あ、その……」

「人の好意は素直に受け取れよ、ガキンチョ」

「……で、では、その、お願いします。……それから子ども扱いしないでください」

ストラトスちゃんはそれだけ言って目を閉じる。

「よし、拭くぞ？」

「は、はい……」

俺はハンカチをストラトスちゃんの顔に————めがけて投げつけた。

ついでに彼女の靴紐をほどいてから走り出す。

「わぷっ!？」

「ワハハ、愚かなりー!」

ストラトスちゃんはハンカチを顔から取り、走り出そうとした。

だが靴紐がほどかれていることに気付き、こちらを恨めしそうに見

つめる

「じゃーなー、ストラトスちゅわん！ もう学校来んなよ！」

「待ってください！ 私……私！」

もう遅い。

貴様ではどうてい追いつくことはできぬ。

我は帰る。何者も干渉することのできない約束の地へと。

いざ、エルドラド家へ！

「私！ ……あなたの家の住所知ってますからね！」
くっそう。

三話

さして、ストラトスちゃんから逃げ仰せた俺は自宅へと戻ってきていた。

まあアパートなんだけどね。

「ただいま〜」

独り暮らしなので当然返事はない。

制服を脱ぎ、部屋着へと着替える。

『チヒロさん！ アインハルトです！ 開けてください！』

聞こえない聞こえない。

だからドアノブガチャガチャすんな。

「さあ、ネットゲを……ん？ メール来てる」

PCの電源を点けるとメールの着信を知らせるアイコンが出ていた。

早速開いてみると、それは少し前に知り合ったボイスチャット友達からだった。

「おっ、スカさんからじゃん。うわ！ 頼んでたバツ〇モバイルの設計図だ！」

スカさん。

それが彼の名だ。それ以上は知らないし、知ろうとも思わない。

スカさんはスカさん。それだけで十分だ。

よく見ると設計図の最後に文章がある。

「ん、何々？ 暇なとき連絡ください？ ……今日のネットゲは中止だな」

今日は久しぶりにスカさんとボイスチャットでもするか。

『ネットゲームは中止して友人とボイスチャット……と』

メモすんな。

ボイスチャットアプリを開いてスカさんへとコールする。

ワンコール半で出た。

ボイスチャットだから当然声だけ。

「ようスカさん。ワンコール半で出るとかあんた暇なのか？」

『やあチヒロくん。僕のいるここは案外暇なのだよ』
前に聞いたことがあるのだが、スカさんはどこかに閉じ込められて
いるらしい。

場所までは教えてくれなかったが、監視役が無能だからボイス
チャットとかできちゃうんだよ」と言っていた。

スカさんのいる場所が何となく分かりそうだったのだが、面倒くさ
いので考えるのはやめた。

『そう言えばアレ見たかい?』

「バツ〇モービルの設計図? 見た見た。すげえよマジで作るなんて
!」

『あれくらい余裕さ。なんならコ〇ボイの設計でも……』

「それならハ〇クバスターのがいい」

下らない冗談を交わし合う。

ただ……ハ〇クバスターに関しては結構ガチだ。

「で、どうしたのスカさん? 連絡欲しいとか……珍しいな」

『うむ……実は困った事態が発生してしまつてね』

スカさんは深刻な声でそう言った。

「どうしたし」

『うむ……実は娘の着替え現場に遭遇してしまつてな』

「死ねよ」

スカさんが前に娘の写真を送ってきたことがある。

確か……ウーノさんとかいう名前だったと思う。

超美人だった。

『ちよつ、チヒロくん!! 真剣な悩みなんだ! あれ以来私を無視す
るようになって……』

「そのまま忘れ去られてしまえ」

こっちはビリビリ……じゃなくて格闘家中学生に終われる毎日な
のにきつちり覗きイベントこなしやがって。

『頼むよ、君だけが頼りなんだ!』

「あー……じゃあアレっすね。裸見たんだからスカさんも裸見せれば
いいんすよ。それでおあいこ」

『なるほど……確かにそれなら……！　ありがとうチヒロくん、感謝するよ！』

スカさんのボイスチャットが切れる。

……破滅しろ。

「あくあ、時間無駄にした。ネトゲやろ」

そうして俺はストラトスちゃんの言っていた通りに夕飯までネトゲをしてから宿題を終わらせ、その後入浴して眠りにつくのだった。

ちなみにストラトスちゃんは俺が寝る前までドアノブをガチャガチャやっていたので、夜食を作って郵便受けから渡してやった。

『はぐはぐ……料理がお上手、と……はぐはぐはぐ』

四話

「あ、先輩！」

朝、学校へと向かう道のりを歩いていると背後から声をかけられる。

「おれのうしろに誰かがいる！ 最近とりつかれたみたいなんだ」

「……朝から何言ってるんですか」

「……最近取り憑かれたのは嘘じゃないぞ。少し誇張表現になるかもしれないが」

振り向いた先には呆れ顔の黒い短髪の少女の姿があった。

彼女の名はリオ・グリズリー。

「よう、グリズリー」

「ウエズリーです！」

間違っていた。

「これが俺たちのいつもの挨拶だろ、ウエズリー」

「名前間違えるなんて失礼な挨拶聞いたことありませんよ！」

「じゃあ今聞けたな。感謝しろ」

朝から元気なガキンチョだ。

このウエズリーとは学校に行く道が途中まで同じなのだ。

「じゃ、また明日」

「あ、はい……じゃなくて！ 途中まで一緒でしょ！」

「でも一緒に行くとは言ってないよね？」

「え………いい、一緒に行きましょうよう………」

仕方ない。

泣き出しそうだから一緒に行くことにした。

「もう……先輩のばか」

「あんだと」

「なんでもないですよ！ それより聞いてくださいよ！」

ウエズリーは最近あったことを話し始める。

やれ、担任の先生がどうだとか、新しく知り合った子がどうだとか。

俺はというと彼女が口を開くたびに覗かせる可愛らしい八重歯を

見ていた。

「ですね、その時コロナって子が……ん？ どうしたんですか？
そんなに私の顔見て」

気付かれてしまったようだ。

さすがにこれだけ凝視してれば気付くか。

「あ、いや……」

「ん？ ……あ、さては……」

ウエズリーはニヤニヤしながら俺を見る。

そして変な科しなを作って俺に言った。

「私が可愛くてちゅーしたくなっただんですかあ？」

「お前の八重歯へし折りたい」

なに言ってるんだコイツ。

「先輩こそなに言ってるんですか!？」

「お前の八重歯へし折りたい」

「いやさつき聞きましたから！ 言葉じゃなくて理由！」

何でそんな怖いこというんですか、と憤慨するウエズリー。

「そんな怖いこと言う先輩なんてもう知りません！」

「ん？ あ、そういやここまでか」

ちやうど別れる道に来たようだ。

「じゃあな。事故には気を付けろよ」

「べくだ！」

ウエズリーが駆け足で俺から離れていく。

その先では同い年くらいの二つお下げの子が手を振っていた。

ウエズリーも手を振り返して彼女へと向かっていく……その

背中に俺は声をかけた。

「また明日な」

「……………はい！」

いい笑顔だ。

だから俺は……

「お前の八重歯へし折」

「先輩のばかあああああッ！」

五話

「あ、先輩！」

夕方、学校から家へと帰る道を歩いていると背後から声をかけられる。

「逃げるんだよオ！」

「……夕方から何を言ってる……あれっ!? こう言ったら止まってくれるんじゃないんですか!？」

「それはブルーベリー限定の話でストラトスちゃんには適応されない！」

いや、ミリタリーだったっけ？

忘れた。まあいいか。

「今は逃げることに専念するのみ」

「待ってください！ 今日こそお礼を……！」

「俺は気にしてないから！ はいオツケーというわけで追いかけてくんない！」

「それでは私の気が済みません！」

くっ……お礼一つでどこまで追いかけて来るんだ、こいつは。

「地の果てまでです！」

「辿り着くのは俺の家だよ！ つかナチュラルに心を読むな！」
なんてことだ。

今日俺には大切な用事があるのに！

「ストラトスちゃん！ 俺はこれから」

「駅前の本屋に行って今日発売の小説を買うんですよね？ 大丈夫です、私がもう買ってありますから。あとで代金だけ頂ければ。後、冷蔵庫の食材が少なくなってきましたからそれも買ってあ……あ！ なんて無言で速度をあげるんですか!? 待ってください！」

もうやだコイツ。

『チヒロさん！ 開けてください！ チヒロさんっ！』

今日も今日とてストラトスちゃんから逃げ切った俺はドアノブにかけてあったスーパーの袋を取ると中に入って鍵をかけた。

ストラトスちゃんはいつも通りドアノブをガチャガチャやっている。

とりあえず冷蔵庫に食材を入れると玄関へと向かう。

「……………」

『あ、5430円です。あとこれが580円でした』

郵便受けから本を受け取り、代金を渡す。

『えっと……はい、ぴったりです。それでは……開けてください、チヒロさんっ！』

再びドアノブガチャガチャを始めたストラトスちゃんを無視してパソコンの前に向かう。

「もう今日はネットゲしよう……」

『今日も』ではないんですか!? チヒロさん！ 開けてください！』

うるせい。

パソコンを起動する。

「さあ今日はどの狩り場行くかな……お？ ライジンさんいるじゃん！」

ライジンさんはよく協力プレイをするプレイヤーだ。

早速チャットする。

「ちーす。ライジンさん久しぶりっす」

「おーヒロヒロ！ おひさー！」

「一緒にしてもっ」

「いーよー！」

！
さあ、今日もライジンさんと胸踊る熱き冒険の（電脳）世界へ……

「ん……うお、もう11時か!？」

あれからずっとネットゲをしていた。

いまだにストラトスちやんはガチャガチャやっている。

「さすがにもうやめるか。風呂も入ってなければメシも食ってないし」

明日も学校がある。

準備もあるからな……宿題とか

『チヒロさんっ！ チーヒーローさーんー！』

あれへの対策とか。

“すみません、ライジンさん。俺そろそろ落ちるっす”

“えー!? もう!? もっとやろうよ!”

“明日も学校とかあるんで”

ライジンさんは駄々っ子のように渋るが、週末に飽きるまで（もしくは月曜が来るまで）付き合うということで納得してくれた。

“じゃあ落ちますね。今日は助かりました。ホントに頼りになります、ライジンさん”

“えっへん！ ボクは強くてスゴくてかつこいいから当然だよ！”

じゃあまたね〜!”

ライジンさんがお決まりの台詞を言ったところでゲームを終了する。

「ふう……じゃあメシ作るか。あ、あと風呂も焚かないと」

「……その後、宿題も終わらせ眠りについた。

何か忘れてるような気もするが……思い出せない。

あとストラトスちやんにも夕飯をやった。

郵便受けから。

『んぐんぐ………けぶっ。……き、聞かれてませんよね?』

ばっちり聞いたぞ。

六話

今日は学校が創立記念日で休み。

ストラトスちゃんも普通に学校があり、俺の前には現れない。

なんて素晴らしい日だ！ ……と、思っていたのに。

「お願いやあ！ 何でもええから食べさせてえ！」

「るっせえ失せろ乞食女^{こじき}！ うちが飯屋じゃねえって何回言えば理解

すんだてめえは！」

今日はいいつに襲来されて気分は下々。

針なんて落とせない。

「お願いや、チヒロ！ お腹空いて倒れそうなんや！」

「知らんがな！ ビリビリお嬢様んどこ行きやいいだろ！」

「チヒロがええの！」

「訳分かんねえこと言うな！」

ジークリンデ・エレミア。

それがこの乞食女の名だ。

前に行き倒れていたのを助けてやったらうちの食料品に寄生してくるようになった。

「チヒロお！」

「泣きついたって無駄だぜ無駄無駄！」

今まではなし崩しに冷蔵庫の中を食い尽くされて来たが、今日は違う。

「何を言ってもノーだ！ 今日という今日は絶対に——」

「おっぱい揉ましてあげるから！」

「——とりあえず上がれよパスタでいいか？」

「ぶへあ〜……ごちそうさま、や」

結局、冷蔵庫の中は食い尽くされてしまった。

「パスタが出来上がるのを待てなかったらしい。ちなみにパスタも全部食べていた。」

「……まあどうせストラトスちゃんが買ってきてくれるからいいけどさ。」

「……最近ストラトスちゃんの行動を受け入れ始めてる自分がいるから怖いよな」

「ん？　なんか言うた？」

「いや、なんでもない」

「そんなことよりも。」

「おい、揉ませろよ」

「ん、ええよ」

「了承も得られたので早速……」

「……ヴィクターのやけど」

「……はあ？」

「今日はそれで来たんよ。一緒にヴィクターのどこ遊びに行く？」

「待てよおいちよつと待て」

「何を言ってるんだこいつ。」

「おっぱいは？」

「ヴィクターの」

「お前のは!？」

「えっ……うーん……ち、ちゆうしてくれたら考えても………つて、ホンマにやろうとしなくてええから！　ちよ、ま、すとつぷ！　すどつぷやっつてー！」

「すつかり騙されてしまった。」

「もう二度とこいつは信用しない。」

「……こ、ここのうのはちゃんと段階を踏んでやな………」

「……はあもうお前帰れよ」

「あ……そんな怒らんといてよ」

「別に怒ってないし。」

「激おこなだけだし」

「怒ってるやん!?! なあチヒロ、機嫌なおして?」

ジークが後ろから抱き付いてくる。

「やめろ暑苦しい」

「……嫌?」

「嫌だね」

むー、と唸ってジークはさらに抱き付きを強めてくる。

普通に苦しい。

「なあ、ヴィクターのどこ行く?」

「嫌だ。せつかくの休日なんだ。ゆっくりしたい」

「そんなこと言わずに!」

「どんなことを言われても俺は——」

「おっぱい揉ましてあげるから!」

「何してるさっさと行くぞ!」

七話

「ヴィクター！ 遊びに来たでー！」

ジークに『無理やり』連れられて、ヴィクターことヴィクトーリア・ダールグリユンの屋敷へと来ていた。

もう一度言うが『無理やり』だ。

別に騙されてなんかないし。

「あらジーク、いらっしやい」

ヴィクターは屋敷の庭でティーセットを準備していた。

傍らには執事のエドガーもいる。

「……よう。久しぶりだな、へちやむくれ。元気にしてたか」

「ええ、それはもう。あなたこそ元氣そうでなによりですわ、ドブネズミ」

「……こいつ。」

「おー、元氣有り余りすぎて困ってるくらいだぜ。この前なんて元氣すぎて4時間くらいお尻カスタネットしてたわ」

「私は5時間ですわ」

「あ、悪い間違えた。6時間だったわ」

「すごいですわね。『毎日』5時間の私では到底足元にも及びませんわ」

あはははは。

プツツンしたぜ。

「てめえ！ やんのかコラ！」

「上等ですわ。どこからでもかかってきなさい」

「ちよ、二人とも喧嘩はやめてや！」

ジークが慌てて止めてくるが関係ない。

「てめえはもう少し可愛くできねえのかよ！」

「あら、十分可愛くしてると思えますけれど」

「内面と外面だけな！」

「……それって全部やないの？」

どうしてこいつは可愛くできないのか。

ジークに紹介されて初めて会ったときからこんな感じだった。

「あなたこそ、もはやひた向きなまでのその失礼な態度をどうにかしたほうがいいですよ」

「余計なお世話だ！ 『ヴィクターはチーくんのこと大好きだにやん』 って言ったら考えてやるよ」

「ヴィクターはチーくんのこと大好きだにやんっ♡ ……これでいいかしら?」

「……も、もう一回………あ、録音させて」

録音させてくれた。

「むう……二人って仲ええよね」

「はあ? 何言ってるんだ急に」

ティーパーチーがスタートしてしばらく経ってから、突然ジークがそんなことを言い出した。

ジークは頬をどんどん膨らませていく。

「ズルい……」

「なあヴィクター、こいつ何言ってるの?」

「さあ?」

ヴィクターは我関せずとも言うかのように紅茶を楽しんでいる。

仲良いつて言われても……

「こいつとは妄想だけの関係だぞ?」

「も、妄想?! 妄想ってなんや!?!」

「こらチヒロ、言葉に気を付けなさい。それではまるで私が毎日あなたの妄想をしているようではありませんの」

俺の言葉を聞いたジークがわめき散らしていると、それまで紅茶を飲んでいたヴィクターが話に入ってきた。

「せいぜい週に5回程度ですわ」

「まじか。俺、週4だわ」

週6まで回数増やすか。

「……やっぱり仲ええやん」

「そうか？」

「そうでしょうか？」

そんな意識全くないけどな。

気が合うとは思うけど。

「やっぱり……もつと積極的に……」

「おいジーク？ 何ぶつぶつ言ってるんだよ」

真っ赤になって俯くジーク。

ぶつぶつ何かを言っていたかと思ったら何かを決意したかのよう
に顔を上げた。

「……じ、ジークはチークんのが好きだにやんっ！」

「あ、ヴィクター。お前のガブリアス頂戴？ さつき捕まえたケムツ
ソやるから」

「ガルーラならいいですわ」

「む、無視せんといてっ！」

八話

それはダールグリユン邸での秘密のお茶会（意味深）が終わり、本屋に寄ってからの帰り道のことだ。

ジークとは本屋へ行くときに別れ、今は一人で道を歩いている。お目当ての本は売り切れていたが、ストラトスちゃんから買っておいたというメールが来ていた。

……アドレスも買いたい本のことも教えた覚えはない。

「ん？　なんだコレ？」

道端でぐにゅぐにゅ蠢いている黒い物体を発見した。

最初は犬のアレかと思った。

「……動いてるなあ」

めちやくちや動いている。

それはもう気持ち悪いほどに。

「持って帰ってみる……か？」

黒い物体を指で摘まんで持ち上げる。

「おお……何だこの不思議な感触！」

冷たいスライムのような……けれどもどこか暖かいソレ。

よし、決めた。

「育てよう！」

「で、持って帰ったんだけど……どう思う？　ウィーズリー」

「ありえないです。あとウエズリーです。その間違いはやめてください
い」

「ナメクジ食らえ！」

「やめてくださいってば！」

翌日、いつものようにウエズリーと登校。

昨日の黒い物体のことを話ながら歩く。

「それで、それはどうしたんですか？」

「植木鉢に植えた」

「植物ですか……」

ウエズリーが呆れている。

このままでは先輩としての威厳が……話題を変えなくては！

「ところでロン」

「ウエズリー！ もしくはリオ！」

「お前の八重歯へし折りたいんだけど……」

「唐突！」

いやいつも言ってるじゃん。

「だめ？」

「ダメに決まってるじゃないですか！ そ、そんなに悲しそうな顔しないでくださいよ……」

断られてしまった。

「はあ……はああああ」

「そんなこれ見よがしにため息されても……。こ、これじゃあまるで私が悪いみたいじゃないですか」

はああああああああ……。

「う……も、もう……仕方ないですね！」

「……ん？」

ウエズリーが正面に来て口を大きく開いた。

「……折っていいの？」

「触るだけ！ 触るだけなら……いいです」

チヨロい。

「それでは失礼して」

「……ふあっ」

歯の先端を指先でトントンと触る。

ちくり、と小さな痛みが走った。

結構鋭いんだな。

「ひゃう……ひえっ、ひえんぱい……！」

次は指で摘まむ。

ウエズリーは顔を真っ赤にして目を閉じていた。

心なしか目元が潤んでいる。

「ひえんぱい……………ひえ、ひえんぱい？ ひよっ、いらい！ いらいれすー！」

「このまま……………！」

「ガブウツッ！」

「あいたツッ!」

「噛まれた。」

「思わず手を引つ込める。」

「お、お前今本気で噛んだろ!？」

「はあ……………はあ……………せ、先輩は本気で折ろうとしましたね!？」

「いいって言ったじゃん!」

「触るのだけです!」

「なんてガキだ。」

「親に人の指は噛んじやいけないと教わらなかったのか？」

「うわ……………血い出てんじゃん」

「指を見るとうつすらと血が出ていた。」

「指を口に含む。」

「ふやつ!?! せ、先ぱっ……………な、何して……………っ!?!」

「ウエズリーが顔を真っ赤にして焦り出す

「どうでもいいけど。」

「それより指が痛い。」

「あー痛い痛い。誰かさんのせいで指が痛いわあ」

「あ、あうう……………っ!」

「ウエズリーのやつは真っ赤になったまま俯くだけ。」

「おい無視か。」

「ウエズリーちゃん？ 人の話は聞きましようねー?」

「うう……………!」

「聞いているー? 聞いてないよねー? 無視かコラ」

「顔を覗き込むがますます顔を赤くするだけ。」

「あらあらウエズリーちゃん。どーちたの? お熱あるの?」

「あうあう……………!」

はにゅーん。

やっぱり無視ですか。

「だいじょうぶー？ 歩けるー？ おてて繋いであげまちょうかー？」

「……………つなぐ」

「……………え？」

こうして、何故か別れ道までウエズリーと手を繋ぐことになった。

「どうでもいいけどウエズリー、お前手汗かきすぎ。ヌルヌルして気持ちわ」

「先輩のばかあああああッ！」

九話

昔、ある著名人が言った。

“人は自ら悪魔を創る”と。

「……人がまるで塵のように吹き飛ばされた。

著名人が言ったから俺も言ってみた。

これで2人の著名人と1人の一般人が言った言葉になる。

「……彼女へと光が集まって行く。それは星の誕生を彷彿とさせた。

俺は……最初から話そう。

「……スターライト……」

物語の初めから。

「は？ 管理局へ？」

学校から帰宅すると、ちょうど通信が入っていたことに気付く。

出てみるとジークとヴィクターだった。

『ええ。ぜひ見学に入らせてくださいと言われてまして』

『私もたまたまその場ウチにいてな』

「へえ……いつなんだ？」

『明日ですわ』

なんでも管理局のお偉いさんにそう誘われたらしい。

ただ、その人は重要な会議で来られないから違う人が来て案内してくれるそうだ。

「よかったな。行ってこいよ」

黒いぐにぐにゆを植えた植木鉢に水をやりながら答える。

『えー……チヒロも行ンーや』

「えー……」

ジークが駄々っ子のように誘ってくる。

正直面倒くさい。

つか、

「明日普通に学校あるんだけど……」

『それは私が何とか公欠にしますわ』

何とかって何だよ。

公欠で……完全に私情じゃねえか。

『てゆーかチヒロ？ さっきから聞こえるこのガチャガチャって音なんなん？』

「あー……あれだ、猫。猫がいたずらしてる音」

……チヒロさん、開けてくださいにやん！

「うっせーぞ、通信中だ静かにしろ。あと普通に聞いてんじゃねえよ。プライバシーの侵害だぞ」

……ごめんにやさい……。

許さん。

『チヒロ、猫なんて飼った？』

「野良猫だ。かなりデカイ」

話を戻そうか。

「悪いけど学校行くわ。だからパス」

『えー！ 行こうや行こうやー！』

「パス」

なんて言われてもパスだ。

なにせ……

「ほらテスト近いし」

『チヒロなら余裕やろ！』

「今回は全教科満点取りたいんだよ」

取れたら委員長（♀、超巨乳）が胸揉ませてくれるって言うし。

絶対取る。

死んでも。

『おっぱい揉ましてあげるからー！』

「委員長の胸はお前ごときでは敵わない。しかもどうせまたお前のじゃないんだろ？」

『……委員長？ チヒロ、どういうことや？』

「後半ガン無視かよ。しかもなんで不機嫌？」

なんかジークが不機嫌になった。

『説明して』

「全教科満点取ったら委員長が胸揉ませてくれるって約束」

『それは……男やよね？』

「女に決まってるんだろ頭湧いてんのか」

なんで俺が男の胸なんぞ揉まなきゃならんのか。

本気でジークの将来が心配なった瞬間だった。

『……来てくれたらホンマに私のおっぱい揉ましてあげるで！』

「委員長のがいい」

『なんでや!?!』

委員長可愛いし。

胸おっきいし。

「ちなみに満点取れなかったら買い物に付き合わなくちゃいけない」

『それって……デートやん!?!』

「そうとも言う」

『勝っても負けても天国ですわね』

ジークが唸る。

なんでかはわからないけど。

「とにかく！ 明日は学校に行くから、悪いけどパーパー」

『チヒロ、一緒に管理局見学に行きましょう?』

「パーパーわかった行く」

『なんでやあああああッ!』

十話

翌日。

ヴィクターが車で迎えに来た。

運転してるのはエドガーだけだ。

「さ、チヒロ。行きますわよ」

「うーい」

車に乗るとそこにはすでにジークの姿があった。

超不機嫌そう。

「よう、ジーク。なにむくれてんだよ」

「……別に」

どかつ、とジーク隣に腰かける。

「あー……あれか。あの日か」

「デリカシーがないですわよ、チヒロ」

そんな会話にもジークは無反応。

本気でどうしたんだ？

「ジーク？」

「……ふん」

「ジークちゃんってば」

顔を除き込むがすぐにそっぽを向いてしまう。

「……別に私^{ウチ}のことなんてどうでもええんやろ？」

「はあ？」

「ああ……ほら、昨日の通話でのごとじやないかしら？」

昨日の通話？

……ああ、あれか。

「野良猫のこと？」

「委員長って人の胸のがええって言うた！」

は？

「私^{ウチ}が言うても渋ったのに……ヴィクターが誘ったら一発でOKした

！」

「え、なにになに？ どういうこと？」

「はあ……ジークは嫉妬しているのですわ」
嫉妬？

……俺に？

「その顔は何も分かっていないようですわね……つまり、自分よりも他人を優先されてジークの乙女心はボロ雑巾のごとくズタズタにされたのですわ」

「う、ん？」

分かったような分からないような。

とりあえずジークのご機嫌を取ればいいのか？

「そういうことです」

なるほど。

やるべきこととヴィクターが心を読むってのはわかった。

「なあジーク」

「……なんや」

「あー……ほら、お前がそんな態度だと寂しい」

「……嘘や」

拗ねてるなあ。

「嘘じゃないって。お前居なかったらつまんないだろうし」

「……ホンマ？」

「ホンマホンマ」

ジークが顔をこっちに向ける。

「な？ 今日是一緒に回ろうぜ？」

「……一緒？」

「ああ、一緒だ」

「というか「一緒以外の選択肢はないのですが……」

ヴィクター少し黙ってる。

せつかくいい感じに機嫌直ってきたのに。

「絶対やで？ 絶対一緒やで？」

「わかってるって」

「この男……本当にクズですわね。妄想が^{はかど}拂りますわ」
ジークが腕を組んでくる。

すつごい上機嫌そうだ。

「えへへ……！」

「……ま、可愛いからいいか」

じやれてくる仔犬みたいで。

「か、かわ……!? えへへへ……！」

「この男は……。しかも狙ってないのがまた……」

「さ、着きましたわ」

「おお、でかいな！」

やっと今日見学する管理局の施設前に到着。

……やつとと言うほどの時間は経ってないが。

「えへへ……」

「ジーク、そろそろ戻ってきなさい？」

ジークは俺の腕を抱いたまま離れない。

何を言っても『えへへ』と笑うだけ。

「はあ……もう案内してくれる方がいらっしやるというのに……」

「そーいや誰なんだ？ 案内してくれる人って」

「……あ、君たちかな？ 今日見学に来る子っていうのは」

ヴィクターが俺の質問に答えようとした瞬間、女性の声が聞こえた。

「初めまして！」

声の方へ振り向く。

俺の視線の先では、彼女の頭の横で一つに束ねられた栗色の髪が揺れていた。

お、俺はッ！ あの人の事を知っているッ！

「私は高町なのは！ 今日わたしがこの施設を案内させて貰います。よろしくね？」

高町なのは。

エース・オブ・エース。

管理局屈指の英雄がそこに立っていた。

十一話

「でね、ここが……」

エース・オブ・エースの案内の元、施設内を巡る。
俺とヴィクターは彼女に気付かれないように話していた。

「なあ、あれって本当に……」

「え、ええ。高町なのは一等空尉その人ですわ」

ヴィクターもこの事を聞かされていなかったらしくかなり驚いていた。

「マジか。あれが世にも名高き管理局の……」

「エース・オブ・エース……」

「白い悪魔か」

「は、はい!! 何ですのそれは!?!」

知らないのか。

「ただなあ……」

「……ん? どうしたんですの?」

何だかこの人……。

と、じっと見ている俺に気付いたのか高町一等空尉が振り向いた。

「ん? 何かな……えっと、チヒロくんだったけ?」

「あ、いや……」

瞬間、背後から視線を感じた。

振り向くがそこには誰もいない。

「……今、何か……」

「……ねえ、君、今の」

「あの、高町一等空尉? こちらの部屋はいったい何をするとこころな
んですの?」

「……あ、うん。ここはねー」

「さて、それじゃあ最後は訓練の様子を見学してもらおうかな」

「エース・オブ・エース教導の訓練ですか……」

「楽しみやね！」

ジークはいつの間にか復活した。

そしてあの後も例の視線はついてきていた。

今も感じる。

「うくん……」

「どうしたんや、チヒロ？ 途中からなんか様子が変やで」

「ジークは途中からまともに戻りましたわね」

最初はストラトスちゃんかと思ったのだがいつもの時間（俺の下校時間）が過ぎたあたりで、あの植木鉢に芽が出ていたとメールが来ていた。

写真付きで。植木鉢は俺の部屋のなかにあるはずなのに。

どうやって入ったんだ、あいつ……っ！

「よう、なのは。そいつらが例の客か？」

「あ、ヴィータちゃん」

なんかロリがやって来た。

高町一等空尉と同じ服を来ているところを見ると局員なんだろう。

「紹介するね。こちら私と同じ教導隊のヴィータちゃん」

「よろしくな」

ふむ……。

年下なのか……それとも年上なのか。

それによつては方法も変わる。

「一応言っておくがあたしは『大人』だからな！」

年上か。見えないけど。

ならば……。

「なるほど……確かに『大人』なオーラに溢れていますね」

「……ん？ お前……なかなか見る目があるな」

食いついた。

「こう……頼りがいのある『大人のお姉さん』とでもいいですか……」

「……お前、名前は？」

「篠崎チヒロです」

ヴェータさんが超笑顔で近寄ってくる。

「なあ、チヒロ。お前腹減ってねえか？　アイス好きか？」

「……まあ、好きか嫌いかで言えば愛してますね」

「そ、そうか。待つてるよ、買ってきてやるから！」

「あ、お構い無く……っって行っちゃった」

ヴェータさんが走っていったのをしっかりと確認する。

「ヴェクターヴェクター。あのちまいのチョロいわ」

「みたいですね。グツジョブ」

「あ、あはは……ゆ、ユニークな子たちだね……」

「すいませんすいません！　本当にすいません！」

なんでそんなに謝ってたんだジーク。

わけワカメ。

「さ、さあ！　じゃあ気を取り直して訓練始めよつか！　よろし……」

気合い入れちやうよ！」

……かくして、ワンサイドゲームが始まった。

十二話

「……人が塵のように吹き飛んだ。」

「ほらほら、みんな！ 気合いが足りないよ！」

「いやあ……気合いとか関係あんのかなコレ……」

人ってあんなに跳ねるんだな。

はじめて知った。

「え、エグいですわね……」

「うわ、魔力収束し始めたで……」

「……スターライト……ブレイカアアアアアツ！」

光の奔流。

もはや圧倒的暴力とも呼ぶべきそれは、訓練生たちを飲み込んだ。

「あ、悪魔たん……」

「あれが悪魔？ 違います……あれは魔王ですわ」

「ひでえ言いようだな……まあ、わかるけどな」

「あ、ヴィータさん」

いつの間にか、手に買い物袋を下げたヴィータさんが隣にいた。

「ほら、アイスだ。全員分あるぞ」

「俺、バナラ！」

「では抹茶で」

「私はチョコレート！」^{ウチ}

「じゃあ……あたしはストロベリーだな」

綺麗に別れたな。

袋を開けて一口食べる。

「うまうま」

「チヒロ、一口交換しません？ はい、あーん」

ヴィクターが抹茶アイスの乗ったスプーンを差し出してきた。

「あむ……うまうま。ほれ、あーん」

「はむ」

「……な、なあ。お前らアレか？ 恋人とか……」

「違います」

「違いますわ」

なんでそう思ったのか。

あ、ヴィータさんもアイス食べたいのかな。

「はい、ヴィータさん。あーん」

「う、うえっ!? あ、いや、でも……」

「じー……」

ヴィータさんは俺の後ろの何かを気にしているようだ。

振り返ってみてもジークしかない。

「溶けちゃいますよ」

「う……!」

「ほら! あーん、です」

「あ、あーん……」

観念したのか、やっとヴィータさんは口を開いた。

「おいしいですか?」

「お、おいしい……けど……」

「じいじい……」

「……何だよジーク」

声に出して言うなよ、じいじいとか。

「……私もアイス食べたいな^{ウチ}」

「食べば?」

お前も貰ったじゃんか。

チョコレートアイス。

「バニラアイスが! 食べたいな!」

「……別にいいけど。ほれ」

アイスを容器ごと差し出す。

「……一口がええな!」

「だから食べよ」

「一口! が! ええ! な!」

何なんだよ一体。

「あーん!」

ああ、そういうことね……。

一口分のアイスをすくってジークの口に入れる。

「はむ……えへへ……！ あ、チヒロも食べる？」

「いらん。ヴィータさん一口下さい」

「あ？ あ、ああ……か、構わねえけどさ」

「むううう……！」

ヴィータさんがアイスをすくって差し出してくる。

んむ、ストロベリーアイスも実にうまい。

「ンマイなああああーッ！」

「そ、そんなにか!？」

「ブツチュウウウ」

「ヴ、ヴィクター？ 急にどうしたん……？」

流石だな、ヴィクター。

「あなたこそ」

二人でサムズアップを交わす。

ジークとヴィータさんは何のことか分かっていないようだ。

「……あ、みんな！ 見ててくれたかな？」

「あっ」

訓練が終わったのだろう、高町一等空尉がやって来た。

やばい。

全然見てなかった。

「あ、な、なのは？ 実はその……」

「みんなが見てたからね。恥ずかしいところは見せられないから……」

ちよつと頑張っちゃった！」

「……集合！」

ヴィータさんの掛け声に高町一等空尉を除いてその場にいた全員が集まる。

小声で作戦会議開始。

「……どうする？」

「いや……誤魔化すしかねえだろ」

「で、でも正直に話した方がええんやない？」

「……ジークはあの収束砲を喰らいたいんですの？」

……仕方あるまい。

「我に策あり」

「ま、マジかチヒロ！ 頼む！」

「大丈夫なん……？」

「大体想像できますわね……ご愁傷さまですわ」

ヴィクターはそう言つてヴィータさんの肩に手をおいた。

「どうやら分かったようだな。」

「……ああ、そういうことなんや……」

「え？ え？ な、なんだよお前ら？」

「気付かれる前にやるか。」

「高町一等空尉！」

「ん？ 何かな、チヒロくん。あ、高町一等空尉じゃなくてなのはさん

「でいいー」

「ヴィータさんとアイス食べてたので訓練見れませんでしたごめんな

「さいー」

「……よ……？」

「はあっ!? おま、何言つて……!?」

「甘いぜ、ヴィータさん。」

「私たちは見たかったのですが……ヴィータさんに無理やり……」

「私^{ウチ}なんてデバイスで脅されて……！」

「……ヴィータちゃん？」

「ま、待てなのは！ おいお前ら！」

「さらにジークとヴィクターの援護射撃。」

「俺たちは一を犠牲にして九を救う。」

「ヴィータちゃん。ちよつと……お話、しよつか？」

「てめえら覚えてろよオオオオオオオツ！」

十三話

夕方になり、ついに管理局見学は終了を迎えた。

とりあえず管理局の魔王、その力の一端を見ることができたので非常に有意義な時間となった。

高町一等空尉が生きている限りは平和が続くんだと思う。

「どうだったかな、チヒロくん」

高町一等空尉が話しかけてきた。

ちなみにヴィクターとジークは俺たちに売られてむくれてしまったヴィータさんをなだめている。

「いやあ……なんて言うか……大変ですね」

あなたに追われる犯罪者が。

「あはは、そんなにお仕事って大変じゃないよ？」

「ああ、それではなくて……」

「あれ？ 違った？ じゃあ何かな？」

「いえ……なんでもなーなーっ!?!」

またあの視線だ。これは……すぐ後ろからだ。

勢いよく振り向く。

そこには……

『ハア………ハア………なのは………ハアハア………』

ああ………なのは………ハア………!』

「なんっ……!?!」

何かいる。

ハアハア言ってる変なのがいる。

それは壁の影に隠れて顔を半分だけ覗かせてこちらを……高町一等空尉をただひたすらに見つめ続けていた。

「やっぱり……チヒロくんはアレが分かるんだね？」

「な、何ですか……あれ」

高町一等空尉の方を向く。

彼女は神妙な顔をして切り出した。

「アレはね、なぜか他の人には正しく認識できないの」

「正しく認識できない……？」

「うん。親友にも相談したんだけど……たまたまそこに居合わせただけでしょうって言われるだけなんだ。他にも上司とか後輩とかにも相談したけどみんな同じ答え」

いやアレはそんな生易しいもんじゃないだろ。

居合わせたとかそんな次元じゃない。

「しかも私以外の人間では見つけることすらできなかった……そう、君以外は」

やばい。

なんか予想ついた。

「……ユーノ・スクライア。無限書庫の総合司書長にして、私のストーカー」

「……高町一等空尉。これ見てください」

ストラトスちゃんからのメールを見せる。

「これは？」

「今日、見学中にきたメールです」

高町一等空尉が端末の画面から顔を上げ、俺の顔を見つめる。

「……まず、こいつにアドレスを教えた覚えはありません。しかもこの添付されている植木鉢の写真ですが……これ、俺の部屋の中にあるんです」

高町一等空尉が目を大きく見開いた。

俺も彼女を見つめ返す。

「それだけじゃありません。俺の行動はすべて筒抜けで、下校する時は追いかけられます。家に帰っても明け方までドアノブをガチャガチャさせ……そんな毎日を送っています」

俺の現状を告げたあと、数秒の間、無言のまま見つめ合う。

そして……

「チヒロくんッ!」

「高町一等空尉……いや、なのはさんッ!」

ひし、と抱き合う。

「辛かったよね……怖かったよね……わかる、わかるよ!」

「そちらこそ……あんなのに……!」

『ハアハア……なのは………NTRプレイかい……? それはそれで………!』

悲惨だ。

俺なんかよりずっと。

まだストラトスちゃんのが可愛いげがある。

「チヒロくん……もう一人じゃないよ。これからは………私がいるから………!」

なんと心強いことか。

魔王とか言つてごめんなさい。せいぜい悪魔くらいでした。

「強く生きていきましょう!」

「うん………そうだね!」

——この日、俺は親友^{同志}を得た。

「何やってんだ………あいつら」

「さあ………?」

「むうううう………!」

『ハアハア………なのは可愛いよなのは………ハア………ハア………!』

……さすがにストラトスちゃんをこの人と同列に語るのは可哀想かなあ………?

十四話

『つまり、繋がりというものは永く続くのです……時代や世代を越えて。特に魂の繋がりというものはそれが顕著で……』

「……ふうん」

朝から電波なTVを見ている。

「繋がりか……」

植木鉢に水をやる。

芽はすでに10cmほどまでに成長していた。

成長早くない？

しかもなんか黒っぽいし。

「……繋がりねえ」

しかし、植物のことよりもTVで言っていた『繋がり』という言葉が俺の頭のなかで延々と渦を巻いていた。

管理局見学から数日後。

今日はなのはさんに誘われ、彼女の家へ遊びに行くことになっている。

簡単に言うと第一回被害者の会だ。

「……ここか」

教えられた住所につく。

……なかなか良いところに住んでるなあ。

「いや、エース・オブ・エースにしては質素な方なのか？」

もつところ……魔王城的なのを想像してた。

まあいいか。

インターフォンを押す。

『はいー』

しばらくして扉の向こうから声が聞こえた。

なのはさんだ。

「あ、どうも。チヒロです」

『チヒロくん、いらっしやい！ 待ってたよ！』
扉が開く。

「こんにちは」

「こんにちは！ さ、入って入って！」

お邪魔します、と言ってなかに入る。

綺麗な内装だ。

「娘の友達が来てるんだけど……多分部屋に行くと思うから。リビングでお茶しよう？」

「お任せします。ていうか娘さんいたんですね」

「まあ色々あってね。あ、別に結婚とかはしてないよ？」

まじか。

それってなおアレじゃね？

……まあ、人にはそれぞれ事情があるよな。

「……ん？ 何か誤解してない？」

「……色々あったんですよね。人には言えない色々が」

「待って、そんなしみじみと言わないで！ 完全に誤解してるから！」

「わかるよお……！」

「何が!？」

その時、複数の賑やかな声が向かう先から聞こえてきた。

おそろくなのはさんの言っていた娘さんのご友人たちだろう。

「さ、ここだよ」

「ほほう……確かに誰かいますね」

「うん。親友とさつき言った私の娘、あとその友達3人………と、庭にプラス1名。窓から見えるよ、多分」

「………ああ」

今きつと苦虫噛み潰したような顔してるんだろなあ、俺。

………そう言えば今日はまだ一度もストラトスちゃんを見てないな。

「………入ろうか？」

「………ですね。早く被害者の会やりましょう。ね？」

「うん……!」

なのはさんがドアノブへと手を掛ける。

そしてリビングへの扉が開かれた。

そこにはよく見知った顔が……え?

「なっ!?! す、ストラトスちゃん!?!」

「……チヒロさん?」

「せ、先輩っ!?!」

「……あれ? 知り合いだった?」

十五話

「なんでここに……」

「チヒロさんこそ……」

「先輩こそなんで……」

高町家にてストラトスちゃんと遭遇した。

つまり絶体絶命のピンチ。

「チヒロくん、知り合いなの?」

「リオ、アインハルトさん、知り合いですか?」

なのはさんと金髪の少女が同時に発した。

とりあえず相手の出方を伺う。

「……動か、ない?」

まさか……遠慮しているのか?

友達に。

そんな常識があるなら追いかけてまわさないでほしい。

「えつと……とりあえず座らない?」

今まで黙っていた金髪の女性が苦笑いをしながら言った。

……デカいな、あの人。

「ていうか先輩? 私のことスルーしてませんか? ……聞いてます?」

ねえ聞いてますか!」

パツキンチャンネルパイオツカイデー。

「どうぞ」

「……それはなんの真似だ」

「あ、アインハルトさん!」

目の前で四つん這いになるストラトスちゃん。

「座るんですよね?」

「椅子にな」

「はい。ですからどうぞ」

アカン。

言葉のキャッチボールが成立していない。

「えっ、えっと……こっちに座ってください!」

金髪の少女が気を使ってくれた。

頭を撫でやる。

「ありがとな」

「えへへ……」

なんか、妹……というか娘みたいに見える。

俺にくれ。

「あげないよ?」

「……同志のよしみでなんとか」

「ダメ」

ちっ。

「お茶いれてきたよ」

「ありがとう、フェイトちゃん!」

お茶を入れにいった金髪の女性が戻ってきて座る。

これで全員が椅子に座ったわけだ。

しれっとストラトスちゃんは俺の隣に座っていた。

反対側は金髪の少女だ。

「じゃあ……自己紹介しようか?」

「そうだね! じゃあ私から!」

隣に座る金髪の少女が俺の方を向いた。

「初めまして、高町ヴィヴィオです!」

「君がなのはさんの娘か……。初めまして、俺は篠崎チヒロ」

「よろしくお願ひしまーす!」

元気だな。

次に二つお下げの子が自己紹介を始めた。

「えっと……コロナ・ティミルです」

「……どっかで見たことあるような」

「あの……リオとよく一緒に登校してますよね?」

「リオ？」

誰だそれ。

「私ですよ！」

「……ああ、デジャネイロか」

「ウエズリーです！ 先輩のばか！」

思い出した。

分かれ道でよくこの八重歯を待ってる子だ。

「いやあ……うちの八重歯がいつもお世話になってるみたいで。大丈夫？ 迷惑してない？」

「い、いえ、そんな！ あ、そう言えばリオってば篠崎先輩の話ばかりしてて……」

「ちよつ、コロナ!？」

なるほどな。

そんで……このパイオツカイデーなお人は？

「フェイト・T・ハラオウンです。よろしくね？」

「名前長いつすね」

「あはは、よく言われる」

じつとハラオウンさんが俺を見つめる。

なんだ？

「……なんだろう、この子……こう、母性本能をくすぐられるというか……お世話してあげたいというか……」

「はい？ なんですか？」

「あ、う、ううん！ 何でもないよ！」

ボソボソと何か言っていてよく聞こえなかった。

「で、アレが例の……」

なのはさんが指差した方を見る。

そこには……

『ハアハア……なのは……なのはあつ……なのはあつ……ハア……ハアハア……なのはあああ……』

「うわあ……」

「ん？　なのはママ、庭に何かあるの？」

「う、ううん！　何でもないよ」

本当に他の人にはわからないのか。

「……で、チヒロくんのは？　いる？」

「……あー」

チラチラと横を見る。

視線の先には当然、ストラトスちゃんの姿がある。

「……え？」

なのはさんが驚いたように俺とストラトスちゃんを交互に見る。

「……………はい」

「ええええ……」

そう言いたいのは俺の方ですよ。

まったく……。

十六話

「え、えっと……チヒロくんはどこに住んでるの？」

俺となのはさんの間に流れる微妙な空気を察したのか、ハラオウンさんが話題を変えてきた。

「あ、俺は……」

「ここからそう遠くないアパートに一人暮らしをしています」

……おい。

「あ、アインハルト……さん？」

「なんででしょうかヴィヴィオさん」

「い、いえ……」

高町ちゃんの反応は間違っていないぞ。

「……な、名前の感じからもしかして地球出身？」

「いー……」

「いえ。お父様が地球出身の方らしく、チヒロさん自身はミッドで生まれています。ただ何度か旅行としては行っているようです」

教えた覚えはない。

しかもこれ俺への質問だよな？

「あ、ははは……」

微妙な空気再び。

そして、空気の読める高町ちゃんが話題変えるべく質問を投げ掛けしてきた。

「じ、じゃあ私から質問です！」

「お、おう！ なんだ？」

「あ、アインハルトさんとの関係は……？」

「わ、私も気になります！」

高町ちゃんの質問に八重歯が同調する。

こいつとの関係って……

「加害者と被害者だな」

「えっ？ サーヴァントとマスターの関係では……」

「お前サーヴァントほど高尚なヤツじゃないだろ。おこがましい」

「あ、あはは……」

なのはさん……苦笑いしないでください。

「恋人とかじゃなかったんだ……」

「よかったね、リオ！」

「こ、コロナあ！」

あれ？ そう言えば……。

ストラトスちゃんに小声で話し掛ける。

「……なんで俺が今日ここに来るって知らなかったんだ？」

「……チヒロさんは誤解しています。私はチヒロさんの全てを把握しているわけではないんですよ？」

そりやそうか。

「……まだ」

「おい今『まだ』って言ったか？ 言ったよな？」

『ハアハア………僕は………なのはの行動を全部把握しているよ………？ ……ハアハア………』

「ひい!？」

「……お前がああならない限りはまだ受け入れてやるよ」

「はい？」

アレよかマシだ。

なのはさんが不憫でならない。

「じゃ、じゃありオとの関係は!？」

「こ、コロナ!？」

「八重歯だけの関係」

「先輩のばかあああああッ！」

事実だろうに。

「あ、じゃあなのはとは？ どこで知り合ったの？」

今度はハラオウンさんが質問してきた。

「この前、チヒロくんとその友達が管理局の施設の見学に来てね。そこで知り合ったんだ」

「そうそう。で、親友になったんですよ」

「親友じゃなくてソウルメイトね」

「なのはさんッ!」

「チヒロくんッ!」

ガシツと握手する。

もはや言葉などいらぬ。

「いったい何があったんでしようか」

『ハア……ハア……謎の友情に燃えるのは……ううっ
……可愛いよおっ……ハアハア……!』

お前らのせいだよ。

「あ、お茶のおかわりいらしますか?」

「ん? ああ、ありがとう高町ちゃん」

「ヴィヴィオでいいですよ」

空になったカップを持って台所へと向かうヴィヴィオちゃん。

可愛い。

「お持ちか……」

「ダメ」

なぜだ。

「ああ、ヴィヴィオさん! チヒロさんのは私が……!」

「あ、ヴィヴィオ! チヒロくんのは私が……」

ストラトスちゃんは座ってる。動くな、二度と。

そしてなぜハラオウンさんまで……?

「むっ……ヴィヴィオ! 先輩のはわたしがやる!」

「あ、リオ待って!」

ついでにナントカちゃんとティミルちゃんもヴィヴィオちゃんの方へ行ってしまった。

「結局、被害者の会はできませんでしたね」

「まあ、仕方ないよ。また今度やろうよ」

「ですね」

「これはこれで楽しいし。」

「……圧倒的に女子率の高いお茶会は夜まで続いた。」

『ハア………ハア………なのはあ………ハアハア………可愛
いよなのは………ハアハア………!』

「目を合わせちゃダメだよ」

「わかっています」

十七話

「ここが、あの女のハウスね」

ある日の早朝、川原にあるジークの家に来ていた。

いや、テントか。

「さあ……やるか」

「……それは昨日の夜、ヴィクターとの通信のことだった。

『家族旅行……ですの?』

「ああ、そうなんだよ」

遠方で共働きしている両親から旅行に行くという連絡があった。

『そう。お土産よろしくお願いしますわ』

「考えとく。でさ、三日間くらいいいなくなるんだけどその間は植木鉢に水をあげられないわけ」

で、それを誰に頼むかなんだが……

『私がやりましょうか?』

「お前は俺の家来るたびにエロ本盗んでくからヤダ」

『あなただって私から時々盗むでしょう』

「だってお前の持つてるやつ好みのぼっかなんだもん」

とりあえずヴィクターはない。

ストラトスちゃんも。

「ジークに頼もうと思う」

『いいんじゃないかしら』

ただ……

「普通に頼んだらつまらないよな?」

『当然ですわ』

せっかくだから、旅行出発当日の早朝に寝起きドツキリを仕掛けた
い。

テツテレー、って言いたい。

「どうする？ 火い着ける？」

『それもいいと思いますが……私にいい案がありますわ』
ほほう。

聞こうか。

『それは……』

「お邪魔しまーす……」

文字通りな。

ジークは……よし、よく寝ている。

今のうちに隠しカメラをセットしておく。

「準備おけ。チヒロ、行きまーす」

あくまで小声なので若干盛り上がり欠ける。

まあ、いい。

ジークの隣に寝転ぶ。

「……で、腕枕するんだっけ？」

起こさないよう慎重に。

よし……フェーズクリア。

後は起きるのを待つだけだ。

「……………う、ん……………？」

ジークがうつすらと目を開ける。

「おはよう、ジーク」

「……………ふえ？ ちひろ……………？」

完全に寝ぼけてるな。

「おあよう……………」

「はい、おはよう」

大きな欠伸をひとつして、ジークは再び目を閉じる。

そして俺の胸へと頭を擦り付けてきた。

「ええにおい……………」

「……まあ、臭いって言われるよりマシか」

「えへへ……ちひろのにおいやあ……」

それどんな匂い？

「ちひろ……えへへえ……ちひろお……え？ ……ち
ひろ？」

「お、やっと起きたか？」

目がぱつちりと開き……というか大きく見開かれる。

俺の顔を凝視すると真つ赤になって慌て初めた。

……フェーズ2へ移行する！

「なっ、ななななんで!? なんでチヒロがおるん!？」

「なんでって……おいおい、恋人相手にそりやないだろ」

「こ、恋人おツ!？」

ちなみに今のお前は変人にしか見えないぞ。

「昨日だってあんなに愛し合ったじゃないか……」

「あ、あああああ愛いいいいッ!？」

嘘だけだな。

テントなんかで愛し合う趣味なんてちよつとしかない。

「まったく……お寝坊さんだな、マイハニー」

「はにいいいいいいいい!？」

いやあ……楽しいなあ。

さすがヴィクター。

なんでこいつがここまで慌ててるのか分からないが素晴らしい作戦だ。

「……やったんや……ついに私^{ウチ}やったんや……!」

「ジーク?」

今度はすごい喜んでる。

忙しいやつだな。

「ち、チヒロ? ホントに私^{ウチ}ら……」

「あ? あ、ああ」

「えへへへへへ……!」

ヨダレ垂らすなよ汚いなあ。

時間の関係もあるし、そろそろネタばらしするか。

「じゃ、じゃあ、おはようのちゅーを……」

「テツテレーっ！」

「……え？」

「ドツキリ大成功！」と書かれた看板を出す。

「寝起きドツキリでしたー！」

「ドツ……キリ………？」

「そうそう。ドツキリ」

ジークは状況が読めずにキョトンとしている。

バッチリカメラに収まっているのも知らずに。

「じゃあ……私^{ウチ}らは……？」

「恋人でもなければ愛し合ってもいないな」

いいねー。

いい画撮れてるよ。

「いやあ、最初は火でも着けようかと思ったんだけどヴィクターに相談したらこんな面白いことを考えてー」

ー。ジークに本気で首を絞められた。

「あんた……自分が数分前にしたこと忘れとらん？」
金髪幼女にセクハラしてたな。

「まあまあ。俺とジークの仲じゃないか！」

「……ハア」

ジークは呆れ顔だ。

だが俺は気になんてしないんだぜ。

「改めて言うが、今日から三連休じゃん？ それを使って家族旅行すんだと」

「……へえ」

「あ、お土産は期待してろよ。でき、うちに植木鉢があるんだけど俺がない間、水をやって欲しいんだよ」

ポケットからあるものを出してジークに渡す。

訝しみながらもジークはそれを受け取った。

「ほれ」

「……なんや、これ？」

「うちの合鍵」

「……………え？」

「は？」

「えつと……え？ なんて？」

「だから合鍵」

「合鍵……………あいかぎ……………愛、鍵？」

「そう合鍵」

鍵ないと部屋入れないからな。

一般人は。

「で……頼めるか？」

「あいかぎ……………あいかぎ……………えへへえ……………」

ジークはずつと鍵を見つめながらニヤけている。

聞いている？

「あー……………ジーク？」

「えへへえ……………あいかぎやあ……………えへへ……………」

……………なんかキモい。

さっさと離れよう。

「えつと……じゃあもう行くから。よろしくな」

「えへへへへへ……！」

全然聞いちやいない。

……最悪ヴィクターに頼むか。

まあなんとかなるだろ。

「じゃあな、ジーク」

「えへへ……！」

さて。

面倒なことは忘れて楽しむか、家族旅行。

十九話

家族旅行一日目（夜）。

ジークから植木鉢の写真付きのメールが来た。
ちやんと水をやってくれたようだ。

その後しばらくジークとメールをしていたらこれから帰るとい
うメールが来たので『俺のベッド使っていていいから泊まってけば？』と
送ったら返信が途絶えた。

家族旅行二日目。

胡散臭い占い屋に寄った。

占い師のばあは俺の左肩辺りを見ると『あんたの前世は金髪の女
だよ』とか言ってきた。

金髪幼女がいるのは右肩なのに。

夜にジークから写真つきメールが来た。

植木鉢の植物には黒い蕾が1つと……なんだろう、直径3cmほどの
実のようなものが出来ていた。

成長が早くて何より。

そして真夜中。

ふつくしきおっぱいとの出会いを求め、密かに混浴へ。

しばらくすると『ご一緒しても？』と後ろから女性に声をかけられ
たので『どうぞどうぞ』と言って振り向く。

ストラトスちゃん（全裸）だった。

ついてきやがったのだ。

当然、俺は逃げ出した。

部屋に入って鍵を閉め、布団を頭まで被ってガタガタ震えてた。

あいつ、頭、おかしい。

そして、家族旅行最終日の夜。

両親と別れ、俺はすでに1人ミッドに帰ってきていた。

今は自宅へと向かっている。

「ジーク喜ぶかな？」

手に持つジーク用のおみやげを見る。

「まりもっ〇りだ。」

金髪幼女には大ウケした。

今も俺の右肩で『もっこり』をオリジナルリテイ溢れる歌にのせて連呼している。

俺も一緒になって歌っていたらいつの間にかアパートに到着していた。

「さて……どうやって驚かすかな」

普通に行ってもつまらんし……。

いや、一周回って普通に行ってみるか？

斬新だな。

「……ざんしんざんしん♪」

金髪幼女からお墨付きを貰ったしこれで行こう。

鍵を開ける。

「ジーク、ただいま。今帰っ……」

「チヒロおおおっ！」

「へえあ!？」

いきなりジークが飛び付いてきた。

なにごと？

「お、おいジーク？ どうしたんだよ？」

「ち、チヒロっ！ あの花っ！」

花？

……もしかしてあの黒い蕾が咲いたのか？

「マジか。よし見てこよ」

「ダメや！ あの花危険や！」

は？

「意味が分かんないんだけど。どういうこと？」

「どうもこうもないで！ あの花、なんか蛇とか鎖とか出してきて襲いかかってくるんや！」

……え？

もしかしてジークさん……

「えっと……なんかキメてる？」

「キメてもないし嘘でもない！ 信じて！」

どうしよう。

親友がアブない薬に手を出していた件。

「だ、大丈夫だ。俺は友達を売ったりしないから。ほら、今すぐ逃げろって」

はよ出てけ。

「ちよっ、チヒロ!？」

「大丈夫大丈夫！ こんなんで俺たちの関係は崩れないからさ！ 大

丈夫だってジーク……いや、エレミアさん」

「崩れてるやん!？」

面倒ごとは嫌いだ。

「じゃあな〜！」

「あつ、まつ、チヒー〜」

赤の他人のエレミアさんを追い出して扉を閉めた。

外ではまだ騒いでいる声が聞こえる。

「マジかあ……薬物とかまったく関係ない世界に生きていると思ってたけど……。明日は我が身か」

気を付けよう。

部屋に入る。

「ん？ 机の上に何か……」

ああ合鍵か。

回収回収。

そんなことより植木鉢だ。

「おお！ 本当に花が咲いてる！」

黒い……なんだろう、百合？

百合によく似た花が立派に咲いていた。

そして、実のような物は5cmほどにまで成長している。

「これ……食べるのかな？」

エレミアさんに食わしてみるかな。
赤の他人だし、構わないだろう。
熟すのっていつぐらいになるんだ？

「明日学校サボって調べてみるかな」
いったい何の植物なのか。

この実が食えるのか。

今すぐ調べたいが、家族旅行で疲れているため今日はもう寝たい。
明日が待ち遠しい。

「チヒロお……ひつく……チヒロおおお………あいかぎいいいい
いいいいいいっ！」

二十話

朝起きると、植物の実が茎から落ちていた。
直径は10cmほど。

たった一夜でまた成長したのか。

「実が落ちたってことは……もう食えんのか？」

エレミアさん呼ぶ？

それにしても……こんな実、見たことないな。

「いったい何て名前なんだ？」

実を手取る。

割れた。

「……え？」

手元を確認する。

綺麗に真っ二つに割れていた。

「え、ええっ!？」

手に取っただけで割れるってどういうこと。

急いで断面を確認する。

そこに果肉はなく、中は空洞になっている。

そして俺が右手に持っている方の断面には何かがあった。

『……ん、う……』

ねんど○いどだ。

喋るねんど○いどが入っていた。

『……はっ!?!、こ、ここはいつたい!?!』

何か騒ぎ出した。

ねんど○いど(仮)はひとしきり騒ぐと落ち着いたようで、今は俺の
前で正座している。

さつきまで『な、なぜわたしは……。あのとききえたはずでは……
?』とか、黒い花を見て『なっ!?! まさか……ナハトヴァールか!?!』

なぜこんなすがたに……』とか『わたしのなかにまだのこっていたのか……?』とか舌つ足らずな声ですつごい厨二染みたことを言っていた。

意味はまったく分からなかったが。

「ふむ……実に面白い」

気分は教授だ。

俺は厨二の妖精を発見したぞ。

とりあえず……

「名前がいるな」

『……あ、ああ、そういうえばなのっていなかったな。わたしのなはリイン……』

「……ぐにゆ子。お前の名はぐにゆ子だ!」

『ぐ、ぐにゆ子!?! いや、いや、わたしにはしゆくふくのかぜというなが……!』

黒いぐにゆくにゆから生まれたからぐにゆ子。

うむ、いい名だ。

「よろしくな、ぐにゆ子」

『いやだからわたしは……っ!』

こいつのことを研究して学会で発表する。

俺は一躍有名人だ。

学会とかまったく関わりないけど。

「まずは解剖……」

『ま、まて! まってくれ! なにをかんがえているんだ、おまえは!?!』

……妖精の生態調査?

『わ、わたしはようせいではない! いいからきけ、わたしは……』

「ぐにゆ子。妖精。厨二病」

『どれもちがう!』

指先でぐにゆ子の頭をグリグリする。

腕でそれを止めようとしているが、当然ながら止められるはずもない。

人間VSねんど○いどだぞ。

『あぁっ!? ぐ、グリグリしないでくれ!』

「ぐにゆ子。お前はぐにゆ子。妖精で厨二病」

『だからちがうといっているだろう!』

グリグリを強くする。

『わぁっ!? やめてくれ! あたまがもげっ……わかった! ぐにゆ

子だ! ぐにゆ子でいい!』

「妖精」

『よ、ようせいだ……!』

「厨二病」

『ちゆうにびようだっ!』

「俺のペット」

『ぺっ……それはいつてな……わかったペットだ!』

認めたか。

頭を加減して撫でてやる。

「よしよし」

『あっ………おまえ、あたまをなでるのがうまいんだな……』

ぐにゆ子が顔を真っ赤にしてうつ向き。

何これ可愛い。

「ぐにゆ子可愛い」

『かっ……かわっ!? か、からかうのはよせ! わたしはかわいくな

ど……』

声に出してしまったようだ。

真っ赤になってさらにうつ向き姿はマジキュート。

「からかったつもりはないんだけど……まあいい。これからよろしく

な、ぐにゆ子」

『あ、ああ! よろしくたのむ……ん? まで! けつきよくなにも

かいけつしていいのではないか!? わたしがふっかつしたのは!?

ここはどこだ!? そもそもおまえはだれなんだ!?!』

細かいこと気にしていると禿げるぞ。

『こまかくはない! ちゃんとこたえろ!』

細かいこと気にしていると剥ぐぞ。

『ひいつ!?!』

打てば響くようにいちいち俺の言葉に反応するぐにゆ子。

面白いなあ。

「まあお前の気になっていることはおいおい話していくさ」

『それはいつだ!?!』

「そんな先のこととはわからないさ」

『おい!』

まあ何にせよ。

今日、ついに俺はペットを手に入れた。

……別にそこまで欲しいとかは思ってたけど。

二十一話

「あ、チヒロくん！ こっちこっちー！」

俺は今、とあるファミレスに来ている。

さつき俺を呼んだ声の主はハラオウンさん

なんでも話があるとかで、なのはさんから会ってあげて欲しいと言われた。

ちなみにぐにゆ子は家で留守番だ。

俺のスタンド
金髪幼女がそれを監視してくれている。

「お待たせして申し訳ありません」

「ううん。来てくれてありがとうね」

とりあえず何も頼まないのはあれなのでコーヒーを頼んだ。

話って何だろう。

確か執務官だったよな、この人？

……やましいことは何もないけど、なんかドキドキしてきた。

「いえいえ。それで話って？」

「うん……何て言うか……その、驚かないでほしいんだけど……」

最近驚かされてばかりだからな。

並大抵のことじゃ驚きませんよ。

「……家族に、なりたいんだ。君と」

超驚いた。

え？ なに？

もしかしてプロポーズ？

「……えっと」

「あ……やっぱり驚くよね」

そりゃ驚きますよ。

「お待たせしました、ご注文のコーヒーです」

「あ、どうも」

頼んでいたコーヒーがきた。

一口飲んで気持ち落ち着かせる。

「……………どういうことですか？」

「チヒロくん、うちに来たときに一人暮らししてるって言ってたよね」

「ああ、はい」

厳密に言えばストラトスちゃんだけだな。

「私もね、昔に母さんを亡くして……………」

「……………ん？」

何だ？

何か話が飛んだぞ。

「辛いよね……………親を失うなんて」

「ちよ、ちよつと待っててくださいー！」

まったく会話に追い付けない。

「あ、ごっつ、ごめんね！ そうだね、ご両親の死なんて思い出したくないよね……………」

「いやいやいや、死んでませんから！ バリバリ生きてますから！」

「げ、現実を受け入れられなくて妄想を……………。やっぱり、彼には心のケアが必要だ……………！」

妄想じゃないから！

うちの両親超元氣だから！

なんならもうじき弟か妹できるんじゃないかってくらいラブラブに生き生きしてるから！

「チヒロくん……………ううん、チヒロ！ あなたのご両親はもういないの……………。辛いかもしれないけど、現実を受け入れて」

「あんたが現実を受け入れろ！」

何言ってるのこの人。

「私のことはフェイトママって呼んで」

「ねえ聞いている!?!」

「本当のママだと思っていいいからね」

「聞けや！」

ダメだこの人。

早く何とかしないと。

「チヒロ、ダメだよ？ お店で騒いじやいけないってママ教えたでしょ？」

「記憶を改竄している……!?!」

落ち着け……コーヒーを飲んで落ち着くんだ。

教わった覚えなんてない。

いや、本当の母親には教わったけど。

「ハラオウンさん、あのー……」

「あ、口元にコーヒー着いてるよ。拭いてあげるね。……ふふっ、もう

……ママがいないと何にもできないんだから」

やばい。

冷や汗止まらない。

この人なんかヤバイヨ。

「あ、アノ……」

「ん？ なあに？」

その時、電子音が鳴り響く。

どうやらハラオウンさんの着信音のようだ。

「あ、ごめんね。ちよつと待ってね」

ハラオウンさんが通信に出る。

「はい。……え？ 今から、ですか？」

こちらをチラツと見てきた。

何だ？

「でも……はい。はい。………わかりました」

通信終了。

ハラオウンさんは何故か落ち込んでいた。

ぼつの悪そうな顔でこちらに向き直る。

「……ごめんね、ちよつとお仕事が入っちゃって」

「……そ、ソウデスカ」

「うん。今から行かなくちゃいけないんだ」

よっしやああああああっ！

ゴングに救われたぜ！

ハラオウンさんが伝票を持って立ち上がる。

「お金はママが払っておくから。本当にごめんね！」

「い、いえいえ。お仕事頑張つてクダサイ」

「ありがとう！」

本当にごめんね、と何度も言いながらハラオウンさんは店から出ていった。

……助かったあ。

一時的だけど。

「はあ……あとでなのはさんに相談しよう」

確か親友とか言つてたよなあ……。

このこと聞いたら泣くんじやないか、あの人。

二十二話

「……火事だーっ！」

外からそんな叫び声が聞こえてきた。

「おっ！ 火事だとよ」

『……なんでおまえはうれしそうなんだ』

野次馬根性が身に染みてるからな。

「……かじだかじだく♪」

金髪幼女もはしゃいでいる。

ちなみにぐにゆ子には金髪幼女が見えないらしい。

……まあ幽霊だし、基本的に見えるやついないけど。

そして、俺と金髪幼女以外のやつらにはぐにゆ子が見えていないという事も最近判明した。

「ベランダから見えっかなあ」

『はあ……あまりほめられたこんじょうではないな』

と、言いつつもぐにゆ子は肩に飛び乗ってきた。

お前も見たいんじゃないか。

『べつにそういうわけではない。たんじゅんにおいていかれるのがいやなだけだ』

なんだそりゃ。

まあ、いい。

ベランダに出る。

「さあどっこが燃えてるの、か……な……」

「……燃えているのは隣の部屋だった。」

「……マジかよ」

アパート全焼なう。

その様子を眺めている。

『……かんいっばつだったな』

「……あ、ああ」

燃え盛る隣の部屋を見て茫然としていた俺をぐにゆ子が現実に取り戻してくれた。

その後、ぐにゆ子の指示で財布、通信端末、通帳、印鑑、植木鉢を持って避難した。

「……これからどうしよう」

とりあえず両親に連絡して……今日はホテルか？

「……チヒロ！」

「……げっ」

何か声が聞こえたと思ったらハラオウンさんだった。残像を残すほどのスピードで迫ってくる。

キモいを通り越して怖い……！

「チヒロおっ！」

「うぶっ!？」

抱き締められた。

くっそ……で、でもおっぱいに罪はないから無理にほどいたりはない。

「大丈夫!? 怪我してない!？」

「だ、大丈夫です。ハラオウンさんは……あ、管理局関係でここに?」

「火事だからか。」

「いやでも執務官が来るような事件かこれ?」

「ううん、ニュースで見て……チヒロが心配で……!」

「おい待て。ここに住んでるって教えてないはずだぞ」

なのはさんの家に遊びに行ったときに（ストラトスちゃんか）教えたのは『ここからそう遠くないアパート』であって、正確な場所は教えていない。

「ママだもん。分かるよ」

「どうしよう。」

「この人がキ○ガイだってことしか分からない……!」

「とにかく無事でよかった……!」

さらに抱擁を強めるハラオウンさん。

何度も言うがおっぱいに罪はないから無理にはほどこかない。

「……それで、これからどうするの?」

「あー……とりあえずホテルに」

「ばか! 家族でしょ!? 私を頼りなさい!」

訳の分からない罵倒されたんだけど。

これキレていいよね?

「ほら、行くよ! 煤だらけだしまずはお風呂に入れないと……」

「あらやだ嫌な予感」

半ば強制的に連行される。

……ま、なのはさんもいるだろうし何とかなるだろう。

『……まさか……テストタロツサか……?』

「……ふえーとだあ♪」

二十三話

「ふう……お風呂いただきました」

「いえいえ……っ！ 湯加減大丈夫、だった……かなっ！」

「大丈夫でした」

ハラオウンさんに連れられて（強制）、やって来ました高町家。

さっそくお風呂を頂いてしまった。

「ほらフェイトちゃん……！ チヒロくんもう出たから……いい加減
デバイスしまつて……っ！」

「……………ああああああああああ」

ちなみに今がどういう状況かというと、俺が入っている風呂にハラ
オウンさんが特攻しようとしたらしく、なのはさんがそれを文字通り
体を張って止めてくれていたというわけだ。

ソファの陰に隠れて震えるヴィヴィオちゃんが可愛い。

「ありがとうございます。……色々と」

「ううん、むしろごめんね。……色々と」

わけがわからないよ……。

「ヴィヴィオちゃんもなんかごめん……」

「い、いえ……。あの……フェイトママどうしちゃったんですか……
？」

「……俺が聞きたいよ」

住処は燃えるわ変質者が来るわ。

踏んだり蹴ったりだぜ。

「それよりも大変だったね」

なのはさんが労ってくれた。

このことあらましは話してある。

「いえ……」

「これからどうするの？ ご両親はなんて？」

「あ、まだ……」

「なのは！ ダメだよそんなこと聞いちゃ！」

「……………え？」

……あーあ。

「チヒロのご両親はもう……。そんな辛いこと思い出させるようなことと言わないで！」

「えっ……と……？」

なのはさんがごつちを見つめてきたので無言で首を降る。

「あー……ヴィヴィオ？ フェイトちゃんとお風呂入ってきたら？」

「えっ？」

お願いだよヴィヴィオちゃん。

少しだけこの人を何処かにやっておくれ。

「あっ……！ フェイトママ、お風呂入ろうよ！」

「えっ？ あ、うん。いいよ！ じゃあ入ろっか」

ヴィヴィオちゃんが振り返り、ウイंकする。

……天使！

「素敵っ、抱いて！」

「抱く……って、何をですか？」

「チヒロくん？」

「悪ふぎけが過ぎました申し訳ありません」

悪魔たん……。

「親と連絡取れました」

「そう、なんだって？」

「別のアパート借りるようになりました」

明後日あたりに親が来てくれる。

それまではとりあえずホテル暮らしかなあ……。

「ふくん……じゃあうちに泊まっていけばいいよ」

「……え？」

なんですと？

「だから、アパートと契約するまではうちにいなよ」

「でも……迷惑じゃ」

「子供なんだから気にしないの」

……こういう時、大人つてずるいな。

「そうだよ！ 子供なんだから気にしちやダメだよ？」

「チヒロ先輩、うちに泊まるんですか!？」

いつ上がってきた君たち。

そしてハラオウンさん、あんたの言う子供は別の意味だろ。

「……ヴィヴィオちゃんはそれでいいの？」

「泊まってってください！ 私、先輩とお話ししたいこといっぱいあります！」

天使！

「じゃあ……お世話になります」

「ふふ、はあい。自分の家だと思つて寛いでね？」

「……え？ なのは、何言つてるの？ 思うもなにも、ここは私となのは、ヴィヴィオにチヒロ、家族四人の家だよ？」

もう気にしない。

なのはさんも学んだのか反応していない。

とりあえずわたわたしているヴィヴィオちゃんが可愛い。

「あ……チヒロくんどこに寝てもらおつか？」

「うくん……私たちのベッドでいいんじゃない？」

……私たち？

まさか一緒に寝てるのか、この二人？

……え、えつと……邪魔しちや悪いよな。

「いや、気を使つてもらわなくて大丈夫ですよ。ヴィヴィオちゃんと一緒にいいです」

「いやいや！ それは普通にダメだから！」

「私はいいよお」

「ヴィヴィオ!？」

さすが天使。

なんと寛大なことか。

「じゃあ私と寝よつか？」

「待つてフェイトちゃん、私は!？」

「なのはは廊下で寝て」

————結局、ソファで寝ることになった。

二十四話

「……ぱい！先輩！起きてください！」

「……………ん……………」

朝、ヴィヴィオちゃんに起こされる。
すばらしい目覚めだ。

「おはよう、ヴィヴィオちゃん」

「おはようございます！……………うなされてましたよ、大丈夫ですか？」
「あ……………」

火に囲まれる夢見てたからなあ……………。

「火事、昨日だったし」

「ああ……………その、ごめんなさい」

「ん？あ、気にしないでくれ」

ヴィヴィオちゃんの頭を撫でる。

……………ただなあ……………あの膝ついてるおっさん誰だったんだろ？

被害者？

「えへへ……………」

まあ、ヴィヴィオちゃんが可愛いからいいか。

「朝から天使と当校……………フツ、ついに俺もリア充か」

「て、天使じゃないですよお！」

現在ヴィヴィオちゃんと並んで当校中。

「おてて繋ぐ？」

「繋ぎませんっ！」

「……………

えええ」

残念。

繋ぎたかった。

「にしても……………フェイトさんいなくてよかった」

「フェイトママは仕事で朝早いですから……………」

執務官さままだしなあ……。

「ところで気になったんだけどさ、なのはさんとフェイトさんがマッテどういうことなの？　なのフェイトの末に生まれたの？」

「なのふえい……？　それはよくわかりませんが、えつと……二人は本当のママじゃないんです」

……まさかフェイトさんが誘拐してきたのか？

「色々あります……ごめんなさい」

「そ、そっか……言いたくないこともあるさ……！」

言えないこともな。

まさかなのはさんも共犯だったとは。

……いや、親友相手に情が湧いて逮捕できないとか？

「ヴィヴィオちゃんはヴィヴィオちゃん。それでいいじゃないか」

「……先輩」

例え誘拐されてきたのだとしても、天使は天使だ。

それだけでいい。

「……ありがとうございます」

「ヴィヴィオちゃんは可愛い！　それだけ分かれば十分だ」

「も、もうっ！　何言ってるんですか！」

ヴィヴィオちゃん顔真っ赤。

実に弄り甲斐がある。

「でも……えへへ……！」

「んんっ！」

ヴィヴィオちゃんが俺の手を握ってきた。

「……ヴィヴィオちゃん？」

「何ですか？」

「あ、いや……」

フラグ建った？

ねえフラグ建ったの？

「行きましょう、先輩！」

そう言っテヴィヴィオちゃんは俺の腕を引ッ張ッテ走り出した。

「ちよっ、いきなり走り出さな……はやつ!?　えっ、ちよっ、ヴィヴィ

オちゃん早すぎだから！」

「鍛えてますから！」

「誇らしげですね。肩抜けちやいそなんですよ痛い痛い早いってばあっ！」

最近の小学生って高校生より身体能力上なのか。

フラグはフラグでも建ったのは脱臼フラグだったってことか。

『きちくめ』

ーーーきちくきちくー♪

《鬼畜ですね》

黙ってる……ん？

最後の誰だ？

二十五話

「あ、ヴィヴィオ〜！」

「コロナ、リオ！」

しばらく歩いていると、前方からヴィヴィオちゃんを呼ぶ声があった。

確か以前に高町家へと遊びに行ったときにいた子達だ。

ヴィヴィオちゃんは繋いでいた手を離して二人に駆け寄っていつてしまった。

「おはよう、ヴィヴィオ」

「おはよう！」

「ヴィヴィオおはよ〜……って、先輩!？」

八重歯が特徴的な子が駆け寄ってくる。

「なんで先輩が!？」

「……えっと」

誰だっけ？

「……まさか先輩、私のこと忘れたとかじゃ」

「そ、そんなわけないだろ！ えっと……で、デイジーちゃん？」

「リオ！ ウエズリー！ です！」

記憶にないよ……。

「……『八重歯へし折りたい』」

「ああ、ウエズリーか！ 久しぶり、元気だったか？」

「先輩のばかあああああッ！」

罵倒されちゃったでござる。

わけがわからないよ……。

「って、そんなことより先輩！ この前ニュースでやってた火事って……」

「うちのアパート」

「怪我とかはしてないんですか？」

「大丈夫大丈夫」

幸い怪我とかはまったくしていない。

『わたしのおかげでな』

確かにぐにゆ子のおかげなんだが……そういう風に言われると腹立つな。

埋めるか。

——うめちゃえ〜♪

最近うちの幼女がバイオレンスな件。

「……そう言えば何でヴィヴィオと当校を？」

「あつ、それはね、リオ……」

「俺がヴィヴィオちゃんの恋人だから」

「ええっ!？」

「ちっ、ちがうよ!?! 先輩、適当なこと言わないでくださいっ!」

幼女で遊ぶの超楽しい。

「あつ……さつきヴィヴィオと篠崎先輩、手を繋いでなかった……?」

目敏いな、ティミルちゃん。

「……ヴィイイイヴィイイイオおおおおお?」

「ひいつ!?! だれか助けてっ!」

俺はやだよ。

しかし、意外なところから助け船は出た。

「——朝から賑やかですね、ヴィヴィオさん」

「アインハルトさん!」

最悪だ。

ヴィヴィオちゃんにとっての救いは、俺にとっての絶望でしかなかった。

「リオさんにコロナさんも。それ、か……ら……ちヒロ、さん……?」

「よ、よう……」

「なあストラトスちゃんや……」

「何でしようか?」

「歩き辛くない?」

「いえ。全然」

ストラトスちゃんが俺から離れない。
腕を絡めて寄り添ってくる。

「あ、アインハルトさん?」

「何でしょうか、ヴィヴィオさん」

「え、えっと、何してるんですか……?」

「……何か変でしょうか?」

まったくブレないな、こいつ。

「離れろ」

「いえ、いつ先日のようなことがあるかわかりません。もう一時も離れないほうがいいと思いますも」

「てめえシエルさんバカにすんなよ!?! 俺の嫁だぞツ!」

「もう離れません。死が二人を別つまで」

「聞けやコラ!」

こいつもうやだよ。

「むううう……」

「リオ可愛い」

「こ、コロナあつ!」

ヴィヴィオちゃんと二人で登校したかった。

いや、ティミルちゃんは居てもいいや。

「はあ……」

「あ、あはは……その、お疲れさまです」

「……ヴィヴィオちゃんはやっぱり天使だわ」

「も、もうっ!」

「……ヴィヴィオ、ちやつかり先輩の隣キープしてるね」

「むううううう……!」

二十六話

アパート全焼から今日で三日目。

ついさつき両親と一緒に、新しく住むアパートの契約をしてきた。そろそろ高町家での生活も終わりか……。

「あ、チヒロくん、おかえり〜」

「ただいま帰りました」

なのはさんが出迎えてくれる。

「どうだった？」

「滞りなく契約できました」

「そっか！」

……この人綺麗だよな、普通に。

『……………ハアハア……………なのはは綺麗だよ？ ………………ハアハア……………』

アアアキコエナイ。

「……………チヒロくん」

「顔真つ青ですよ」

「……………知ってる。お願いだからアレの前で変なこと言ったり考えたりしないで」

すみません。

ああ、そうだ。

「悪いんですけど、あと数日だけ泊めてもらえませんか？」

「ん？ もちろんいいよ！ チヒロくんなら大歓迎だよ」

家具とかも全焼したからな。

揃えないと。

制服は着ていたから燃えずに残った。それだけが救いだ。

「そう言えば制服以外の服ってどうしたの？ うちに来た初日、お風呂上がりにはスウェットだったよね？」

「……………ハラオウンさんが」

「……………ごめん」

サイズ教えてないのに。

そして時は流れ、高町家での生活は終わりを迎えた。

「今までありがとうございました」

「うん。困ったらまた来ていいんだからね?」

「そうですよ、先輩!」

なのはさんとヴィヴィオちゃんは本当に天使だなあ……。

「……あ、そうだ。これ預かってもらえませんか?」

「ん? ……合鍵?」

「はい。もしもの時の為に」

何があるか分からないからな。

俺が持つ普段使用のカギとは別に合鍵は二本ある。

一本は予備として、もう一本は高町家（ハラオウンさんは除く）に預けようと思った。

信用できるからな。

「……ねえ、これ、ヴィヴィオに預けてもいいかな?」

「えっ!? ……なのはママ!?!」

「もちろん構いませんよ。なのはさんに一任します」

なのはさんがヴィヴィオちゃんに合鍵を手渡す。

「はい、ヴィヴィオ。……フフツ、よかったね」

「な、なのはママあつ!」

顔を真っ赤にしてあたふたするヴィヴィオちゃん。

そして、なのはさんの台詞は後半が小声でよく聞き取れなかった。

「あ、あの……先輩。本当にいいんですか……?」

「もちろん。ヴィヴィオちゃんなら信用できるからね」

「あ……えへへ……!」

だが注意事項は存在するぞ。

「ただ……絶対に、絶対ツツツツ対にハラオウンさんには渡さない

「でくれ。絶対にだ」

「わ、わかりましたっ！ 命に代えましてもっ！」

「いやいや、ジークならいざ知らず天使が死んだら困る。

命に関わるなら合鍵なんて渡していいから。」

でも本人はやる気だし……否定するのは可哀想か。」

「おう。頼んだぞ、ヴィヴィオちゃん」

「はいっ！ ……あの、時々遊びに行ってもいいですか？」

「大歓迎さ」

満面の笑みのヴィヴィオちゃん可愛い。

いつまでも見ていきたいけど……名残惜しいがそろそろ行こう。

「じゃあ、そろそろ行きます。本当にありがとうございます」

「先輩、またね！」

「……それじゃあ最後に私も一仕事しようかな。レイジングハート
！」

《Set up》

……今までスルーしてたけどやっぱそうはいかないよな。

しれっと俺の隣に立ち、ついてくる気満々なこの人を。

「あ、チヒロ、お話終わったの？ ならそろそろ行こっか」

「……お願いします、なのはさん」

あなたしか頼れる人はいない。

「任せて！ フェイトちゃんは私が抑えておくから！」

「……なののは!? いったい何を……くっ、バルディッシュユツ！」

《Set up》

「……ありがとうございますッ！」

もう振り向かない。

あとは走り続けるだけだ。

二十七話

当り一面が燃えている。

炎は全てを飲み込むほど大きく、本能的な恐怖を覚える。

「チヒロさんっ！ チヒロさん、どこですかっ!？」

探す。

けれど、探し人は見つからない。

「はあッ……はあッ……くっ、いつたいどこに……っ!？」

ふと、崩れ落ちた瓦礫の中から何か飛び出ているを見つける。

それは『人の手』だ。

「あ……ああ……ああああ……!？」

見間違えるはずもない。

あれは。

「チヒロさんッ！ ……あ、れ………夢……？」

勢いよくシーツをはね除ける。

ただの夢だったようだ。

「よう、うなされてたけど大丈夫か？」

声が聞こえたので振り向けば、探し人の姿がそこにあつた。

夢だとわかりつつも体のあちこちを触り、無事を確かめる。

「なんだよ、こそばゆい」

「……よかつた」

探し人は眉にシワを寄せた。

「悪い夢でも見たのか？」

「悪い夢……そう、ですね……その通りです。……本当に、本当に……」

悪い夢……」

「そか。夢でよかつたな」

「……はい！」

「じゃあ説明して貰おうか。なんでお前が俺のベッドで寝てるんだ、

ストラトスちゃん？」

新居にて迎える初めての朝。

目覚めは最悪だ。

『開けてくださいチヒロさん！』

ストラトスちゃんを部屋から叩き出して朝食タイム。

もはやドアノブガチャガチャは定番だから気にしない。

「まったく……あいつのせいでまた変な夢見ちまったよ」

高町家にて見た火に囲まれる夢。

膝ついてるおっさんもいた。

「心なしかストラトスちゃんに似てたような……」

気のせいだな。

きつとストラトスちゃんのせいだ。

『あ、チヒロさん。私、今日は用事あるのを忘れていました』

「そか。二度と来んな」

『いつてきます。……夜には帰ってきますので』

「二度と来んな」

二度と来んな。

しばらく耳を澄ませる。

「……行った、か？」

……不安だな。

確認するか。

「悪い、あいつ消えたか見てきてくれ」

「……はあい♪」

金髪幼女は偉いなあ……。

ぐにゆ子もぐーすか寝てないで見習えよ。

ちなみにぐにゆ子は生まれてきたあの実の片方をベッドの代用に
して寝ている。

「……味噌汁流し込んでやるか
ぎばあ。

『わぶっ?!? なんだ!? てきしゅうか!?』
ザマア。

そこに金髪幼女が帰ってきた。

「……………いなかったよお！」

「そっか。偉いぞ。ご褒美は何が欲しい？」

「……………ちゅーして〜♪」

「してやりたいのはヤマヤマなだけだし、お前幽霊だから触れないんだよ」

「……………しゅん……………」

悪いな。

俺が死んで幽霊になったらいくらでもしてやるから。

「……………じゃあ、いまして〜♪」

待て。

お前最初そんなキャラじゃなかったよな？

俺が死にそうだったの助けてくれたよな!?

《貴方がそうしたんでしよう》

「それは否めないけども！」

……………ん？

またあの声だ。

……………誰なんだよ、いったい。

『おい』

「ん？ なんだよぐにゆ子」

『このみそしるはおまえがやったのか?』

……………てへ☆

二十八話

さて。

俺は今、お隣さんの扉の前にいる。
引越しの挨拶だ。

「色々あつて遅くなっちゃったからな」
インターフォンを押す。

「どんな人かねえ……」
予想してみよう。

まず巨乳で、胸が豊かで、胸部の脂肪が多めで、おっぱいが大きい。
そんな美女がいいなあ……。

「ただし金髪女は不可。ヴィヴィオちゃんのみ許す」
そのとき、ガチャリと扉が開いた。

「あいよ……つて、誰だお前？」
「あー……隣に越してきた者です」

ポニーテールの女の子だ。
年は……同じくらいか？

「おお、そうか！ 何だ、挨拶か？」
「あ、はい。これつまらない物ですが」

「サンキューー！」
ガバツと菓子折りを奪われる。

「オレはハリー・トライベツカ！ お前は？」
「篠崎チヒロっす」

「変わった名前だな。チヒロでいいか？」
「お好きにどうぞ」

あれ？
この人どつかで……？

「ああ……確か、バスターヘッド砲撃番長……」
「オレのこと知ってんのか!？」

ヴィクターから話は聞いたことがある。
つまり……。

「新しい玩具ゲッツ」
「は？」

「まあ、寛いでくれ。お茶いれてくるぜ」

「あ、お構い無く」

今時の不良はお茶を入れられるらしい。

今のうちに……。

「ぐにゆ子」

『なんだ？』

「部屋を解析」

『……たぶん、かわいいものが好きなんだろう。へやのないそうはどこにでもあるようなものにみえて、いがいとかわいいものがおおい』
弄るならそこか。

「ほいよ」

「どうもです」

「敬語じゃなくていいって。同じ年くらいだろ？」
ふむ。

ならお言葉に甘えて。

「わかったぜ、可愛いものが大好きなハリーちゃん」

「な、何で知って……?!」

うちのぐにゆ子舐めるなよ。

「部屋の内装に可愛い系のものが結構あるからな」

「へー……中々鋭いんだな、お前！」

あ、あれ……？

隠してるわけじゃないの……？

「なあなあ、他には何か分かるのか？」

「あ、えっと……」

ぐにゆ子ヘルプ！

『……はあ。しかたないな。おそらくきちようめんだ。へやはきれい

だし、きちんとせいりされている』

「き、几帳面なんだな！ 部屋綺麗だし整理もされてるし」

「い、いや、そんなことねえよ！ ただ掃除が好きなだけで……な、なんか照れるな」

くっ!?

ぐにゆ子追撃！

『いいよめになるとでもいっておけ』

「い、いい嫁さんになれるよ！」

「はあっ!?! な、何言つて……!?! ……な、なあ………ほ、本当にそう思うか……?」

顔真っ赤にして照れてる。

不発じゃねえかぐにゆ子おおお！

『いや、ふはつではない。たぶんたったぞ』

何がだ。

「お前面白いな……気に入ったぜ！ これからよろしくな！」
「ど、ども」

アカン。

この子、苦手なタイプや。

全ての弄りをプラスにとる単純に可愛い娘や。

『おまえにもにがてなものがあるんだな』

お前俺のことなんだと思ってるの？

『せかいのやみ』

それはヴィクターだ。

二十九話

ハリーとの初対面から数日が経った。

お隣さんと言うこともあって、親交は深まり今では……。

「ほら、朝メシできたぞー！」

「……ういゝ」

甲斐甲斐しく世話を焼かれるようになっていた。

ハリーは俺の部屋に来ては様々なことをやってくれる。

超便利。

「……箸持つのマジたるいい………ハリー食わせて〜」

「お前なあ………」

この数日でこいつの性格は把握した。

「つたく……仕方ねえな。ほら口開けろ」

「あ〜………」

ほらな。

何だかんだで面倒見がいいんだ。

『わたしのおかげだぞ』

………何で？

「あ、ハリー。野菜はいらない」

「はあ？ バカ言うな、ちゃんと食え！」

いーやー。

「あつ、コラー！ 口閉じるな！」

『かのじよのいうとおり、ちゃんとたべるべきだ。おまえはほうつておけばすきなものばかりたべて……』

なんか母親が増えたみたいだ。

さて、今日は意外な人物から頼みごとをされている。

ヴィータさんだ。

何でも勉強を教えてやって欲しい子がいるとか。

「じゃあハリー、いつてくるわ」

「おう。晩メシ何がいい？」

「肉」

洗い物をしているハリーに挨拶をして家を出る。

「よし行くか」

ヴィータさんを弄りに！

……じゃなくて勉強教えに。

「なあ、ぐにゆ子は本当に行かないのか？」

『……ああ。まだこころのせいりがついてなくてな』

ぐにゆ子はヴィータさんの知り合いらしい。

だが今回は心の整理がついていないだとかで留守番だ。

『いずれ、あいにいく。そのときは……おまえもきてくれ』

「……わかった」

『かんしゃする』

じゃあそろそろ行くか。

『ああ。じこにはきをつけろよ』

「へいへい」

『……まったく』

教えられた住所にやって来た。

そこには中々に大きい一軒家があり、目の前には海が広がっている。

「いいところ住んでんなあ。さすが局員」

将来は局員の嫁さん貰おう。

「おお、チヒロ！ 来たか！」

ぼーつと海を眺めながら将来のヒモ生活を考えると、聞き覚えのある声が聞こえる。

「おやヴィータさん。こんにちは、今日は大変お日柄もよく……」

「なんでそんな畏まってんだよ。もっと砕けた感じていいって
そうか。」

「チヨリくつす☆ ロヴィータちゃんげんきい〜?」
「潰すぞ」

なんで!?

砕けた感じでいいっていったじゃんか!?

「砕け過ぎだ」

「丁度いいって難しい……!」

「アホか、お前は。……まあ、いいや。とにかく中入れよ」

「う〜い……」

ヴィータさんについて行って行って家の中へ。

「にしてもデカイ家つすね」

「まあな。あ、でも住んでるのはアタシだけじゃないからな」

そうなのか。

「ああ。他に6人いるんだけど、今日はみんな管理局の仕事でアタシ
しかいないんだ」

「へえ……。大家族なんすね」

最近うちも大所帯になってきたからな。

親近感を感じるぜ。

《その場合、貴方は手の掛かる末っ子ですな》

うるせー。

誰なんだよお前。

「さ、着いたぞ。ここがリビングだ」

三十話

「は、始めまして！ ミウラ・リナルデイです！ 今日はよろしくお願
いしますっ！」

リビングに入ると、いきなり大声で挨拶された。

「おいミウラ、緊張してるのは分かるが少し落ち着け」

「は、はいっ！」

……玩具か？

玩具ゲッツか？

「チヒロ？」

「何でもないっすよ？」

あつぶねえ……。

挨拶して誤魔化そう。

「俺は篠崎チヒロだ。よろしくな」

「は、はいっ！ よろしくお願ひします、先生！」

……なんだと？

「今なんて？」

「えっと……先生って……あの、ダメでしょうか……？」

「もう一回」

「え？」

「もう一回！」

「あ、はいっ！ 先生！」

先生……。

いい響きだ。

「よおし、ミウラちゃん！ 俺に任せておけ！」

「は、はいっ！」

『先生』様が色々教えてやるぜ！

「まずは気付かれないように人を隷属させる方法をだな……」

「おいッ！」

ヴィータさんに止められた。

「おくい、アイス買ってきたぞ！ そろそろ休憩にしないか？」
しばらくミウラちゃんに勉強を教えていると、ヴィータさんがそんなことを言ってきた。

「買い物に行ってたのか。」

「小さいから気付かなかった。」

「何食う？」

「バナナ。ミウラちゃんはチョコチップな」

「えっ？ ボク、ストロベリーが」

「チョコチップな」

「は、はい……………」

「チ、チヒロ…………お前……………」

「なんですか？」

「はあ…………いや、いい」

ヴィータさんからアイスを受け取って蓋をあける。

「バナナうめー。」

「で、どうだ？ ミウラは？」

「あ、はい」

正直に言おう。

「コイツ馬鹿です」

「それは知ってる」

「はううっ!？」

まさかここまでとは…………。

「で、でも凄いですよ、ヴィータさん！ 先生、教えるの上手ですっ

ごく分かりやすいんです!」

「それも知ってる。フェイトから聞いた」

……………は、あ……………?

「いやいやいやいや、落ち着け。忘れるんだ気にしちやダメだ気にしちやダメだ気にしちやダメだ気にしちやダメだ気にしちやダメだ気にしちやダメだ」

「せ、先生？ どうしたんですかっ!？」

ミウラちゃんを後ろから抱き締める。

……というか、しがみつく。

「ふええっ!? せ、先生っ!?」

「……ふうふうふうふう……落ち着け……素数を数えるんだ……2
……3……5……7……!」

「お、おい、チヒロ! どうしたんだよ!」

シャツトアウトしろ。

別のことを考えるんだ……!

「ミウラちゃんいい匂い……!」

「せ、せんせっ、何言って……っ!?」

「本当にどうしたお前!」

ふう……落ち着いてきたぜ。

ミウラちゃんにはアロマ効果があつたのか……ミウラテラピー効
果抜群。

「……ふう、すみません。取り乱しました」

「お、おう。なら、そろそろミウラを放してやれ」

おお、そうだ。

「すまんミウラちゃん、ありがとう」

「い……いえ……! こ、こんなことでよければいつでも……」

「言つたな?」

「……ふえ?」

「言質は取つたぞ」

嫌なことあつたらミウラちゃんを呼ぼう。

「よっしやあ! やる気出てきた! さあ休憩は終わりだ!」

「ぞ、そんなあっ!」

1日みっちりやりやあ成績も上がるはずさ!

このままノンストップだぜ!

三十一話

この時期になるとみんな……あのヴィクターですらピリピリし出す。

『D S A A』。

正式名称：ディメンション・スポーツ・アクティビティ・アソシエーション魔法戦競技会という団体が開催する『インターミドル・チャンピオンシップ』。

その開催が近いのだ。

「確か……10歳から19歳までの全管理世界の魔導師が出るんだっけ」

ジークとかヴィクター、更にはハリーも出ている。

ハリーも今日はそのに向けてのトレーニングで忙しいようだ。

「ヴィヴィオちゃんも出るとか言ってたなあ……」

ま、俺には関係ない……と言いたいんだがそうは問屋が卸さないらしい。

実は今日、そのインターミドル関係で知り合いに呼び出されているのだ。

……嫌な予感しかしない。

「お願いですっ！ 私のセコンドをやってください！」

「嫌だね、デコ助。一昨日来やがれ」

「エルスです！ て言うか一応私、年上ですからね!？」

エルス・タスミン。

それがこのデコ助の名だ。

中学時代の知り合いだ。

年上とか言っても数カ月だし。

「つかなんでオレなんだよ」

格闘技なんて詳しくないし、魔法だって使えない。

「強いて分かるとすればお前に『縛る趣味』があるって事ぐらいで……」

「な、なんて事言うんですか!?!」
「ちやうの?」

「違いますよ……まったく……!」

「そんな怒んなよ。」

「あんま怒ってるって後退するぞ。」

「ただでさえデコ広いのに。」

「で、なんでオレなんだ?」

「……篠崎くんは」

「……うん?」

「中学時代、運動会のこと覚えてますか?」

「あ、ああ」

「つつても運動会三回あったんだけど。」

「何年の時のやつ?」

「二年生の時です。あの時、私は委員長だったにも関わらず……あるクラスメイトの体調不良を見抜けませんでしたよね」

「……ああ、委員長(※)のことか。」

「あつたなそんなこと。」

「でもあなたは……すぐに見抜いた」

「確か日射病になってたんだよね。」

「でも発見したのは偶々だ。」

「……だって本当はおっぱい見てただけだもん。」

「その後の処置も完璧だった……すぐに日陰につれて行って体を冷やして……。私はそれを見るだけでした」

「委員長の柔らかかったなあ……。」

「もう一回日射病になってくれないかなあ。」

「他にも色々ありましたよね。学校生活やイベントなどであなたは多くの人を助けてました。……何故か女子ばかりだった気がしなくもないですが」

「だって……男の子だもん♪」

「だから……その観察眼と正しい処置の知識を見込んでのお願いです！ 私のセコンドをやってください！」

「えー……」

正直めんどい。

ただ、まあ……

「見返りを寄越せ。さすればやってやらなくもない」

「ほ、本当ですか!?!」

上から目線はスルーですかそうですね。

「私、何でもします！ ですからお願いします！」

「何でも？ 今、何でもって言ったな？」

聞き逃してないぞ。

「あ、いや……」

「ちなみにお前との会話は最初から録音しているからな」

「なっ……!?!」

抜かりなし。

「クッククック……!」

「……早まったかも……!」

さあ……どんな無茶ぶりしてやろうかなあ……!」

三十二話

「なあ、ハリー……」

「ん？ 何だよ？」

朝食を終え、ベッドに寝転がって洗い物をしているハリーに話しかける。

「お前、インターミドル出るんだろ？」

「お？ なんだ、応援してくれるのか？」

えー……。

「どうしよつかなあー？」

「ま、まあ……その、他に応援したいヤツがいるなら……ぐすつ……！」

……やっぱコイツ苦手だわ。

「あー……ウソウソ。ハリーを応援するって」

「ほ、本当かつ!? へへっ、さんきゅー！」

嬉しそうにしちやってまー。

一応、他^デ選^コ手^助のセコンドやるんだけどなあ……。

ま、いつか。

「チヒロの応援があるならアイツだつて……！」

「ん？ アイツって誰だ？」

「ああ、俺が前回のインターミドルで負けた相手だ」

ああ、ヴィクターか。

ちなみに俺とヴィクターが知り合いだと言うことをハリーは知らない。

面白そうだし黙ったままでいるつもりだけど。

「それもグダグダの泥試合でだ。今年こそ白黒ハッキリつけてやる。……きつとアイツもそう思ってるさ」

……泥試合でも勝ちも勝ち。気分良いですわあ……！

……アレも黙つといてやろう。

さて、ハリーがトレーニングに行った為に暇になってしまった。
そこでふと、ジークのことを考えたのだ。

「はああ……」

あれ以降、ジークと接触していない。

そのせいで俺は、一抹の寂しさを感じている。

ジークに会いたい。

ジークをいじめたい。

そして俺は……

「だから慰めてミウラちゃんやあああん……!」

「ひゃあっ!」

通信でミウラちゃんを呼んで慰めてもらうことにした。

ミウラちゃんもインターミドルに出るらしいんだけど、今日はたまたまトレーニングがオフだったらしい。

助かった。

「はああ……ミウラちゃんの匂い嗅いでると落ち着く……」

「かつ、嗅がないくださいいいくっ!」

なぜだし。

「あ、あの……走ってきたから……汗が……!」

「あー確かに。ちよつと汗の匂いするね」

「ぴやあああああああああああっ!」

これ、暴れるでない。

さらにミウラちゃんを抱き締める力を強める。

「逃がさないぞ」

「あうあう……!」

そして今日は帰さないぞ。

「ひえっ!」

「いやそれは冗談」

一々可愛い反応するなあ、ミウラちゃん。
いじめたくなっちゃうよ。

「あ、あの……」

「ん？ なあに、ミウラちゃん？」

ミウラちゃんが顔を真っ赤にして話し掛けてきた。
どったの？

「せ、先生も……いい匂い、です……!」

「うわ何コイツ変態？」

「え、ちがつ、何でっ!？」

————気分は少し、落ち着いた。

三十三話

「なあ……ファ○リーズ」

「ウエズリーです。先輩、〴〵がつけば何でもいいって思っていないですか？」

なんだか久し振りの気がするウエズリーとの登校。

引越してもこれは変わることがなかった。

「俺さ、ふと思っただんだ……」

「何をですか？」

まずは確認しよう。

「ちよつとほつぺた膨らませてみて」

「……は、はい？」

「ぶくーって。ほら、漫画とかで怒ったキャラがやるみたいに」

いいからさっさとやれ。

「ほーら！ はーやーくー！」

「い、いいですけど……？」

ウエズリーは困惑した表情を見せながらも、俺の言った通り頬を膨らませる。

……やはり……これは……！

「おおおっ！」

「な、なんですー……」

「……そのままでッ！ そのままでいろッ！」

突然叫んだ俺にびくつとしたウエズリーは再び頬を膨らませた。

それを両手で包み、あまり力を入れないように注意して揉む。

「……ふおおおー！」

「ん!? んーんー！」

ぶにぶにしている。

すっげーぶにぶにしている。

「はうあああ……！」

「んーっ！」

ウエズリーが俺から勢いよく離れた。

ああああ……ぷにぷにが……。

「な、何するんですか!？」

「……シー○リーズ。俺は思ったんだ」

「……話を切つて悪いんですが、一応言っておきますね。ウエズリーです!」

本当にな。

良いところなんだから流せよ。

「ウエズリー……君は『膨れっ面』が一番可愛いツ……!」

「……はあ?」

おい、何だその反応は。

せつかくジヨ○ヨ立ちまでしたのに。

……どくんっ……!」

効果音ありがとう、金髪幼女よ。

愛してるぜ。

……じゃあしんで♪

二言目にはそれかよ、お前。

「……あの」

「何や?」

「……意味が……分からないんですけど」

どうやら説明をする必要があるようだな。

……めんどくさ。

「この前、俺のアパート火事になったろ?」

「は、はい……」

あの時、運が悪ければ死んでいたかもしれない。

そして……いつまたそんな目に遭うかも分からない。

そんなことを考えたら……

「お前の顔が浮かんんだ」

「えっ!? わ、わたし……ですか!？」

名前は出てこなかったけど。

「そう……そして思ったんだ。『八重歯へし折りたい』と」
「先輩のばかあ！」

そこでウエズリーの膨れっ面が思い浮かんだんだ。
俺は衝撃を感じたね。

「途端にお前に会いたくなかった。唐突に愛おしく思えてきたんだ」
「い、いとっ……!!？」

しばらくはウエズリーの膨れっ面が頭から離れなかった。

……今はジークが頭から離れないけど。

はあ……ジークいじ……会いたいなあ。

《それ……この娘には言わないであげてくださいね》

おや謎の声さん。

そろそろあなたが誰だか教えてくださいな。

《フフ……まだ秘密です♪》

このクソアマツ！

人が下手に出てれやあ凶に乗りやがってツ！

《性格激変し過ぎじゃないですか……？》

つたくよー。

大事などこなんだから邪魔すんな。

「あー……気を取り直しまして……」

深呼吸。

「気付いてしまったんだ……この感情に」

「ど、どんな……感情ですか……？」

ウエズリーの顔……その頬が真っ赤になっている。

……何て可愛いんだ。

「きつと、これは恋だ。……大好きなんだ。愛してると言っても過言

じゃない」

「……ひうっ!？」

だから……

「俺のものになってくれ……ほっぺたちちゃん！」

「先輩のばかああああああっ！」
ウエズリー本はそこ体までいらん。」

三十四話

ついに、というべきか。

どれだけこの日を待ち望んだか……。

昨日くらいかな、確か。

『……それでは昨年度都市本選ベスト10選手、エルス・タスミン選手に第1会場に集まった選手に激励の挨拶をお願いしたいと思います』

ついに今日から第27回インターミドルチャンピオンシップが始まるのだ。

それもいきなり我らがデコ助の出番である。

『えー……エルス・タスミンです。年に一度のインターミドル……皆さん、練習の成果を十分に出して全力で試合に臨んでいきましょう』

……運動会かよ。

もうちよつとこう……胸の熱くなるような出来なかったのか……？

『私も頑張ります！ みんなも全力で頑張しましょう！……えい！』

……おおーっ！

……えー……ちよ、えいえいおーっ……。

嘘だろ……これからガチバトル繰り広げるのに、えいえいおー

っつて……。

参加者もさ、それでいいのか!?

そんなんで気合い入るのか!?

《ちなみに貴方なら何て言っていました?》

「わんわんお」

《……なかなか可愛いです。やりますね》
「だろ」

最近、こいつに普通に反応するようになったなあ……俺。

本当、誰なんだ……。

さて。

開会式が終わり次第デコ助と合流する予定なんだけど……お、いたいた。

「タウリンー！」

「1000 mg 配合！ ……じゃなくて！ タスミンですから、私！
何させるんですか!?!」

いや、やったのお前じゃん。

ノリノリだったじゃん。

「で、どうでした?」

「あ? 何がだよ?」

「激励の挨拶ですよ。さっきやった」

ああ……あれか。

「酷評と批判、どっちがいい?」

「それ選択肢として成り立ってなくないですか!?!」

だってなあ……。

「運動会の開会宣言かと思った」

「え、いやつ、そんなことないはず……!?!」

「しかも『えいえいおー』って、お前」

無いわー。

超無いわー。

「うっ……じゃ、じゃあ篠崎くんならどう言っていましたか?」

俺?

そうさなあ……。

「……戦^{殺れ}え。最期まで立っていたヤツが最強だ」

「いやいやいや! 死人出ませんから、この大会! 極めて安全なやつですからー!」

「戦うのに!?!」

「なんで驚いてるんですか!?! 当たり前でしょう!」

『まったく……』と言いながら呆れるデコ助。
まったくもって解せぬ。

しかも聞いてきたのお前じゃんか。

「……ん？」

ふと。

デコ助が近くの客席を見た。

何か見つけたのか？

「……はあ。あの人たちは……！」

「あ、おい！」

ため息を吐き、走っていく。

何だってばよまったく……！

三十五話

いきなり走り出したデコ助の後を追う。

思ったより足が早くてかなり離れてしまったが、姿までは見失わなかった。

その後、デコ助が何だか騒がしい集団のもとに行って大声が聞こえたと思ったら会場まで沸いた。

「まあそんなことはどうでもいいけど」

遠目からだからよくわからないが、ポニーテルのヤツがデコ助に話しかけたようだ。

俺はそこに向かって全力疾走中。

もうすぐ追い付く。

「……そーういや、アホのエルス」

「誰が『アホの』エルスですか!？」

「……てめーは……」

「アホだろうがアアアアアアアアアアッ!」

「うあっ!？」

デコ助の背中目掛けてドロップキックをかまし、そのまま関節技サブミッションへ移行する。

「いだだだだだっ!?! ちよ、篠崎くん?! 腕ひしぎ十字固めって女の子にやっていい技じゃ……っ!?!」

「うっせー! お前、知ってるだろ!?! 俺が知らない場所に一人で残されるの嫌いなの!」

「地味に可愛くてムカついた覚えはあり……いたたっ、まって本当に外れちゃいますからっ!」

本当に外してやる……!」

「……何やってるんですの、チヒロ」

「よう、ヴィクター」

何でチエーンで縛られてんだ?

バインドってやつ?

「この子がやったんですわ」

「ぐえっ!？」

そう言つてヴィクターはデコ助を踏んだ。

やっばデコ助こいつには他人を縛る趣味があるらしい。

「ち、チヒロ……何でここにいんだよ？」

「おつす、ハリー。お前も縛られてんのか」

「あ？ あ、ああ……」

俺の言葉を聞いてチェーンをブチブチと引きちぎる。

「お前……ヘンテコお嬢様とアホのエルスと知り合いだったのか……？」

「不本意ながらな。言つてなかつたっけ？」

言つてないけどな。

「……チヒロ、口……？」

「……ん？」

誰かが俺を呼んだ。

声の方を向く。

「……ホンマに、チヒロなん……？」

「おお、ジーク！ 会いたかつたぜ！」

「ばかつ！」

ジークに声をかけた俺をヴィクターが大慌てで止める。

何だよ？

「忘れたんですか……?!？ ジークはまだ……!？」

ジークはまだ何だ………あ。

忘れてた。

「……チヒロおつ！」

こいつ……俺のこと死んでるって思ってるんだった。

ジークが飛び付いてくる。

「ああ……チヒロや……！ ホンマにチヒロやあ……!？」

やっばい。

罪悪感とかはないけど……これ、下手しなくても殺されるんじゃないやね？

「……やれやれですわ」

「どうなってんだよ、この状況……？」

「チヒロお……チヒロお……！」
さして。

どうやって回避するか……？

「そろそろ関節技外してくれませんかねえっ!？」

三十六話

「そう言えば……」

「あん？」

今まで俺にずっと抱き付いて顔を埋めていたジークが不意に顔をあげた。

「何で……生きとるん……？ 私……葬式にも行ったんやで？ やのに何で……？」

「……さしてどうするか。

正直に答えれば当然待っているのは“死”だろう。

今度は本当の葬式を開くことになる。

ならおちやらけた感じで言ってみるか？

『実はネタバレなしのドツキリでしたテヘペロー☆』

『ぶっ殺す』

ダメだ。

ガイストされる未来しか見えねえ。

「フフツ……！」

ニヤニヤしてるヴィクターがくっそムカつく……！

……ん？

あ……いいこと思い付いた。

「……俺の葬式い？ ということだよソレ。そんなもん開いてねえぞ？」

「……え？」

俺の言葉を聞いてジークもヴィクターも目を丸くして驚く。

「なっ!? チヒロ、あなたまさか……っ!?」

「……ヴィクター、どういうことや？」

「じ、ジーク……こ、これはその……！」

ヴィクターにジークが詰め寄る。

ざまあみやがれ。

「ヴィクター……ちよつとお話ししよか？ 選手控え室で」

「あ、いえ、ですから……はい」

ちよつと待つとつてね、と言い残してジークはヴィクターを引きずりながら歩いていった。

「……えっと、結局ジークやヘンテコお嬢様と知り合いだったことでもいいのか？」

ジーク（とヴィクター）が退場したのを見計らってハリーが話しかけてくる。

黙ったままだったから忘れてたけど……そう言えばいたな、コイツ。

「ああ、そうだ。不本意ながらこのデコ助もな」

「……そ、そうか。いい加減に技かけるのやめてやったらどうだ？
気絶してるぞ、ソイツ……」

あ、本当だ。

疲れたし……そろそろ解くか。

「ま、コイツのことは置いて置いてジュースでも買いにいこうぜ！」

「お、おい……本当に放置すんのか……？」

「そーいや後ろで固まつてる三人組って誰だ？」

「お前ゴーイングマイウェイ過ぎだ！」

「ただいまや〜」

しばらくハリーと会話しているとジークが帰ってきた。

ヴィクターはいないようだ。

「おかえりジーク。あ、コーラ飲む？」

「飲む飲むう！」

ジークにコーラを渡す。

「ヴィクターは？ 帰ったのか？」

「ヴィクター？ 誰やソレ？」

……あ、察し。

どうやら触れるべきじゃないようだな。

「んぐ………ふはあつ！ おーきに、チヒロ」

「あいよ」

「……なあ、チヒロ。相手は女だぞ？ 飲みかけを渡すのは良くないんじゃないか？」

俺とジークのやり取りを見てハリーがそう言ってきた。

「……大丈夫やで、番長。私は気にせんから」

「ジークに言ってるんじゃないか、チヒロに言ってるんだ」

えっ？

なになに、喧嘩？

喧嘩始まるの？

「だから大丈夫やって。……というか番長こそ、何でそないなこと言うの？ 関係あらへんよな？」

「俺はチヒロの保護者的立場だからな。そういうのは教育上よろしくねえからダメだ」

待ってよハリー。

君のポジションはいつから俺の保護者になったんだ。

「む……！」

「ああん……？」

何かよくわからんけど、とりあえず今俺ができることと言えば……。

「修羅場っばいぞ。起きろデコ助」

「ぶくぼがごぼっ!？」

未だに気絶したままのデコ助の鼻からコーラを流し込んで叩き起こすことだけだった。

三十七話

「そもそも、番長はチヒロとどういう関係なん!？」

「おとなりさんだ! そういうジークはコイツの何なんだよ?」

ジークとハリーが言い争う。

「修羅場つてるなあ……」

「修羅場ってますね……。ていうかこれ篠崎くんを要因としてるんですから、何とかしてくださいよ」

「いやいや、こいつら強いから無理だつて」

俺とデコ助は離れて傍観を決め込んでいた。

あー……。こいつらと知り合いだと思われたくねー。

「あつ、でもこういうことなら出来るぜ」

「……嫌な予感が」

息を吸い込みジークとハリーに聞こえるように声を張る。

「……そういやエルス、お前試合いつやんだっけ? 『お前のセコンド』なんだから把握しておかないとな!」

「ちよつ……!?!」

「……いいんちよ、ちよつと来て」

「……アホのエルス、ちよつとツラ貸せ」

二人に引きずられてデコ助退場。

恨みがましくこつちを睨んでいるので爽やかに手を降ってやった。腹パンされろ。

「……あれ? デコ助つて生徒会長やってんだよな?」

何でジークは「いいんちよ」って呼んで……。あつ、察した。

あいつ、「委員長」と「生徒会長」の区別がつかないほど頭が悪いのか……。

「……うわあ」

馬鹿なのかあ……。

「よし、チヒロ。どういふことか説明してもらおうか」

ハリーの取り巻き三人組と自己紹介していると三人が帰ってきた。
思ったより早いな。

「おかえり。どうだったよデコ助？」

「……男の子には到底見せられない女の子の汚い部分ですから、聞かない方がいいですよ……」

キヤットフアイトか。

「そんな生易しいもんじゃないですよ……。まずチャンピオンが……」

「いいんちよ、それ以上余計なこと言うたら……」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
……………」

……ジークってこんな恐かったっけ？

話題変えた方が身のためだな。

「で、説明ってなんだよハリー？」

「決まってるだろ、ジークとアホのエルスのことだ！」

「う、^{ウチ}私も聞きたい！」

特に難しいことはないんだけどなあ……。

「ジークは行き倒れてるのを助けて、ハリーは新しいアパートのおとなりさん、デコ助は中学が同じ」

「……ってことは、チヒロって俺より年上だったのか？」

「そうだな。でも今まで通りタメ口でいいぞ」

ハリー……年下だったのか。

「へへーん！ 番長^{チヒロの年齢}そんなことも知らへんのー？ ぷぷぷーっ！」

ジークがハリーを煽る。

お前は小学生かよ……。

「はっ！ ならお前はチヒロが風呂で体洗うときにどこから洗うのか知ってんのかよ？」

「待てハリー！ 何でそんなの知ってんだよ!？」

「左の二の腕や」

「お前もかよ!？」

「こいつらなんで知ってんの？」

ハリーはまあ……分からなくてもないけどさ、よく部屋に来るし。

「というか二人とも篠崎くんが好……」

「わ、わ……」

「いいんちよ、それ以上はアカン！」

デコ助が何かを言おうとしたら二人が慌てて止めた。

「いったい何を言おうとしたんだ……って、ラノベの鈍感主人公なら言うんだろうなあ……」

まあスルーしとこう。

「て、て……かいいんちよはどうなんよ!？」

「お、おう！ そうだ、答えろアホのエルス！」

顔を真っ赤にして二人は話題を変える。

あ……それは聞かない方が……

「私ですか？ ありえませんよ。だって……」

俺のいないとこでやって欲しいなあ……

「……中学の時にフラれてますから」

三十八話

「ま、マジで言ってるのか!？」

「いいんちよが……チヒロに？」

「ええ」

そう。

卒業式の後にはデコ助に呼び出され、告白された。

「もともとOKが出ないのは分かっていますでしたが……まあ、ワンチャンあるんじゃないかと」

なかったけどな。

「……な、何か悪いこと聞いちゃったな」

「いえ、もう過ぎたことですから」

確か……断ったときは「ご縁がなかったということだ」と言っただけです。

記憶が正しければ。

「その……フラれた時は何て言われたん？」

「『お前だけはない』と言われました」

「……私、そんなこと言われたら泣くで……？」

……まあ、うん。

記憶って曖昧だからさ。

「……二人に一つ情報をあげましょう」

デコ助がジークとハリーを見据えて真剣な表情でそう切り出した。

なに言う気だ……？

「……二人とも、このままだとフラれますよ」

「それ本人の前で言っちゃダメじゃね？」

「……あつ」

再びデコ助は強制連行されていった。

「篠崎くんが女の子の体で一番好きなのところがどこだか知っていますか？」

腹を押さえながら帰ってきたデコ助は、何事もなかったかのようなすまし顔をしているジークとハリーにそう言った。

「それは……おっぱいやろ？」

ジークが答える。

……なんか他人に言われるのは釈然としないけど……確かに事実だ。

「はあ……確かにそこもですが、もっと好きな別の部分があるんですよ。そして……その部分に魅力を感じられている女性ひとにしかチャンスはありません」

「な、なんや、その別の部分って!？」

「ど、どこだよ!？」

……どこだよ、本当に。

「お尻です」

「え……ええええええっ!？」

……いやいやいや。

待てよ……確かに好きだけどさあ……!

その理屈で行くと俺は……俺は……!

「そ……そんな……!　ち、チヒロ……私ウチのお尻……好き……?」

「ぺっ!」

「唾吐かれた!」

ジークの尻なぞストラトスちゃんのに比べれば……ああああああああああああああ違う違う違う違う違う違う違う違う違う!

ストラトスちゃんの尻を「良い」なんて思っていないっ!

思っただけなんかないんだからねっ!

温泉で見たのが目に焼き付いていて頭から離れないなんてことないんだからねっ!勘違いしないでよねっ!

「な……なあ、俺のは……?」

「一昨日来やがれッ!」

「なん……ッ!?!」

考えろ考えろ考えろ考えろ………そうだ!

確か後輩にいい尻をした娘が……!

そうそう、あいつに比べればストラトスちゃんなんて別に……別に………!

「ね? 篠崎くんは胸に関してはチョロいですが、お尻になると途端に厳しくなりますよ」

負けず劣らずだよおおおおおおおつ!

ストラトスちゃんもあの後輩もいい尻してるよおおおおおつ!

お尻に嘘はつけないんだよおおおおオオオツ!

「つまりお尻を評価されていない時点で勝ち目は無いんです! ……

まあ一人だけ例外がいますが」

「いやあああああああああツツツ!!!」

「………つて何で篠崎くんが逃げ出すんですか!?!」

「ちよっ、チヒロ!?!」

「おい、どこいくんだよチヒロ!」

通信端末を取り出す。

「………ミウラアアアアあああつ! 今すぐ来いいいいいいいっ!」

『ひっ……せ、せんせい……? あの、ボク、予選が……』

「じゃあ俺が行くッ! 今何処だ!」

『あ、えつと……!』

ミウラちゃんに告げられた場所に向かって全力で駆け出した。

三十九話

「すー……………はあー……………ふうふううう……………!」

「せ、せんせつ……………! ボク、試合終わったばかりで……………汗かいてっ……………!」

ミウラちゃんのいる試合会場に着くとすでに試合は終わっていて控え室にいと連絡があった。

ダツシユで向かってミウラちゃんを捕獲し、今にいたる。

「しつかしいきなり来たときは驚いたぜ、チヒロ」

そうそう、何かヴィータさんもいた。

ミウラちゃんのセコンドらしい。

「色々あつたんです。……………色々」

「そ、そうか」

うん……………忘れよう。

それより今はもつと気になることがある。

「そちらのムキムキガチムチメンはいつたい誰ですか?」

「あ? ああ、コイツか?」

ヴィータさんが褐色の肌でいかにもソツチ系ですみたいな男の人を見やる。

「……………自己紹介がまだだったな。俺はザフィーラだ」

「篠崎チヒロっす。よろしくお願いします。……………男の犬耳はウケませんよっ!」

「……………犬ではなく狼だ」

一緒にやね?

「ヴィータさんのペットか何かですか?」

「……………違う」

「ああ、ヴィータさん“が”ペットなんですね」

「お前バカじゃねえの?」

じゃあ何だというのか。

「……………ところで何してるんだ?」
ザフィーラさん
わんわんおがそう聞いてくる。

何ってそりやあ……ねえ？

「ミウラちゃんの匂い嗅いでます」

「……い、いや、それは分かる。なぜ匂いを嗅いでるのだ？」

「え？」

「……む？」

「やめとけザフィーラ。こいつは別の次元に生きてるんだ」

ふう……落ち着いた。

ミウラちゃんを解放する。

「あつ……」

ゆっくりとヴィータさんの背後に回る。

そして……

「ぎゅー」

「うわっ!? チヒロ!? お前何して……っ!?」

「あ、ヴィータさんも結構いい匂いですね」

「うがあああああああアツ!?」

ちよつと！

ジタバタしないでくださいよ。

「離せっ！ はーなーせーっ！」

「落ち着いてくださいヴィータさん！ 大人でしょ!？」

「お前頭おかしいんじゃないのか!?! おい、ミウラ！ 助けろっ！」

ヴィータさんに助けを求められて、寂しそうな顔をしていたミウラちゃんが寄ってくる。

そしてヴィータさんに言った。

「あの……そんなに悪くないですよ……?？」

「ミウラ!？」

「ミウラちゃんもこう言ってることだし……ね？」

「やめろおおおおおおおッ!!」

もう遅いッ！

脱出不可能よッ！

「いいから離せよッ！」

だが断る！

さらに抱きつきを強めてやるッ！ 倍プツシユだ！

「だあああああああああああああつ！ 離しやがれええええつ！」

「いいなあ……ヴィータさん」

「ミウラ！ お前本気か!？」

「……うむ。うらやましい」

フアツ!?

「……ザフィーラ………お前………本気か………?？」

「……冗談だ」

鳥肌たったわ。

四十話

“亀裂”というものをご存じだろうか？

……まあ、知らないわけないよな。

それがあある場所によつては名前が変わる。

地面なら『地割れ』、グラスなら『ひび割れ』、恋人間なら『破局』。その他にも色々名称はある。

じゃあ、ここで問題。

「……何だよコレ？」

空中にある“亀裂”とは何でしょうか？

俺には分からない。

「……亀裂……だよな？」

インターミドル会場からの帰宅中、変なものを見つけた。それがこの宙に浮く“亀裂”だ。

どうしよう……間違いなく面倒事だよな。

何かの大事件に関わつてるよお……これ。

「ここはスルー……というのが今までの俺。しかし俺は常に進化し続けているのだ」

というわけでなのはさんに連絡しよーつと♪

端末を出してコールを……。

「ん……？」

と、背中を何者かに引つ張られる。

振り向くがそこには誰もいない。

「何だ……あ」

わかった。

吸われてるんだ、あの亀裂に。

「あー……経験則でわかる。これ抵抗しても無駄なやつだ」
ため息を吐くのとほぼ同時に亀裂の吸引力が強くなった。

あ、もう駄目だ。

吸い込まれーーーーー

「ハッ！」

気が付くと知らない場所にいた。

住宅街みたいだが……どこだここ？

ミッドじゃないぞ。

「……ん？」

周りを見回しているとあるものが目に入る。

表札だ。

「……漢字？」

『山田』と書いてある。

つてことは……ここ日本か？

どうということなの。

「ふむ……」

整理しようか。

散歩してたら変な亀裂を見つけて、吸い込まれて、知らない場所(たぶん日本のどこか)にいた。

駄目だ、ぜんぜん分からない。

「とりあえず……歩くか」

今は夜みたいだが……歩けば誰かしには会えるだろう。

……会えるよね？

「……さっしぶ」

今つて夏のはずだよな？

さて、あれから歩き回つてみたけれど誰にも会えていない。

それどころかいつも側にいるはずの金髪幼女までいなくなつていた。

「さすがに不安になってきた……」

思わず駆け足になる。

「寒いしここがどこだか分かんないし……最悪だ……！」

この際誰でも……例えハラオウンさんでもいい。ごめん嘘、それだけはない。

ハラオウンさん以外なら誰でもいいから助けー！

「わっ……！」

「あっ……！」

曲がり角を曲がろうとしたら何者かにぶつかってしまった。

俺はよろめいた程度だったが、相手は尻餅をついたようだ。

「ー！ー！つと、悪い！ 大丈夫、夫……か……！」

「……！」

ぶつかった相手は小学生くらいの女の子だ。

何で夜に小学生が、とは思ったが……それよりも気になったことがあった。

それはー！

「……なのは、さん？」

黒いバリアジャケットのようなものを着たロリロリなのはさんがそこにいた。

四十一話

「……なるほど」

尻餅をついた状態のまま、黒ロリなのはさんは眩いた。

何が「なるほど」なの？

「曲がり角で異性とぶつかる……それはこの世界における、恋に落ちる男女の典型的な出逢い方という私の中の情報は正しいようですね」

「……はあ？」

何言ってるの、この人？

「臀部から伝わる、この涙が出るほどの衝撃……これが、恋」

「んな訳ねえだろ」

単純に尻打っただけの痛みだろ。

「『恋』とは気持ち悪いものなのです」

「ちげーから。それ尻打って気分悪くなってるだけだから」

本当に何なの？

「で……これは何の冗談ですか、なのはさん」

「む……今、ナノハと言いましたか？」

は？

「ナノハとはどういう関係ですか？」

「えっ……うーん……ソウルメイト？」

「なるほど……つまり私の恋敵、と」

「ごめん、意味わかんない」

というか……。

「なのはさんじゃないの？」

「……これは失念していました。まだ名乗っていませんでした」

黒ロリなのはさんは立ち上がり、スカートの端を摘まむと優雅にお辞儀をした。

「初めまして、私はシュテル・ザ・デストラクター。愛情を込めて『ハニー』とお呼びください、ダーリン」

「お前イカれてるのか？」

「それで、ここはどこなんだ？」

「地球の日本、そこにある海鳴市という場所です」

結局、あてのない俺にはハニーに頼る以外の選択がなく共に行動することになった。

「亀裂がどのとか言っていましたか……ダーリンは何処から来たんですか？」

「愛してるよ、ハニー」

「……きやん♡」

ハニーは頬に手を当てて無表情のまま照れる。器用だな。

面倒臭くなったらこれを言えばいい、というのをこの数分で学んだ。

「はぁ……」

「結婚しますか？」

「頼むから脈絡ある会話をしてくれよ、ハニー……」

「……きやん♡」

もうヤダこいつ。

それにしても……。

「……なあハニー、おかしくないか？　あまりにも人の気配がしない」
さつきからずっと歩き続けているが人っ子一人いない。

「ああ、それは結界が張られていますからね。当然ですよ」

「はっ」

結界？

「……誰が？」

「管理局……ですかね」

「………何で？」

「私たちを止めるため？」

止めるため？

私たち？

「……その人たち、待ってください！」

新たな乱入者が来たのは、俺が混乱の渦中にいる時だった。
その声は空から聞こえてくる。

「……また来ましたか、ナノハ」

「シユテルちゃん！ ……と、知らないお兄さん……？」

声の方を向く。

そこには……。

「あー……もうちよつとで見えるんだけどなあ……」

「見え……？ ……に、にゃああああああつ!!」

白いバリアジャケットを来た……これまたなのはさんに似た少女
が浮いていた。

「むっ、浮気は許しませんよダーリン。ナノハも誘惑しないでくださ
い」

「し、していないようー！」

しまらねえなあ……。

白ロリなのはさんはゆっくりと地面に下りてくる。

「……時空管理局嘱託魔導師、高町なのはですっ！ 今度こそ、お
話聞かせてもらうよ！ シユテルちゃん！」

「お断りします」

「……えっ？ あれ、なのはさん本人？」

何でロリになってるんだ？

四十二話

星の輝く綺麗な夜空に、それよりも輝く光が飛び交っている。あの後、ハニーとロリロリなのはさんが戦闘をおっぱじめた。

「あー……空が綺麗ダナー……」

そして俺は絶賛現実逃避中。

おうち帰りたい。

「流れ弾飛んでこないよな……?」

もしかして逃げるべき?

そーつと……。

「……お兄さん、そこで待っててください!」

速攻でロリロリなのはさんにバレた。

「ダーリン、大丈夫です。すぐにこのクソロリ倒しますから」

「なのはさん、待ってるんでそのクソロリぶちのめしてください!」

「えっ!? えっ!?」

なのはさん は こんらん している !

「なるほどツンデレですか。さすがダーリン次元一可愛いです」

「殺せッ! 無力化とか甘っちょろいこと言っでないで殺してしまえ

なのはさんッ!」

「……ね? 私のダーリンは可愛いでしょう? 私がナノハばかりに

構っているから嫉妬しているんですよ」

「……俺が殺る」

「え、ええと……シユテルちゃん、ごめんね……?」

「……はい?」

いつの間にか、なのはさんの前には巨大な光の塊があった。

何だアレ?

「魔力収束……!」

ダーリンとラブラブしてる最中にするなんて汚

いですよ……!」

「ラブラブなんてしてねえ!」

適当なことばっか言うな！

「本当にごめんね……！ スターライト……」

……あ。

アレ知ってるわ。管理局見学行ったときにやってたヤツだ。

さらば、ハニー。ご愁傷さま。

そして……

「……ブレイカーッ！」

「……何で俺がこいつを背負わなきゃいけないわけ？」

「……ごめんなさい……！」

ロリなのはさんの破壊光線で気絶したハニーをなぜか俺が背負っている。

まあ……重くないからいいけど。

「……で、これからどうするんすか？」

「にやつ!? え、えーつとねえ……」

「にやつ……？」

「もうすぐアースラが来てくれると思うんですけど……」

「阿修羅？」

「アースラです！」

何それ？

「管理局の次元航行艦です」

へえ。

管理局のねえ……ん？

「俺も行くんすか？」

「え……はい。そう、ですけど……」

えええ……。

「……俺、迷っただけなんですけど」

「……それ、どういうことですか？」

「……………え……………」

「……………俺の身に起きたことの経緯を最初から話すことになった。」

「……………って訳なんです」

「なるほど……………」

何が？

「実は……………似たような状況下にある人がいるんです」

「えっ……………本当ですか!？」

「はい。既に保護されていて……………今はアースラにいます」

マジか……………。

他にもいたなんて。

「教えてください、いったいこれって……………」

「はい、ちゃんと説明します。でもまずはアースラに行きましょう」

落ち着いた環境で全員まとめてつてつてことか。

「分かりました」

「ありがとうございます」

まあ……………自分のことだしな。

「てめえ起きてるだろ」

「ダーリン h s h s」

四十三話

《ファースト・コンタクト委員長編……だと思った？ 残念！ 最終
回『遙俺たちの戦いはこれからだかなる旅路、さらばデコ助よ』 ※委員長視点》

「はあ……はあ……勝った……の？」

「ま、まさか……この私が……この私が負けるなんて……！」

「やっと……やっと篠崎くんの妹さんに勝てました……！」

「これで……！」

「私を……認めてくれますよね？」

「えっ……デコ助さんの敵討ちじゃ……あ、いや何でもないです

」

「何でしょうか？」

「……まあ、いいでしょう。貴女を認めましょう、義姉様」

「……やった！」

「これで篠崎くんと……！」

「……ただし、『私は』だかなア！」

「ど、どういうことですか……っ!?」

「フッ……フハハハッ！ 兄様を手に入れるための障害が私だけだ
といつ言ったッ！」

「なっ……!?」

「あの人に掛ければあなたなんて……ッ！」

「……そこまでよお。ちょっと喋りすぎじゃないかしらあ
？」

突然、やけに間延びした声が響く。

「なっ……お、お母様……!? なぜっ……!?」

「あなたが不甲斐ないからでしょお？」

篠崎くんの妹さんが顔を真っ青にして見ているのは、朗らかな笑み

を浮かべた女性だった。

お母様って……。

「篠崎くんのお母様……ですか？」

「うふふ、そうよお」

「この人が……！」

「もお……あなたはお小遣い減らしちゃうんだからあ」

「なっ、何ですと!? 私、お小遣い月に300円ですよ!? これ以上ど
う減らすと……」

「二月でえ……150円よお」

「そんなご無体なっ!?」

えっ……えつと……?」

「ん? あらあらあ……ごめんなさいねえ?」

「い、いえ……」

ま、マイペースな人だなあ……。

「あなたが、委員長ちゃんねえ? 息子からよく聞いてるわあ」

「あ、ど、どうも。初めまして!」

「はい、初めましてえ。それでえ、あなたはうちのチヒロが欲しいの
かしらあ……?」

ち、直球!

ド直球すぎるよお!

「ほ、欲しいと言うか……むしろ貰って欲しいと言いますか……」
「なるほどお……」

あうう……恥ずかしい……!

きつと私、顔真っ赤だよお……!

「ならあ……あげちゃう」

「えっ!?」

「なっ、お母様ツ!?」

「……ってえ、言っただけだお……」

そこで篠崎くんのお母様はさらに笑みを深めた。

その笑みには神と見紛うほどの……ううん、神すら軽く凌駕するであろうほどの美しさがあった。

「あれでも私の大切なたった一人の家族だからあく……」

「お母様、私とパパンは!? 私とパパンを忘れてないですか!？」

「簡単に『あげちゃう』って言うのはあく、何か違うと思うのよねえ
く……」

「スルーされたっ!？」

つまり……。

「どうしろと……?」

「簡単よおく……。……私を倒しなさい。そうすれば認めてあげるわ」

篠崎くんのお母様を中心に鋭い風が吹き荒れたように感じた。

これは……殺気!？」

「む、無理です、義姉様! あの人は言うなれば強制負けイベントの敵キャラ……! 攻撃は悲しみ背負うことで習得できる奥義でも回避は不可、逆にとつても! ラッキーな攻撃ですら当たりません……」

なん……だと……!？」

「例え攻撃が当たったとして、それが天地を乖離させるほどの一撃でもノーダメージ……。その上に真実二到達スルコトハ決シテナイ能力だろうと何だろうとあらゆる能力を無効化する……そんなチートの安売りセールのような……いえ、チートの無料配布所のような存在なんです……お母様は!」

「ふふふ……かかってきなさいい」

本当は逃げ出したい。

でも、もう後には引けない……ううん、絶対に引かないっ!

「行きます……!」

「義姉様!」

「ねえ……義妹ちゃん。私ね……」

篠崎くん……

「この戦いが終わったら、結婚するんだ……」

「なぜ自らフラグを!？」

今、愛に会いに行きます。

この人を……お義母様かあさまを乗り越えて——!!

「ハアアアアアアアアアアツツ!!」

「うふふふふ……!」

私の戦いは……これからだっ!

THE END……………?

デコ助御:別に私、死んでませんからね!?

THE MOTHER母:うふふふふ……!?

デコ助:ハッ!?

四十四話

「先輩!？」

「チヒロさん!？」

『あ、本当だ!』

部屋に入ると、既に十数人ほどの人たちがいた。

さらに俺を見てそのうち三人ほどが声を上げた。

ヴィヴィオちゃんがいる。何でだ? あとの二人は知らん。

そして……。

「ああ、(´)無事でしたか、チヒロさんっ!」

「うっ……」

ストラトスちゃんが駆け寄ってきて、抱きついてくる。

デコ助のせいでなんか気まずい……。

「チヒロさん……?」

「……そこまでです、この泥棒キャット」

はあああああ……。

「ダーリンどうしました? そろそろあの子の妹か弟を作りますか

?」

「もう死ねよ……」

まず第一子すら存在してねえだろ……。

あの子って誰だよ。

「……チヒロさん、この方は……?」

「知らない。知りたくない」

関わり合いになりたくない。

「……はいはい、再会を祝うのもいいのだけれど私たちを忘れないでね」

緑色の髪をした女性が手を叩いて注目を集める。

あ……きつとこの艦のお偉いさんなんだろうなー。

「初めまして、リンディ・ハラオウンです」

——そして、現状の説明が始まった。
……ん？

『ハラオウン』……？

「なるほどなあ……」

その後、リンデイさん自称・母親のキチ○イ（ハラオウンさんと被るのでそう呼ぶことにした）とフローリアンとかいう双子の姉妹から説明を受けた。

……難しい話はよくわかんなかったけど、要はフローリアン姉妹の使った装置が悪いとか。

で、今は“U—D”だか何だかというラスボス戦前の作戦会議だったらしい。

「またはた迷惑なことを……」

まあ、終わったことをぐちぐち言ってもしょうがないか。

切り替え切り替え。

「それじゃ、今から少し自由時間にします。各々話したいこともあるでしょう」

リンデイさんがそう言つて、みんな一時解散。

当然ヴィヴィオちゃんとストラトスちゃんが近寄ってくる。

「……大変なことになりましたね」

「だなあ」

大変というか面倒くさい？

「大丈夫です。チヒロさんは私が守ります」

「あ、ああ……そ、そうだな」

「……あ、れ………？」

……气まずい。超气まずい。

「そうですね！ 私たちで先輩を守ります！」

「おお！ 頼むぞ！」

ヴィヴィオちゃんの頭を撫でてやる。

「えへへ……先輩ってお兄ちゃんみたいですよね」

「え？ お兄ちゃんいるの？」

「あ、いえ、いませんけど……いたらこんな感じかなあ、って」
そっか。

……………あー。

「その……お前も……頑張れよ、ストラトスちゃん」

「……えっ!？」

ストラトスちゃんの頭を撫でる。

手つきがぎこちないのは……こいつとの今までを考えると仕方ないよな。

「……………まさか……偽者……?」

……アイアンクローかましてやった。

四十五話

とある双子の姉妹の機械が原因で過去にやって来てしまった俺。
迫り来る闇、U—D。
それに立ち向かうは管理局屈指の魔導師たち。
果たして……世界の命運は!?

「……感じて理解してるんだけどそれであってる?」

「私もそんな感じですよ」

「え……えと、そこまでドラマチックではないですけど……私もです
とりあえずヴィヴィオちゃんたちと現状の再確認。」

「おお、合ってたか。よかったよかった」

「先輩は寝てましたもんね。さっきの説明のとき」
記憶にございません。

「……チヒロさん!」

ヴィヴィオちゃんたちと話していると、知らんヤツから声をかけられた。その傍らには髪の毛の長い女もいる。

思わずストラトスちゃんの肩を掴んで盾のように構える。

知らないヤツ嫌い。

「……誰だお前ら」

「えっ?! 俺ですよ! トーマですよ!」

『わたしは? わたしは?』

俺に上条さんな知り合いはいない。

そして電波（飛ばしてくる）女もな。

「知らんわお前らなんぞ!」

「ええ!?!」

『……ねえ、トーマ。もしかして先生、わたしたちより過去から来たのかも』

あん?!

お前らより過去から？

「とうるか 先生」 ってなに？」

「……え!? 先輩、念話聞こえるんですか!？」

念話？

なにそれ？

「簡単に言うと、魔力を使って声を出さずに意思疎通をする魔法です」

「説明ご苦労ストラトスちゃん。でも俺魔力ないよ？」

「……もしかすると、何らかのレアスキルかもしれないね」

「先輩がレアスキル保持者……？」

へえ。どうでもいいけど。

「で、結局お前ら誰なんだ？」

「あ、えっと、俺はトーマ・アヴェニールです！」

『わたしはリリイ・シュトロゼックです』

アヴェニールとシュトロゼックね。

「俺は……いいよな。知ってるみたいだし」

「はい！ リリイが未来でお世話になってます」

……未来でお世話になってるってどういうこと？

「あー……ちなみにどうお世話になってるんだ？」

『わたしの先生です！』

さつきも言ってたな、それ。

「先生……って、何の？」

「……あー……何て言うか……リリイは少し特殊な環境で育ったと言

いますか……。世の中や一般常識について疎いと言いますか……」

つまり？

「つまり世情と一般常識の先生です」

ふうん。

よくわからん。

「な、何だろ……それ先輩が一番やつちやいけないやつじゃないかな

……っ？」

「……あー…………やっぱり……ヴィヴィオは分かる？」

……今のはムカツと来た。

よし、ならば未来の俺がどれほど優秀なのか試してやろう。

「おいシュトロゼック！ 問題！」

『ででん！』

……効果音とは、やるじゃないか。

「朝、人に会ったらまず何をやる？」

『顔を見て嘲笑う！』

ほう……！

「人を褒めたら？」

『その後落とす！』

「年下と遊ぼう！ どんな遊びでも？」

『情け容赦なく全力で！』

「右の頬を叩かれたら？」

『ないコトないコト言い触らして世間的に抹殺する！』

「友達がカレーを食べてたら？」

『う〇こー！』

素晴らしい……！

デイ・モールト、デイ・モールト素晴らしい！

「素晴らしいぞシュトロゼック……いや、リリイ！」

『一生ついていきます、先生！』

「……ね？」

「苦労してるんだね……」

四十六話

現在、俺を除いた未来組とこの時代のロリ組で対悪の親玉戦の作戦会議中。

非戦闘員の僕は作戦会議には参加せず、食堂でたまたま持っていた携帯ゲームをしている。

「いやあ……インターミドル開会式が始まるまでの暇潰しに持ってきたのが役に立つとはな」

ああ、充電器持ってくればよかった。

まだ大丈夫だけど……いつまで待つのかも分からないしなあ。

全部の問題が片付くまで充電持つかな……。

「……ねーねー、なにしてるのー?」

「あん?」

どこのキチ○イと似てる顔をしたのが話かけてきた。

こいつ……確かハニーと一緒にいたガキンチョだよな?

「何って……ゲームだけど……」

「げーむ? ってなに?」

ゲーム知らんの?

「あー……やってるトコ見るか?」

「みる!」

「ほわあー! カッコいいぞ!」

ガキンチョを膝にのせてゲームをプレイする。

「ずがーん! ばこーん!」

「おい、あんま暴れんなよ」

「あ、ごめん」

画面の中のキャラクターに合わせて動くガキンチョ。

何か頭の緩そうなヤツだな。

「……そういや名前聞いてなかったな。俺は篠崎チヒロ、お前は？」

「ん？ ボクはレヴィ・ザ・スラッシュャー！ 強くてスゴくてカッコいいんだぞー！」

あ、やっぱり残念系なんだなコイツ。

「そうか、カッコいいのか。それはスゴいな」

「えっへん！」

うーむ……なるほど、これがアホ可愛いというやつか。

バカな子ほど可愛いとはよく聞か……。

まあ、何にせよ。

「よろしくな、レヴィ」

「よろしくー！ ヒロヒロー！」

……あれ……？

何だろ、コイツどっかで………？

「……あつ！ ヒロヒロー！ 負けちゃうよー！」

「あ？ お、おうー！」

偶然なのか必然なのか、レヴィの発した言葉に反応した俺は感じた違和感を頭のすみに追いやってしまった。

……ぐうううう。

「ん？」

「……お腹すいた」

しばらくゲームをしていると唐突にレヴィの腹が鳴った。

「……言われてみると腹減ったな」

ゲームを中断し、レヴィを抱えて立ち上がる。

調理場を覗くが誰もいないようだった。

「ふむ……勝手に作っちゃまずいかねえ？」

「んー？ ヒロヒロは料理できるの？」

「ん？ まあ、一応」

「凝ったものは作れないけど。」

「ボクお腹すいたよお……」

「……作れと？」

「うん！」

「……まあいいけど。」

「コイツに命令されて作ったということにすれば……」

「そうすれば全てコイツの責任だ。」

「俺はお咎めなしになるはず。」

「めーれい？ ボク、よく王様にめーれいされるよ？」

「話が飛んだ。」

「命令」という言葉から連想したことなんだろう。思ったことそのまま言っちゃう子なんだな、コイツ。

「て言うか……」

「……王様って誰？ 俺のこと？」

「お前に命令したことないんだけど？」

「王様は王様だよ？」

「いやいやいや、わかんねーよ」

「えーなんでー!？」

「はあ……もう面倒くさいからいいや。」

「冷蔵庫を漁る。何作ろうかなあ……」

「うし、材料的にカレーにすつか！ レヴィ、お前も手伝え」

「はーい！」

「あとリンディさんに何か言われたら全部その『王様』のせいにするぞ」

「わかったー！」

「さあ……腕がなるぜ。」

「見せて……否！」

「魅せてやろう、俺の食戟を！」

「そーいやお前なんでいんの？ 作戦会議は？」

「王様がね、『いても邪魔になるだけだからおそとで遊んでなさい』って」

要らん娘なのかなあ……。

四十七話

「どうだレヴィ、うまいか？」

「あぐあぐあぐっ……んぐ、おいしー！ ヒロヒロ、これおいしーよ！」

「そうかそうか。」

「それは良かった。さて、俺も食うかな。」

「あんま急いで食うなよ。喉につまるぞ」

「と、自分のカレーを準備しつつフラグを建ててみる。」

「あぐあぐ、あーい……むぐっ!？」

「はい回収どーも」

カレーをテーブルに置き、レヴィを抱え上げて背中を叩く。

「確か頭を体より下にするんだったよな。」

「ぷへあっ……ひ、ヒロヒロお……い！」

「はいはい怖かったのな」

涙目でしがみついてくるレヴィの頭を撫でてやる。

「なんか小さい頃の妹を思い出すなあ……」

「……いい匂いがする〜！」

「ちようどレヴィが三杯目のカレーを食べ始めた時だった。」

「作戦会議に行っていたやつらがわらわらと食堂に入ってきた。」

「終わったのか？」

「先輩！ これ何の匂いですか？」

「カレー。ちよつと前に作ったんだ」

「え……先輩が作ったんですか？」

「ああ」

「つと、そうだ。」

「リンデイさん、勝手に食材使つてごめんなさい」

「あら、いいのよ」

「むっ？ ヒロヒロは悪くないよ！ 王様がめーれいしたんだよ！」
「えっ!? 我は何も言っていないぞ!?!」

あれが『王様』か。

「大丈夫よ、怒らないから。それより私にも食べさせてもらえるかしら?。」

「ああ、どうぞ。他の人たちもぜひ」

ヴィヴィオちゃんを除いた未来組から声があがる。

「チヒロさんの料理、美味しいんですね」

「アインハルトさん食べたことあるんですか!?!」

『う〇こ！ 先生のう〇こだよ、トーマ!』

「お願いリリイもうやめて……ッ!」

よそつてやるか。

「レヴィ、手伝え」

「あいあいさー!」

あとリリイ、貴様は覚えておけよ。

「これが」

「ボクたちが!」

「丹精込めて作った」

「カレーでーす!」

いやまあ、作ったの俺なんだけどな。

「ちゃんと全員分あるのね」

「おかわりもありますよ」

「……け、けっこう作ったのね」

いやあ、でかい鍋とキッチンに興奮して……つい。

食材も限界ギリギリまで使ったし。

てへぺろ。

「わあ！ おいしそうだね、フエイトちゃん!」

「そうだね、なのは」

「……………なんか……………今……………嫌な……………」。

「ヒロヒロどうしたのー？ 早く食べよーよ！」

「……………お前まだ食うの？」

「うん！」

その細い体のどこに入るんだ……………？

レヴィが俺の手を引っ張る。

その先は……………

「オリジナルー！ となり座つてもいいー？」

「あつ、レヴィ。いいよ。……………あと、私はフェイトだよ」

「わかったぞー、へいとー！」

「あ、あはは……………」

アカン。

「……………ダーリンが浮気してる！」

「お前とリリイだけ泥食わすぞ」

『な、なんでですか!?!』

四十八話

気まずい。

とにかく隣の席の人との空気が気まずい。

「あぐあぐ……んく、おいしーぞー!」

俺の膝の上で能天気にうん……カレーを貪るコイツが羨ましい。

「あの……」

隣の席の人……ハラオウンさんが話しかけてきた。

思わず身構えてしまう。

「……な、何ですか?」

「カレー……食べないんですか?」

実はさつき少しだけ喋った。

その時に気付いたのだが、どうもこの時代のこの人はまともらしい。

「あ、ああ……食べます」

けれどやっぱりどうにも信用できない。

少しカマをかけてみるか。

「レヴィ」

「ん?」

「あーん」

「おー! ほい、あーん!」

わざと口の端にカレーが着くように食べる。

かつ、ハラオウンさんが気付くように……。

「あっ……」

食い付いた!

「ん? どうしました?」

「口……カレー、着いてますよ」

「え? 本当ですか?」

カレーが着いているのとは逆の場所を触る。

当然そこには何もついていない。

「あ、そっちじゃなくて……」

「あー……拭いてくれませんか？」

未来のあなたなら言わずともやるぞ。というか許可なく。

俺はあなたの「まともさ」を今1%信じることにした。だが、あと「100%」信じたい。

さあ……俺を信じさせてみるッ！

「えつと……いい、ですけど」

困ったように、けれどどこか恥ずかしそうに拭いてくる。

この反応は……！

「……いけるー！」

「えつ……っ？」

「え、えと……その……あ、あーん……！」

「あーん」

いやあ……！

未来で困らされている相手にこうしてもらうのは、相手を屈服した気分がいい気分だぜ……！

「あ、ハラオウンさん、ちよつと熱い」

「ご、ごめんなさい！ ふー、ふー……」

ふははははははっ！

もはやハラオウンさんなど恐れるに足らずッ！

この時代で性格を改変……否、改善してやろうッ！

「あーん……これなら熱くないですか？」

「あむ……あ、らいじよぶれす」

ふっ……勝った。

ハラオウンさん
や つは未来、オレは過去。最初からやつに勝ち目はないのだ。

「ふー、ふー……」

ハラオウンさんが次の一口分を冷やしているのが視界の端に映る。
ククク……これが満足感か……！

「んー？ ヒロヒロ、カレーついてるよ？ ペろっ」

「このクソガキツ！ 正妻である私を差し置いてダーリンを舐めるなど万死に値するツ！」

「わわっ!? シュテるんどうしたのっ!?」

もう勝手にやってろ。

そうそう、改善と言えばもう1人。

とても気になっている人物がいる。

「でね、ユーノくん……」

「……なるほどね、なのは」

いったいどういふことだ……??

四十九話

「……あの〜」

思いきってなのはさんとあの人に話しかけてみる。

「あ、篠崎さん」

「……どうも、なのはさん。カレーどうですか？」

まずは当たり障りのない感じで。

きつかけさえ作ればあとはあつちから来るはずだ。

……それにしても、やっぱりなのはさんの「篠崎さん」呼びは慣れないなあ。

「あ、はい！ とっても美味しいですよ！」

「そうですか」

「……なのは、この人って……」

来た！

「私が保護した人で、篠崎チヒロさんって言うの！」

「どうも、ご紹介に預かりました篠崎チヒロです」

「あ、どうも。ユーノ・スクライアです」

やはり……あの禍々しさが無い。

……うーむ。

「あ、もしかして……なのはさんと付き合っ……」

「あーん……」

ハラオウンさん……大事なところなんだから。

食べるけど。

「あむ……あ、ハラオウンさん、福神漬も欲しいな」

「あ……はい、すぐに取りってきますね？」

ハラオウンさんがキッチンの方と消えていく。

よし、これで邪魔するヤツはいなくなったな。

あ、そうだ。ついでに……。

「……おい、アヴェニール！ お前、未来から来たってことは年下だよな？ ちよつとコーラ買ってこいよ！」

「ええっ!?!」

「あ、隣町のな！」

隣町どころか、ここがどこなのかもよく分かってないけど。

「で、でも、俺、お金っ……!?!」

「何とかしろ」

『あ、トーマ、私スプライトね!』

「リリイ!」

よし。

「で、何でしたっけ？」

「に、にやはは……」

「な、何て言うか……フリーダムな人だね……」

あなたには言われたくない。

「あ、そうそう。お二人は恋人か何かですか？」

「ブツ!」

「ふえ……?」

スクライアさんは吹き出し、なのはさんは頭の上に疑問符を浮かべる。

この反応は……違うみたいだな。

「い、いやっ……僕たちはそういうのじゃ……」

「ユーノくんはお友だちですよ?」

「……ないん……です……」

あっ。

好きは好きなのね。

「あの……」

「ん?」

斜め後ろに座っていたヴィヴィオちゃんが話しかけてくる。

いったいどうしたのだろうか。

「何、ヴィヴィオちゃん?」

「なのはママとユーノさんの関係……気になるんですか?」

気になると言えば気になるな。

未来があんな感じだし。

「気にならないって言ったら嘘になる、かな」

「……そう、ですか」

そう言つてヴィヴィオちゃんは何かを考え込むような顔になった。
本当にどうしたんだ？

「……あの、福神漬け、持ってきました」

福神漬けの入った皿を手に持ちハラオウンさんが戻ってきた。

ふふ……俺は完全にフェイト・T・ハラオウンという女を克服し、屈
服させたようだな。

「ありがとうございます。では食べさせて頂きましょうか……！」

「あ、はい」

勝利の福神漬けか……実に、実に美味しいぞッ！

「なんや、面白い人やなあ」

五十話

「おにーさん、おにーさん」

「ん？」

ラスボス戦前食事会イベントが終了すると、茶髪の少女が話し掛けてきた。

ちなみにみんなは食器洗い中。カレーを作った俺とレヴィはやらなくていいと言われた。

……こいつらラスボス戦行かなくていいのか？

「こんにちは、ちよつとお話しませんか？」

「あ？ ああ、いいぜ」

すつごい満面の笑顔の茶髪少女。

ジークとしゃべり方が似てるなあ。

「ほんならまずは自己紹介ですね。私は八神はやて言います」

「篠崎チヒロだ、よろしく」

「篠崎さんですか……ほんならおにーさんって呼ばしてもらいますね」

「いや、ほんならの意味がわかんねえよ」

突っ込みを入れると、ますます笑顔になる八神ちゃん。

……ていうか、あれ？ この人、この時代の人だから年上になるのか？

八神ちゃんは不味いかな？

「じゃあ、俺は……八神、さん？」

「ああ、そんな堅くなくてええですよ」

じゃあ八神ちゃんでもいいか。

「それで話して？」

「そやなあ……あ！ あのカレー作ったのおにーさんって本当なんですか？」

「そうだぞ」

気合い入れて上に凝りに凝って作ったからな。

自信作だ。

「本当においしかったです。おにーさん、料理上手ですねえ！」

「まあ、独り暮らしだしな」

「おにーさんも独り暮らししてるんですか？」

「……も？」

「八神ちゃんも独り暮らしなの？」

「今は違いますけど……ちよつと前は」

「ふーん。」

「あ、そうや！ 未来から来たってことはあの子……ヴィヴィオちゃんたちと同じでなのはちゃんの知り合いなんですか？」

「……なのはさんにはお世話になってるよかなり。」

「そうなんですか。なら……私とは？」

「あー……会ったことないなあ」

「あらら、それは残念やわあ……」

しゅんとした顔をする八神ちゃん。

「……話題を変えるか。」

「あー……八神ちゃんや」

「んう？ 何ですか？」

あ、やばい。

話題を考えてなかった、どうしよう……！

「えっ……と……」

「おにーさん？」

ええい、ままよ！

「お、おっばいは……好きかい……？」

「……やっぱりおにーさんは面白い人やなあ！」

「まさか八神ちゃんがあそこまでおっぱい談義についてこれるとは……！」

いやあ、白熱した。

これはなのはさんに続くソウルフレンドになれるんじゃないか……!?

「残念だよ、今すぐにも紹介したいおっ委員長ぱいがいたのに……彼女は未来にいる」

「なら私がこの時代のいいおっぱいを紹介するで！」
……なんだと？

「本当か？」

「もちろんや！ ほな行こか！」

八神ちゃんが歩き出そうとして、振り返る。

……何だ？

「むふふ〜！ ていつ〜！」

なんか引つ付かれたでござる。

……まあ軽いし、いいか。

「ほな、れつつ〜！」

五十一話

揉む。

「なるほど、これは……」

「なかなかのモンやろ？」

とにかく揉みまくる。

「……おい」

「ん？ なんや、シグナム？」

「あ、いえ、主はやってではなく……」

俺は右を。八神ちゃんは左を。

腕……より正確に言うのなら、指の持つ全ての機能をフル活用してただただ揉みしだく。

「……あの」

「ん？ 何スか？」

「お前に言ったのではないッ！」

いきなり怒鳴るな。ビックリするだろうが……。

「あ、シグナム。おにーさんイジメたらアカンで」

「い、いえ、苛めているわけではなく……」

「そーだそーだ、この淫乱ピンク！」

「……我が剣の錆びになりたいのか……?」

おいおい、もちつけよ。

「というわけで篠崎チヒロです。よろしく、淫乱おっぱい」

「よろしくする気はないんだろう、お前……!」

なんでそんなにピリピリしてるのさ。

ちよっとおっぱい揉んだだけじゃんか。

「ほら、自己紹介せなアカンで、変態おっぱい」

「主はやってっ!?!」

裏切られたかのような表情で八神ちゃんを見つめるおっぱい。

「くっ……主はやての騎士、ヴォルケンリッターが将、シグナムだ」
「つまり……八神ちゃんのメス奴隷的な？」

「まだ違うで。まだ」

まだ違うのか。

「主はやて、先程からあなたの言動はおかしい。いったいどうしてしまったと言うのですか……？」

「え、そんなことあらへんで？」

シグナムさんが八神ちゃんを見て、そんなことを言い出す。

そうなの？

「いえ、明らかにおかしい。まさかこの男に何か……!？」

「おにーさんはそんなことせえへんよ」

「そーだ！ 酷い言いがかりだぞ、このおっぱいバズーカ！」

「……………斬るッ！」

なんか剣出してきた。

危ないぞ！

「シグナム、非戦闘員にデバイス向けるなんてなに考えとるの!？」

「止めないでください、主はやて！ 世界のためにもこの男は葬って

おくべきです！」

「だからダメやって！ 言うこと聞いて！」

八神ちゃんの必死の叫びも無視して今にも飛び掛かってきそうなシグナムさん。

そして揺れるパイオツ。

「ホルスタイン……………」

「……殺す！」

「シグナム！」

突然、シグナムさんの四肢とおっぱいを光の輪が拘束した。

何だっけ？ バインド？

「あ、主はやて？ なぜ……」

「なぜ？ 言うこと聞かんでおにーさんを……民間人を襲おうとしたからや」

えっ!?

「……八神ちゃんはまだ揉み続けているのだろうか」
俺よりおっぱいへの執着心は強いみたいだし……。
シグナムさん頑張れ。マジ頑張れ。

「……ん？」

しばらく歩いていると食堂の扉の前に何か……否、誰かがいるのを見つけた。

それは……

「コソコソ……」

コソコソと食堂の中を覗いている、禍々しい炎を連想させる赤と黒の和服みたいな格好をした金髪の少女だった。

五十二話

「……………何してんの?」

「わひゃうっ!?」

食堂を覗く見知らぬ金髪娘に話しかける。

「……………あ、あなたは……………?」

「いやそれこっちの台詞だから。自己紹介の時にはいなかったよな?」

新しく保護されたヤツかな。

……………何でコソコソ食堂を覗いてるんだ?

「……………あ、篠崎さん!」

食堂の中からはさんが話しかけてくる。

「いえ、何か知らない娘が……………」

「しー! しー!」

なのはさんに金髪娘のことを聞こうとしたら、金髪娘が口到人差し指を当て「しー!」と言ってくる。

すっごい必死そう。

「……………ふう」

俺が黙ったのを見て、金髪娘が安堵の息を吐く。

「……………いえね! 知らない金髪娘が」

「ちよっ!? ああもう! こっちに來てくださいっ!」

金髪娘に手を引かれ、薄暗く人気のない倉庫のような場所に連れ込まれた。

……………ナニする気なの!?

「いや！ やめて！ ワタシには両親と二人の妹が……」

「そういう茶番はいらないです」

……もしかして何か怒ってらっしやる？

「……ぶすう」

なるほど。

もしかしくなくても怒ってらっしやるようだ。

「……いったいあなたは何なんですか？」

「俺？ 篠崎チヒロだけど……」

「名前のことじゃありません！」

じゃあ何だよ。

「人がコソコソしているんですから、何か見つかりたくない理由があるに決まっていますよ！」

ああ、それでか。

なのはさんに聞こうとしたことを怒ってるのね。

「でもコソコソしてるってことはやましいことしてるんだよな？」

「うぐ……ッ！」

凶星か。

「何だよ。どんなやましいことしてたんだよ」

「ちがつ、別にやましいことなんて……！ ただ覚醒したのに誰も現れないからちよつと様子を見に来ただけで……！」

覚醒？

「覚醒ってなに？ 厨二病？」

「……チュウニビョウ？」

よく見ればそれっぽい格好してるし。

……ん？

「お前、ほっぺた汚れてるぞ」

「……え？ どこですか？」

汚れてるのは逆の頬を拭いた。

はあ……。

「ほれ、じっとしてろ。拭いてやるから」

「わぶっ……！」

ポケットから出したハンカチで汚れている頬を拭いてやる。

……よし、落ちたな。

「……あ、ありがとうございます」

「あいあい、どーいたしまして」

そして無言が訪れた。

ただただ気まずい空気が流れる。

「……あの」

「……なあ」

金髪娘も空気を変えようとしたのか、お互いに発した言葉が被ってしまい再び無言になる。

「あ」

「な、何ですか……?」

俺がいきなり声をあげたのにビクツと体を揺らす金髪娘。

悪いことしたな。

「あー……すまん。ちょっと待ってろよ」

そう残し、俺は倉庫を後にした。

五十三話

その後、食堂へと戻りカレーを一皿持ってきた。

「ほれ」

「……これは？」

「うん……カレーだ」

金髪娘は恐る恐る受け取ると、一緒に手渡したスプーンで一口よそ
る。

それをゆつくりと口の中に含んだ。

「どうだ？」

「……おいしいです」

当然だ。誰が作ったと思ってる。

そしてどれほどの量を一緒に煮込んだと思ってる。

「あなたが作ったんですか？」

「ああ」

「……すごいですね」

ふっふっふん！

「……私には破壊しか産み出せません」

「何だそれ？」

意味が分からない。

「……あなたが作ったこれは、きつと大勢の人を喜ばせることができ
るのでしよう。ですが私が作るものは……人の心を傷付ける」

「はあ……そうなのか」

「……え？ 何なの？」

厨二劇場始まったの？

「あー……でも『壊す』のって全部が全部悪い訳じゃないんじゃないか
？」

「……えっ」

金髪娘は弾かれたように俺を見る。

「例えばさ、馬鹿げた古いきたりとかは壊した方がいいだろ？」

「……え、えつと……そういう『壊す』じゃなくて……。こう、物理的

と言いますか……」

えっ？

「じゃあ新しいビルを建てるなら元々あったビルを壊す必要がある、とか？」

「た、確かにそれは物理的ですが、そうじゃなくて……」

これも駄目か。

じゃあ……。

「えーつと……」

「……ふふふっ」

唸る俺を見て金髪娘が小さく吹き出した。

なんだ？

「あつ……ごめんなさい。何だか可笑しくて……」

「……変なヤツ」

コイツの笑いのツボはようわからん。

「……ありがとうございます。何だかちよつと元気が出ました」

「そもそも何か落ち込んだのか？」

「そう……ですね。落ち込んだのかもしれない」

自覚なし？

「完全に吞まれてしまう前に……私が私でなくなる前に、貴方に出会えて本当に良かった」

「……はあ？」

訳のわからない言葉を言い、金髪娘は立ち上がる。

「カレー……ご馳走さまでした。残してしまつてごめんなさい」

「あ、ああ……別にいいけど」

「これ、とっておいてください。用事が済んだらまた戻って来ますので、その時に食べますから」

「わ、わかった」

ありがとうございます、と微笑んで金髪娘は歩いて行く。

途中で振り替えると笑顔を浮かべ俺に言った。

「それから、食堂にいる皆さんに『本来の役目』を果たすようお伝えください」

「お、おうよ。任せとけ」

もう一度笑顔を浮かべると、今度こそ金髪娘は歩いて行った。

「……結局、アイツ誰だったんだ？」

「おいオメーら！ 何か知らんがやることあったんじゃねえのか！」

「え？ 篠崎さん、やることって………あっ!？」

俺の言葉を聞いて、食堂で寛いでいたヤツらがいつせいに慌て出す。

……ちゃんと伝えたぞ、金髪娘。

「おらっ！ さっさと行けっ！」

「痛ッ!？ ちよっ、何で我だけ蹴られるのだ!？ あ、痛いからやめッ

………!？」

五十四話

「お前は戦わねーのか？」

なのはさんたちを（どこにだか知らんが）送り出したあと、猫耳つけた変なシヨートカット女に絡まれた。

「ダメだよ、ロツテ。確かこの人、非戦闘員の……」

猫耳のロングヘア女がそれを嗜める。

顔が似てる……姉妹？

「まあ……魔法使えないですし」

「なんだ。ただの役立たずか」

「ロツテ！……ぷぷ」

……いいだろう。

てめーはおれを怒らせた。

「ふにやあああ……こ、こしがあ………つ！」

「ひにやあつ……ぬけちやつたにやあ………！」

「せ、先輩……何してるんですか？」

「ん？ おお、ヴィヴィオちゃん、おかえり」

数時間の間、生意気な猫姉妹を撫でくりまわしているとヴィヴィオちゃんたちが帰ってきた。

『さすが先生……ナデラー界に轟く“腰砕きチー”の二つ名は伊達じゃない………！』

「待ってリリイ、初めて聞いたんだけど何それ」

……なるほど、未来でも俺のナデラーっぷりは健在か。

「……あ、アリア……ロツテ……？」

何か変な黒いガキが固まってるけど………ま、いいか。

俺のナデテクを食らって蕩けている猫ども捨て、ヴィヴィオちゃんたちのもとへ。

「ふにやつ…………も、もつとお……………」

「やめちややめにやああ……………」

ええい、やかましい。

「羨ましい……………！　ダーリン、私にも……………」

「お前にやったら変なこと言うからヤダ」

「…………ちっ」

舌打ちすんな。

「えつと……………」

「ん？　ああ…………気にしないでくれ」

帰ってきた面々を見回す。

なんかボロボロだなあ…………あちこち汚れてるし。

…………ん？　見慣れないヤツが…………って、あれ…………？

「お前は……………」

「あ、そうだった！　先輩、この人は……………」

数時間前に出ていった面々にはいなかった人物。

数時間前に俺と話をしていた人物。

彼女が俺の前に歩いてくる。

「…………ユーリ・エーベルヴァインです」

金髪娘…………ユーリは微笑みを浮かべると、俺に言った。

「カレー、ちゃんと取ってありますか？」

「あむ……………」

ユーリは俺の隣に座り、俺に取っておくように言ったカレーを食べ
ている。

「…………ねえねえ、ヒロヒロは何でユーリのこと知ってるの？」

「まあ、色々あつてな」

話を聞いたところ、どうもこいつがラスボスだったらしい。知らぬうちに俺は危機的状况にあつたようだ。

「……本当にこんなヤツがラスボスかよ？」

むにむにとユーリの頬をいじる。

「だ、ダーリン！ そういうのは私に……！」

「……本当はコイツがラスボスなんじゃねえのか」

少なくとも俺にとっては間違いない。

「……あむあむ」

ユーリはもくもくとカレーを食べている。

うむ、いい食べっぷりだったぜ。

「なあ、うぬ……」

「……ん？」

ひたすらカレーを食うユーリを見ると、誰かに話しかけられる。

確か……『王様』だっけ？

「少し話をせぬか？」

「え？ 疑問系ってことは拒否権あるんだ？ じゃあやだ」

五十五話

「……わ、私の言い方が悪かったようだな。話をしようではないか」

「それは人にモノを頼む態度なのかなあ……？」

「ぐっ……は、話をし……てください……！」

ふむ。

「そこまで言うなら仕方がない。聞いてやろう」

「こ、このっ……ふー……ふー……落ち着け……落ち着くんた、我よ……！」

くくく……怒ってる怒ってる。

「ヒロヒロお……あんまり王サマいじめちやダメだよ？」

「いじめてねえよ。だろ、ハニー？」

「当然です。ダーリンは人をいじめたりなどしません。寝言は寝て言いなさい、レヴィ」

少なくともハニーは俺の味方だ。

ラスボスとかいってごめん。

「で、何だよ、話って？」

「……うぬはいつたいつ、どこでユーリと知り合ったのだ？
なるほど。」

それが聞きたかったのか。

「だが教えない」

「なっ……何故だ!？」

「なんとなく」

「何だそれは!？」

なんとなくはなんとなくだよ。

「……ずっと前から思っていたのだが、うぬは我を毛嫌いしているよ
うだな。何故だ？」

「えっ？ 別に毛嫌いなんてしてないけど」

どこにそう思われる要素があったんだ。

まったく身に覚えがないんだが。

「は……はあ!? 嘘を言うなっ!」

「嘘じゃないって」

「じゃ、じゃあなぜ我に謂われなき罪を被せたあげくに足蹴になどした!？」

「そんなことしたっけ？」

「……………あー、したかも。」

「……………愛情の裏返し？」

「疑問系ではないか!？」

「……………例え王と言えど、ダーリンを奪う気なら容赦しませんよ?」

「貴様は黙つとれいッ!」

「はあ……………」

「仕方あるまい。」

「よしよし、ほら落ち着いて」

「きつ、貴様! 王である我の頭を撫でるとはいったい何事かッ! 無礼であ————」

「篠崎さん、未来に帰る算段が————つて、ダイアーチエちゃん!？」
「……………あ……………うあ……………!」

「ああ、なのはさん」

「王様を撫で繰り返すこと数十分。」

「なのはさんがやって来た。」

「ダイアーチエちゃん!?! しっかりして!」

「……………ひ……………う……………あう……………!」

「かなり本気でやったからな。」

「復活するのにはばらく掛かるだろう。」

「ダーリン! わ、私にも! 私にも今のやつを……………!」

「嫌だ」

「くうううう……………っ!」

あ、そうそう。

「何でしたっけ、なのはさん？」

「あ、アミタさんたちが未来に帰るための装置を……じゃなくて！
篠崎さん、ディアーチエちゃんに何を……!？」

なるほど、やっと未来に帰れるのか。

「みなさんはどこに？」

「あ、えつと……」

ふむふむ。

「なら行きましようか？」

「そうですね……じゃない！ スルーなんですか!? ディアーチエ
ちゃんはスルーなんですか!？」

「ほらユーリ、レヴィ……ついでにハニーも。行くぞ」

「あ、待ってください」

「ん？ どこ行くのー？」

「ダーリンせめて手を！ 手を繋ぎましよう！」

嫌だね、絶対に。

……よし、さっさとみんなのいる場所に行こう。

「デイ、ディアーチエちやあああああんっ！」

「……あふ……うう……あっ……!」

五十六話

フローリアン姉妹から元の時代に帰る際の話が聞かされた。

二人（十八ニーたち）が元の世界に帰る途中で俺たちを未来へと連れていくらしい。

そして、何らかの影響を及ぼさないように記憶は消去されるんだとか。

「ええー!？」

「せっかく出会えたのに……」

後者について何人かは不満を漏らしていたが……まあ、仕方ないことだ。

それから、二人には何度も何度も謝られた。

一応、俺は『被害者』になるらしいからな。

「……それでは、転送を開始しまーす!」

そろそろ時間のようだ。

「何だか寂しくなるね、フェイトちゃん」

「……そうだね」

こっち見んな。

「私たちは……私は記憶消去しませんよね!? ダーリンのことを忘れるくらいなら私は自害しますー!」

どうぞどうぞ。

「……ダーリンを道連れにして!」

「おい!」

……

「ねえ……ヒロヒロお……」

レヴィが話しかけてきた。

「なんだよ!」

「もう会えないのかなあ……? ボク、ヒロヒロともっとゲームしたいよ」

んーむ……。

『神々の黄昏オンライン』

「え？」

「俺が今、元の時代でやってるオンラインゲームだ。これからお前のいく場所からできるのかは知らないけど……」

「やるー！ 絶対にやるから、また一緒にゲームしよう！」

まあ……タイムマシンもどきが作れるくらいのフローリアン姉妹あに頼めばできるのかもな。

キャラ名を教え、レヴィの小さな手と指切りをした。

「やくそくー！」

「ああ、約束だ」

レヴィは大喜びしてハニーたちの方へと駆けていった。入れ替わるように、今度はユーリが近寄ってくる。

「仲、良いんですね」

少し不機嫌そうだった。

「まあ、な。友達だし」

「そうですか」

少しの間、お互いに無言になる。

そしてユーリは真剣な表情になり、俺に言った。

「多くは言いません。一つだけ」

ユーリはそこで1度区切り、そして。

「……必ず。必ず会いに行きます」

そう一方的に告げて、ユーリは戻っていった。

王様は……俺を睨み付けてる。睨み返してやった。

「ひっ……！」

……ああ、そうだ。

俺も話をしなくてはいけない人がいるんだった。

「スクライアさん」

「ん？ なんだい、えつと……シノザキさん？」

せめて、我が同志なのはさんだけでも救ってみせる。

「……スクライアさん、なのはさんが好きなんスよね？」

「ち、直球だね……うん、好きだよ」

スクライアさんも案外直球だな。

「なら積極的に行かないと。……あんまり未来のことは言えませんが、後悔しますよ」

なのはさんが。

「……そう、だよ。積極的に行かないとダメだよ。ありがとう
シノザキさん！」

「わかってくれたならそれでいいんスよ」

ふっ……いい仕事したぜ。

同志を失うわけだが……仕方ない。ストーカー被害が減るのならそれでいいさ。

「……よし、まずは双眼鏡と盗聴機を買ってこよう！」

「……はい？」

「サーチャーも仕掛けるけど……やっぱり自分の目で見ないと安心できなもんね」

えっ？

えっ？ なに？ なんなの？

「い、一体何を!？」

「えっ？ 何って……『積極的に』なのはを観察して好みを調べるんだよ？ あとは万が一の時に守ってあげたり……」

いやそれストーカー……あれ？

いやいやいや……待てよ。

「あ、記憶消されちゃうんだっけ？ 危ない危ない……メモしておこう。……つと、そうだ。本当に君には感謝してるよ！ ありがとうね！」

まさか……まさかこの人がストーカー化したのって……!？」

『転送始めるよー!』

フローリアン姉の声が聞こえたと思っただら体が光だした。

「えっ!？」

「ああ、時間なんだね。シノザキさん、未来の僕によろしく。きっと仲良くなれるよ、僕たち」

いやちよつと待って!

マジで! 30秒でいいから!

『それじゃ、行きまーす!』

「ちよ、まっ……」

「あれ?」

俺……何してたんだっけ……?

確か……インターミドル開会式の帰りで………カレー作ったよ
うな………カレー?

そんでなんか……なのはさんに謝らないといけないようなことし
た……?

何だろう、思い出せない。

「あれ?」

ふと、時間を見ようとして通信端末を見るとメールが来ていた。

スカさんから?

「何々? 『久しぶりだね。君のアドバイスのお陰で娘と仲直りでき
たよ。それどころか、最近妙に私を気遣ってくれるようになったんだ
よ』……?」

なるほど、そういう扱いになったか……。

ざまあ。

「ん? 『P.S 君に頼まれていた私の極秘研究所のマップを一緒に
送っておいたよ? ……なんだそれ?』」

そんなの頼んだ覚えは……。

「……にやあ。」

「ん？」

いつの間にか足元に猫がいた。

俺の足に顔を擦り付ける。可愛い。

「……ま、いつか」

頭の中をぐるぐるしていたことは全て忘れよう。

きつと気のせいだ。

「よおし、この猫飼おう！」

あのアパート、ペット大丈夫だったよな？

「ただいまー」

「……おかえりなさ………あ、リニスだあー♪ でもなん

でえー？」

猫の名前はリニスに決定した。

五十七話

「……にやおん。」

『まったく……おまえはいつたどこからこういうのをひろってくるんだ』

リニスを見て、白衣を着て赤い伊達眼鏡をかけた（本人曰く研究者スタイルらしい）ぐにゆ子はそう言った。

「ただの猫だろ」

『いや、これは〴〵やみのしよのかけらだ。てきいはみられないからおそつてはこないが……』

〴〵ヤミノシヨノカケラ〴〵？

はて……どこかで聞いたことあるような。

「よく分かんないけどリニスはリニス。それでいいだろ」

『まあ、がいはないだろうし、おまえがいいならいいだろう』

あれ？

案外簡単に折れたな？

『いちいちおまえにつつこんでいたら、わたしのいがもたない』
失敬な。

『そうそう、このねこにはナハトヴァール……あのくろいしよくぶつをたべさせておけばしようめつすることもないはずだ』

「えっ？ 消滅つてなに？」

『ああ、いや……まあ、ふかくかんがえなくていい。ばかにはわからんだろう』

……………コイツ。

『ああっ!? あたまを、あたまをぐりぐりするのはやめてくれえっ！

あやまる！ あやまるからー！』

なら最初から言うな。

つたく……。

「つまり、あの黒い植物はエサにもなるってことか？」

『……はあ……はあ……そ、そのにんしきでかまわない……』
マジか。

すげえなアレ。

『た、ただし、あのねこだけだぞ。ふつうのにんげんやどうぶつはだめだ』

あらら、残念。食費浮くと思ったのに。

しかしそうなることになると気がひつつある。

「リニスのエサがああ黒い植物だとして……毎日食べさせてたらすぐになくなるんじゃないのか？」

『それについてはもんだいない』

ぐにゆ子は眼鏡をくいと上げて答えた。

『しらべてみてわかったことだが、あやしよくぶつはとてつもないさいせりよくをもっている。たとえリニスがあれをたべつくしたとしてもすぐにさいせいする』

何それすごい。

……にやあ。

リニスが足にすり寄ってきた。

頭を撫でてやると気持ち良さそうに目を細める。

『これをおうようすればきつといがくのやくにたつぞ。すばらしいはつてんだ。よもやあの“ナハトヴァール”がせかいをすくうことになるとはな……』

何か語りだしたぞ。

『だがやはりふあんのこる。ナハトヴァールにはそんなのうりよくはなかったはずだ。なぜそんなものが……それをめいかくにしてはならない。それがわたしのしめいで……』

ああ、はいはいソウデスカ。

それはご苦労なことで。頑張ってくださいサイネー。

「おお、リニス^{お前}は可愛いな。変なコト言わないし、しないし」

おお、リニス。我が新たな癒しよ。

もうミウラちゃんなんぞいらぬ。お前さえいてくれれば。

……にやおん♪

「ああ、俺も愛してるよ、リニス！」

「……むうううう！ わたしのなのにー！
……どつちが？」

五十八話

今日は待ちに待ったデコ助の試合の日。
相手はなんとハリーだとか。

「不良生徒は成敗です！」

「ほーお!? 面白エ! やってみろやアホデコメガネ!
まさに一触即発。

「おうともやらいでかつ! あと私はアホでもデコでもありません!
!」

いや、お前はアホでデコでバカだろうが。

《上位選手同士因縁の試合! まもなくゴングですつ!》

アナウンスが入り、両者ともに立ち位置につく。
試合が始まるようだ。

「アレステイングネット展開ツ! 捕獲開始イツ!

開始早々にデコ助のバインド魔法の一種か、無数の手錠がハリーを襲う。

手錠つて……趣味が悪いぜ、デコ助……。

「ハッ! 案外ハデだがこんな鎖くわるとき……!」

「甘いですよ、ハリー選手!」

何かしようとしたハリーの後ろからさらにバインド手錠が出現、ハリーを拘束した。

「ホールドファイニーツシュツ!

「う……ぎぎぎ!」

完全に拘束され、身動きが取れなくなったハリー。

「ああ!? 頑張れハリー!」

「ちよつと!? あなた私のセコンドでしょう!?!」

ええ……応援するって約束したし。
それに……

「……はりーちゃんがんばれ〜！」

《ハリー選手負けないで!》

『まけるな、とらいべつか! おまえならかてるぞ!』

うちのヤツらみんなハリー応援してるしなあ。

ちなみにリニスはお留守番です。

「ああ、鎖を引きちぎろうとしても無駄ですよ? パニツシャーはむしろ金属環リングの方に拘束効果があるんです」

くっ……逃れる術はないってか……!

「汚いぞ、デコ助えっ!」

「だからあなたはこっちの味方でしょう!」

「くっ……大丈夫だぜ、チヒロ! だったら……!」

ハリーが自身の拘束されている右手の周囲に魔力弾を形成する。

そして……

「うぐっ……こ、こうすりゃいいんだ。簡単だぜ?」

腕ごと拘束していたバインドを撃ち、破壊して見せた。

うわあ……すげー痛そう。

《強度の打撲に熱傷……というところでしょうか?》

解説ありがとう謎の声。

『痛そう』じゃなくて痛いな、間違いなく。

「てめーをブチのめすにや片手が使いりや十分だツ!」

やだ、あの人かっこいい。

イケメンハリーは負傷した右手に魔力を溜め、そして。

「うおらああああっ! ガンフレイムツ!」

気合一閃。

雄叫びと共にハリーは砲撃を放つ。

「あーっ！」

それをまともに受けたデコ助は、何だか掘られたような声をあげ吹き飛ばされる。

「ちっ。まだベストじゃねーな。威力がイマイチだ」

マジか。俺、ハリーとは喧嘩しないようにしよう。

怒らせずにうまく扱う。

《エルス選手、リングアウト!》

おっと、忘れてた。

カウントが始まったのを聞いて、四つん這いになっているデコ助に駆け寄る。

「ねえタオル投げる？ タオル投げるの？」

「投げませんよ！ まだ試合は始まったばかりです！」

「残念だったな、デコメガネ。この一年で強くなったのはおめーだけじゃねーんだよ」

未だに立ち上がらないデコ助に近寄ってきて、ハリーはそう言った。

「とつとと上がってこいよ。まだー」

「あ、ハリー。晩御飯ぶりの照り焼き食べたい」

「ー」わかった。なら帰りにぶりだけ買っといてくれ。……………まだ終わりじゃねえんだろ、デコメガネ？」

「何かもう色々台無しですよ……………」

五十九話

その後、デコ助はリングへと戻り激戦を繰り広げた。

射撃や砲撃で押しまくるハリーに対し、守備に回りながらも要所でダメージとクラッシュを狙うデコ助。

「この……しぶてーじゃねーか、デコメガネ……」

「まだまだ……余裕です……ッ！」

試合はすでに第三ラウンド。

《……体に蓄積しているダメージはエルス選手が多いようですね》

謎の声は……もう解説者になればいいんじゃない？

俺にはよくわからないよ……。

『とらいべつかのみぎうではすでにふうさつされているが、ひだりうだけでもなかなかのはかいりよくだから……。あのめがねのむすめがかつには、ひだりうでをふうじるしかないだろう』

お前もか……。

と、その時、デコ助が動いた。

「いいかげんに……落ちやがれエーッ！」

だがそれは、ハリーの左腕により放たれた魔法によりカウンターを受けてしまう。

完全に入ったろ、アレ。決まったか……？

《いえ、まだです！》

「パニツシャーッ！」

謎の声の言葉とほぼ同じタイミングでデコ助が再び手錠の魔法を繰り出し、ハリーを拘束した。

「おぉー！」

《ハリー選手の勝利への確信、その隙を上手くつきましたね。ですが……》

これはもしや？

と、思った直後にハリーは自らを拘束する手錠……そのチェーン部分を引っ張る。

「んんぎいーッ！」

「えええっ!? うそおーッ!?」

当然、ハリーの方へとデコ助は引き寄せられる。

「ハデな砲撃でブチのめしてーが残念ながら弾切れだ! つうわけで……」

デコ助は無防備なままハリーの前へと飛んでいき、そして……。

「オレ式一撃必倒パンチ……!」

「……あんなセンスの欠片もない技にやられたデコ助には少し同情するわ」

こうして、デコ助の敗北が決定した。

「試合前にあんなだけハリー挑発したくせに負けてやんの。だっせー!」

「うぐっ……!」

「ま、まあまあ……いいんちよも頑張ったんやから……」

現在、試合会場のエントランスにてたまたま観戦に来ていたジークと遭遇したところだ。

「お前なあ、あんなまそうエロゲ主人公みたいな甘いこと言ってると……」

「……チャンピオン! お願いがあります!」

「……ほら、面倒くさいことになった」

バカかコイツ?

ああ、バカか。

「私を……私をセコンドにしてください!」

「え……ええっ!?!」

土下座をするデコ助。

そこまでやるか。

「ち、チヒロお！」

「知らん。自分で巻いた種だろ」

「チャンピオン！」

さ、オレはぶりを買いにいかないとな！

「じゃーな、ジーク」

「えっ……ええええええっ!？」

「お願いします！ チャンピオン！」

ぶりの照り焼き楽しみだぜー♪

六十話

「なあ」

「ふも？」

とある朝のこと。

いつも通りハリーお手製の朝食を食べていたとき、ハリーが話し掛けてきた。

「お前さ、ジークといつ知り合っただよ？」

ジークと？

「なんでまた」

「……いや……気になってな」

ふむ……。

「確かあれは……一年前の夏だったか。うだるような猛暑日のことだ」

……ん？

猛暑日？

「あれ……夏にしては涼しかった日だっけ？ いや、台風の日……ではないか。あれ？ くもりの日だっけ？」

「いやオレに聞かれても……。ていうか、それはいいから経緯を話せよ」

……あの時は……そうだ。

暇だったからどこに行くわけでもなくふらふらと散歩してたんだっけ。

「あああ……暇だなあ……」

こうして家から出てきたのはいいもの……することないなあ。

「あつついし……」

快晴だよ。

本当になんで外に出てきたんだろう……。

————ぐにゅつ。

「……ん？」

何か踏んだ。

「……ん〜？」

全身真っ黒い、人ひとり分ほどの大きさの何か。

俺の右足が踏んでいる部分————頭から生える二本の触角のよ
うなもの。

これは————！

「いやあああああああでつかいゴキブリ踏んだあああああああ
あああツツツ!!」

「う……ううん………お腹空いた………ゴハン………」

「キエエエエエアアアアアシャアベツタアアアアアアアアアア!!!」

「あむっ………はむっ………！」

あの後、ゴキブリは俺の足にしがみついて『ゴハン………ゴハン、
ください………』と離れなかった。

人の目もあり、とりあえず抱えて自宅へと帰ってきた。

「あぐあぐ………おいしいい………！」

冷蔵庫にあったもので適当に料理し、恐る恐る差し出すとゴキブリは貪るようにそれを食べ始めた。今ここ。

「……最近のゴキブリは食器も使えるのか」

こ^人う^型いうゴキブリって月だか火星だかにいるんじゃないの？

なに？ ミッド侵略に来たの？

「んぐつ……ぷへあ………生き返ったあ………！」

人型ゴキブリが飯を食べ終えたようだ。

「おーきになあ。ほんまに助かったよ」

「えつ、あつ、いや……うん」

やっべえ……俺……今、異種族と交流してるよ………！

言葉通じるんだ。すげえ。

「えつと……ゴ………あなたのお名前は？」

「あ、そーやった！ 自己紹介がまだやったね！」

オホン、とわざとらしく咳払いをして人型ゴキブリは姿勢を正した。

「私^{ウチ}はジークリンデ・エレミア。『ジーク』でええよ？」

ー……これが、俺の人生最大にして最高の友人^{おもちゃ}との出会いの瞬間だった。

……あ、いや、友ゴキか。

六十一話

さて。

俺は今、ダールグリユン邸……ヴィクターの部屋に来ている。
なぜかと言うと……。

「ふえええええええん………チヒロおお………っ！」

「あーはいはいキャラ崩れるから泣き止めよ」

これである。

「だって……だってジークがっ………私のこと『もう知らん』ってえ
……！」

「いや自業自得だろ」

まあ、つまりはインターミドル開会式のこと。

俺の葬式^{ドック}がバレてジークに絶交されたのだ。

「ふええええん………！」

「やれやれ……」

ベッドに座る俺の腰に抱き付きワンワン泣くヴィクター。

「でも……確かにかなり怒ってたからなあ。お前、何て言い訳したんだ？」

「ぐすっ………言い訳なんてしませんわ………私は腐っても
誇り高き雷帝の血を引く者、全てを正直に話しましたわ。………」

まあ、私は腐ってなどいませんけど」

お前最後のそれ本気で言ってる？

………まあいいや。

「じゃあ言い方が悪かったんじゃないの？ 何て言って説明したんだ？」

「確か……」

ヴィクターは目元の涙を指で拭って、

「『ジャンジャジャ〜ン!! 今明かされる衝撃の真実ウ。』

いやあ本当に苦勞しましたわ、チヒロの死を悲しむ友人演じて湧き上がる笑いを堪えることまでしてさあ。しかし貴女は単純ですわねエ、私の口から出たでまかせを、全部信じてしまうんですからねエ！ 楽しかったですわア、貴女へのドッキリはア〜!!』って言おうとしたら『ジャン』の部分でぶん殴られましたわ……」

「いやむしろその段階で殴られて良かったと思うぞ」

それ言い切ってたなら絶対にガイストされてたはずだ。

俺なら間違いなくコイツん家に火炎瓶とか投げ込むと思う。

「……つかさ、俺を共犯者として売って怒りを分散させりや良かったじゃん。なんでやらなかったんだよ？」

「……だって……チヒロは大切なお友達ですもの……」

……えっ。

「大好きな貴方を……売ってまで助かりたいとは思いませんわ……ぐすっ……」

……べっ、別に罪悪感とか湧いてねエし。

湧いてないけど……。

「ま、まあ？ 仲直りを取り持つぐらいならしてやってもかまわないっ〜」

「えっ……ほ、ほんとうですの……っ!？」

ヴィクターはパツと顔をあげて、涙で濡れたその瞳を俺に向ける。それを指で優しく拭ってやる。

「おうよー！ このチヒロさんに任せておきなさい」

「あっ……あああ……！ チヒロっ、大好き！ 愛してますわっ！」

ふっ、そうと決まれば善は急げ。

「じゃあ俺今からジークンとこ行ってくるわ！」

「くれぐれもっ……くれぐれもよろしくお願いしますわ……！」

「任せとけっ！」

こうして俺はダールグリユン邸から出ていった。

六十二話

ジークとヴィクターの仲直りから数日後。

今日はヴィクターの試合を観戦しに来ていたのだが……そこで面白いヤツを見付けた。

「いいねえ……」

それはヴィクターの対戦相手で名前は……名前は……えつと。

《シヤンテ・アピニオン選手ですよ》

そうそう。さんくす、謎の声。

つい先ほどヴィクターの勝利という形で決着がついた。

中々にいい試合だったぜ……！

「ヴィクター遊んでたけどな」

《えっ？ 苦戦してませんでしたか、あの方》

「いや、完全に小バカにして遊んでた」

苦戦しているように見せかけて、後々一撃で叩き潰して愉悦に浸る。

その為だけにあんなくっさい演技してたんだよ。

俺は見逃さなかったぞ、アピニオンちゃんを叩きつけたときのあの笑みを。

《そうなんですか……あの、ところで》

「ん？ なんだ？」

《私たちはどこに向かっているんですか？》

それは………。

「というわけで、やって来ましたアピニオンちゃんのいるお部屋！
……の前」

《……まさかとは思いましたが》

いやいやいや、あんな面白いヤツはお近づきにならなくっちゃ。

「友達増えるのはいいことだろ？」

《……まあ、そうですね……本当に“トモダチ”ですかね、ソレ》
ちやんと友達おもちゃに決まってるんだろ。

よおし……突——

「こんにちは」

——撃しようとしたら、後ろから声をかけられた。

なんだよ……いいところで。

「あーはいはい、こんに、ち……？」

振り向いた先にいたのはシスターの格好をした金髪の女性。

思わずドキツとしてしまうほど美人だ。胸も大きいし。

だが、俺が目を引かれたのは容姿でもなければ胸でもない。

それは……

「……………あの……………デコに米つぶ着いてますよ……………」

それもカペカペの。

えっ、何？ どうやったならそんなところに着くの？

「ふふっ、知ってますよっ。」

「……………はい？」

「知ってて着けてるんです」

……………どうしよう。

なんかおかしい人に捕まったみたい。

「はじめまして、ですよね？ 私はカリム・グラシアと申します」

これは……自己紹介しなくちゃいけないカンジ？

こういう人とはあんまり関わりたくないんだけど……。

「あー……つと、俺は……」

「篠崎チヒロさんですよね？」

変人がすでに俺を知っている件。

「……………な、何で」

「妹さんにお世話になっっているんです。よくあなたのお話を聞いていますよ。お姿は写真などで何度か」

「うちの妹の知り合いですか?」

「ええ、まあ。そんなところですよ」

うちの妹が変人の友人だった件。

お兄ちゃん悲しい。

「あー、グラシアさんは」

「どうぞ “カリム” とお呼びください」

「……カリムさんは」

「“カリム” と。呼び捨てで」

できるか!

「カリム……さん……はなぜここに?」

「この中にいる選手は私の職場の者なんですよ」

……それって。

「シャンテ・アピニオンちゃん……?」

「はい、そうです。チヒロ様はなぜここに?」

……………チヒロ、 “様” ……?

「えっと、アピニオンちゃ……選手に会いに。あの、チヒロ “様” って……」

「あら、シャンテのお知り合いなのですか?」

「えっ、あ、いや違います! さっきの試合を見て、 “面白いヤツだなあ、話してみたいなあ” って思っ……それより、あの」

「まあ、それは素敵です! ぜひ!」

コイツまったく聞いてねえ……!

「シャンテにお友達ができるのね! しかもそれがチヒロ様だなんて……素敵! そうと決まれば早速参りましょう!」

「えっ、ちよっ、待っ……!?!」

カリムさんは俺の手を強引に引いて、部屋の扉を開けた。

六十三話

「騎士カリムっ!」

「なんでっ?」

部屋に入って聞いた第一声。……声は二つだけど。部屋の中にいたのはアピニオンちゃんと水色の髪のシスターの二人だった。

「ていうか……騎士?」

「はい。あなたとあなたの家族を命を懸けて守る騎士です」

うわー……やっぱヤバイ人だよ、この人。

金髪にまともなヤツはいないのか……ただしヴィヴィオちゃんは除く。

《わ、私はまともですよっ!》

存在自体がまともじゃねえよ、お前は。謎の声

ていうか金髪なのかよ。

「ん? 騎士カリム、その子は?」

アピニオンちゃんに付き添っていた水色の髪のシスターが言った。

「この方は篠崎チヒロ様。我ら聖王教会がその全てを睹して守るべきお方です」

「は、はいっ……!」

「……………篠崎、チヒロ……? ……あれ……?」

何言ってるのこの人。

カリムさんの言葉に固まる水色シスター。アピニオンちゃんは……何か俺の方見て固まってる。

「ああ、あと彼のご家族もです」

「待ってください、騎士カリム! 意味がよく……!」

大丈夫だ、水色シスター。

俺にもまったくわからん。

「アイツ……間違いない、あの時の……!」

「ん? 何か言ったかー、シヤンテ?」

……やっぱリアピニオンちゃんは俺のことを見ている。

なんだよ？

「いいですか、セイン。我々は彼の一族を崇め奉るべきです。勿論、聖王様のこともありますが……」

「アンタ『聖王』教会だろうが。ウチじゃなくて聖王サマ敬えよ」
《うくん……ある意味、あなたを敬うことはそれと同義になるかもしれないませぬ》

意味わからんわ。

どういうことだよ。

「あ、あー……チヒロって言ったっけ？」

「えっ、あ、はい。そうっす」

ワケわかんないことをのたまうカリムさん。

俺を見続ける……というかもはや睨むような領域にまでいつてるアピニオンちゃん。

そんなカオスな状況を打破すべくか、水色シスターが話かけてきた。

「私はセイン。だいたい想像つくと思うけど、聖王教会のシスターだよ」

「あ、どうも。……変な髪の色ですね」

「……そ、そういうの、本人の前で言っちゃうかなあ……普通」

最近やったゲームで水色の髪のキャラに『不自然な髪の色』って言ってるキャラがいたから、なんか影響されて俺もそんな風を感じるようになったっちゃって……園原コラア。

「で、チヒロはいつたいなんでここに？」

「あー……さっきアピニオンちゃ……彼女の試合を見まして。ちよつと喋ってみたいなあと思って来ました」

そう言いながらアピニオンちゃんを指差す。

……嘘は言っていないぞ。

「あ、あたし……っ!？」

何で赤くなってるの？

「実は対戦相手のヤツと知り合いで」

「え？ あのお嬢様？」

アピニオンちゃんに近付く。

「お前、面白いヤツだなあ！ 負けたけど、中々いい試合だったぜ！」

「おお！ よかったな、シャンテ！」

「あ……………うう……………っ！」

さらに赤くなるアピニオンちゃん。

「……………なあ、チヒロ」

セインさんが小声で話かけてきた。

「ん？ 何すか、セインさん」

「実はこいつさ、さっきまで拗ねてたんだよ。このまま一緒に褒めちぎって機嫌直してくれない？」

……………まあ、オモチャを手に入れるお友達になるには必要なことか。

「オツケーです。任せてくださいよ」

「恩に着るよっ！」

……………このあと、恥ずかしさで逃げ出すまでセインさんと二人でアピニオンちゃんを褒めちぎってやった。

「ええ、初めてあの方に出会ったときですか？ 私の部屋の窓際に静

かに立っていたんですよ。心の中心にしのびこんでくるような氷つく眼ざし、黄金色の頭髮、すきとおるような白いハダ、子供とは思えないような妖しい色気……………」

「まだやってたのかよ、アンタ」

六十四話

アピニオンちゃんで遊んだあと、とあるアナウンスが流れた。
なんでもヴィヴィオちゃんが試合のアクシデントで医務室に運ばれたとか。

「どこか？」

先ほどスタッフに聞いた部屋の前に到着。

……とりあえずノックしてみよう。

『はい！』

ノックしてすぐに返事があった。

「失礼します……」

「ああ、チヒロくん」

中にいたのはなのはさんだった。

ベッドではヴィヴィオちゃんが眠っている。

「ヴィヴィオちゃん、大丈夫なんですか？」

「うん。軽い脳震盪のうしんとうと体力と魔力の消耗による一時的な昏睡だつて」

……それは本当に大丈夫なのか？

「うん、知り合いの医者に診てもらったから」

ヤブ医者じゃねえのか、そいつ。

「ま、まあなんにせよ、無事なら良かったです」

「うん。ありがとう」

しばらくするとヴィヴィオちゃんが目を覚ました。

「ヴィヴィオ……起きた？」

「ヴィヴィオちゃんおはよー」

「ママ……クリス……？ それに先輩まで……」

ヴィヴィオちゃんはゆっくり周りを見回す。

「そっか……わたし負けたんだ」

ヴィヴィオちゃんはかなり落ち込んでいるようだ。
負けちゃったのか……頭を撫でておこう。

「あ……えへへ」

微笑んでくれるも、その顔にはやはり落ち込みの色が見られる。

誰だ、俺の可愛いヴィヴィオちゃん天使を負かしたヤツあ。

「わたし……いい試合できてた？」

「うん。会場も盛り上がったよ。格好よかった」

「そっか……」

……俺、見逃しちやっただよなあ。

「そういえばヴィヴィオちゃんの対戦相手って……」

「ああ、それは……」

……コンコン。

ヴィヴィオちゃんが対戦相手について話そうとした瞬間、扉がノックされた。

入ってきたのは……

「ぐすつ………すいません、なのはさん………ボクのせいでヴィヴィオさんが……」

「ヴィヴィオちゃんいじめたのは貴様かアアアアアアアアツ!!!」

「えっ、ええええっ!? せ、先生っ!?!」

ミウラちゃんに襲い掛かろうとした直後、なのはさんとヴィータさんに止められた。

ヴィータさんはミウラちゃんのセコンドらしく、ヴィヴィオちゃんの安否確認の付き添いに来ていたらしい。

「な、なんでヴィータちゃんはチヒロくんの膝の上に座ってるの?」

「コイツはあたしかミウラを抱えてりや大人しくなるからな」

「……ごめん、全然わかんない」

今はリニスがいるからミウラちゃんはいらないし。

ヴィータさんは……賛否が別れますな。

「で、ヴィヴィオの様子は？ ……って、聞くまでもないか」

いまだにぐずるミウラちゃんをヴィヴィオちゃんがあやしている。

……ミウラちゃんのが年上だよな？

「あつ、そうだ……ミウラさん！ わたし、リオの試合を見に行かないかなんてです！」

「あ……えと……？」

「一緒に見に行ってもらえませんか？」

そして気遣いもできる！

「あ……先輩も一緒にどうですか？」

俺の存在も忘れてない！

「行くー！」

「おう。行ってこい」

「しばらく見ないうちにヴィータちゃんはいったいどこのポジションに着いたの……？」

「ところで『リオ』って誰？」

ヴィヴィオちゃんといいでミウラちゃんを支えながら試合会場へと向かう廊下を歩いている。

「えっ!? り、リオですよ！ リオ・ウエズリー」

「……んん？ ミウラちゃん知ってる？」

「ぼ、ボクは知ってますよ……？」

まあいいや。

「で？ 対戦相手は？」

「あ、えつと……『砲撃番長』バスターヘッドのハリー選手です！」

「えっ？ ハリーなの？」

「せ、先生の知り合いなんですか？」

「あー……まあな」

マジかあ。

「じゃあ……ヴィヴィオちゃんには悪いけど、ハリーが勝つな」

「……それはまだ分からないですよ！ リオだつて強いんですから！」

うーん……ヴィヴィオちゃんのチームメイトを想う気持ちはわかるけど……。

……しかし、現実やはり非情。ハリーの勝利で幕を閉じた。

六十五話

「よつ、ハリー。お疲れ!」

「ん? おお、チヒロ」

ハリーVSリオちゃん(?)の試合が終わったあとヴィヴィオちゃんたちと別れた俺はハリー(とその取り巻き)に合流。

「試合見に来てくれたのか?」

「ああ、ちゃんと見てたぜ! お前が小学生ボコってたところ」

「……ま、間違っちゃいねーけどさ……その言い方はやめてくれよ」

ん? 何が?

「はあ……いや、いいよ。今日は疲れたからツツコむ気力もねー……」

「何々? お疲れ?」

「ああ……あのちびすけかなり手強かったからなあ……」

そうなのか……。

「あー……帰ってさっさと寝よう……」

いつもの元気がない。

相当疲れてるんだなあ、ハリー。

「そっか……じゃあファミレス行こうぜ!」

「お前、俺の話ちゃんと聞いてた?」

「はあ……暇だ」

ハリーとファミレスへ行き(取り巻きーズは帰った)飯を食った後、ハリーは眠い行ってアパートに帰ってしまった。

「多分、ヴィヴィオちゃんたちも疲れて寝てるだろうし……」

というか夜だし。

普通に小学生とは遊べる時間じゃないし。

「ん?」

あら、通信だ。

誰からだ？ ……………ジーク？

「よう。どした？」

『あつ……チヒロ？ 今なにしとるん？』

「暇してるん？」

『そうなんや。あんな、良かったら……………』

「あ、チヒロ！ いらっしやい〜」

「ん、邪魔するぜ。むしろしまくるぜ」

「あはは、チヒロならええよ！」

通信でジークにテント住み家に來ないかと言われ、のこのこやって來ました、ワタクシ。

「あ、お茶のむ？」

「お構え」

「……飲むってことやね？」

「しっかし相変わらず狭いな、ここ。」

「まあテントだから仕方ないけどさ。」

「はい、どうぞ」

「……………おいコレ何て茶葉だ？」

「出されたお茶は色が薄く、香りも青臭い。」

「知らへん。その辺に生えてる葉っぱやし」

「オーケー、とりあえず歓迎されてないってのはわかった……………戦争だコラ」

「こいつ……調子に乗っているんじゃないか？」

「ここらでそろそろ人間様とゴキブリどっちが上かハッキリさせようぜ。」

「……チヒロ、ちょっと私の話聞いてもらっていい？」

「……何？ 真剣な話？」

「……………うん」

そっか……この振り上げて『ガオー』なポーズしてる両手どうしよう。

元〇玉でも生成するか？

「オラに元気を………つて、ジークよ。台詞の途中で抱きついてくるなよ」

「ん……」

何なのコイツ？

なんかいつになく汐らしいというか……やり辛いことこのうえない。

「明日、私試合なんよ」

「そうなのか」

知らなかった。

「……ほんでな、対戦相手がちよつと」

「対戦相手？ 嫌いなやつとか？」

むしろチャンスじゃね？

公衆の面前で叩きのめせるんだから。

「ちやうよ。なんて言うか、昔………本当に大昔に色々あったんよ」

「……んーと、あれか。ご先祖様がどうのつてやつ？」

「まあ、そんなとこや」

コイツにはご先祖様の記憶があるんだとか。

それ関係のこととなると……わからん。てか興味がない。

「対戦相手の娘と私は似とる。記憶に縛られて、迷ってる。だからあの娘は試合に勝っても笑わない」

「……で？ 結局何なんだよ？ それを再認識させられるのが嫌なのか？」

「いや、ちよつとちがくて……」

じゃあ何だよ。

ぐだぐだと面倒臭いなあ。

「きつとあの娘は、少なくとも今のままじゃ私には勝てへん。それであの娘のなにかを壊してしまうのが怖いんや」

……はあ？

「例えば自信。例えば誇り。もちろん、他の選手にだってそれはあるはずや。だけど……先祖の記憶が、数百年の歴史があるそれとは重みが違う」

ジークは俺の胸に顔を埋める。

「できれば救ってあげたい。同じ記憶に縛られる者として、その苦しみはよう分かる。でも、私ウチにできるのは『壊す』ことだけや」

ユーリと同じような台詞だな。

……………ん？ ユーリって誰だ？

「私ウチは……どうすればいいんやろか。どうしてあげればいいんやろか」

六十六話

「おい、準備できたか？」

「はわっ!? ち、ちよつと待って!」

ジークの悩みを聞いた翌朝。

ぐーすか寝続けるジークを叩き起こし、今はインターミドル会場へ向かう準備をしている。

「つと、そうだ。ジーク、風邪とか引いてないよな?」

「えっ、うん。体調は万全やけど……」

「そうか、よかった。」

「いやあ、昨日お前が寝た後なんだけどき。付き合ってもいない男といちおう女と一緒に寝るのはちよつとマズいと思つてな」

「……だから私外ウチで寝てたんや」

「そうそう。」

「お前だけテントの外に出しといたんだ。俺なりの気遣いつてヤツさ!」

「ああそれはドーモおーきになー………ツ!」

「なんか投げやりじゃね?」

「もつと感謝してくれていいんだよ?」

「何考えとんの!? 私ウチだつて女の子やで!」

「うっせー! テメーらみてーにインターミドルだとかストライクなんちやらだとか汗臭い青春送つてるバイオレンスの塊なんか『女の子』じゃあ断じてねーツ!」

「な、何やてツ!」

「お前こそ何なんだよ!」

「もつと甘酸っぱい青春はねーのかよ! サブタイは『次世代型脳筋少女育成中』かよ!」

「ならインターミドル終わったら二人でどこかに出かけようや! 私ウチ

やってしつかり『女の子』だつてこと教えたるわッ!」

「上等だゴキブリッ! テメーその約束忘れんなよツ!」

「ゴキツ……!?! チヒロこそ忘れないでやッ!」

忘れてたまるか！

お前らバイオレンスどもを“女の子”とは認めない絶対に！
ただしヴィヴィオちゃんを除くツ！

「……ん？ あれ？」

「何だよ、怖じ気づいたか？」

「こ、これって……まさか、デート!? デートなんか!？」

何か真っ赤になった。

しかも小声で何か喚いてる。

「ひっ……ひゃあああああッ!? 勢いでデートの約束してもうたあ
……!」

「……何？ あんだって？」

「にやつ……なんでもにゃい……!」

猫になつてるぞ、ゴキちゃんや。

「……まあ、いい。この件は出かけるときに白黒させようぜ。それよ
り行くぞ、遅刻する」

「う、うん……あ……ち、チヒロ!」

あんだよ？

「そのう……か、会場まで……手、繋いでええ……?」
……昨日の不安がまだ残ってるのか？

仕方なねえな。ま、でも……友ゴキだしな。

「……ん、ほれ」

「あ……! えへへ……お、おーきにっ!」

「さて、イチヤイチヤするのはその辺りでやめて貰っていいかしら？」

「ひっ!？」

「ん？ おお、ヴィクター!」

いつの間に。

「ジークを迎えに来たのですが……なるほど、察しましたわ」
何をだよ。

「いつまでも振り向いてくれないチヒロにジークの欲望が爆発、つい

拉致ってしまった……と。ファイナルアンサーですわ」

「正解デスワ」

「正解やないよ!？」

ジーク……ノリが悪いデスワ。

「で、迎えに来たんだよな？ ならお言葉に甘えて……」

「あら？ あなたは走ってきなさい」

「……俺、泣いちゃうよ?」

「エドガー。写真と動画の準備を。あらゆる角度からの撮影を頼みますわ。ああ、あと白米をどんぶりですわ。おかわりの準備もしておきなさい」

「貴様は殺すツ！ 絶対にツ！」

何て言うか……この感じ久しぶりだな。

「ぷっ……あははっ！ なんや、久しぶりな感じや。私とチヒロと
ヴィクター、三人でこんなバカするの」

お前もそう思うか、ジークよ。

だがな？

「バカはお前だ。お前だけだ」

「馬鹿はジークですわ。ジークだけ」

「な………ッ!？」

このあと再びキレたジークに襲われ、ヴィクターと二人で迎撃に入った。

……ジークは終始笑顔を浮かべ、昨日の暗い表情はまるで嘘のようだった。……よかった。

「あの……皆さま、遅れますよ?」

「黙りなさい、エドガー駄犬」

「黙れ、エドガー駄犬」

「ちよお静かにしとつて、
駄犬^{エドガ}」

「……くすん」

六十七話

「……どうも様子がおかしい。

ジークの試合を見ていて、俺はそう思った。

様子がおかしいのはジークじゃなく、その対戦相手だ。

「まさかストラトスちゃんだったとはな……」

俺の視線の先ではストラトスちゃんが怒りに任せるようにジークに攻撃している。いいぞ、もっとやれ。

……じゃなくて、ジークが腕に防護武装を装着したあたりからストラトスちゃんの様子はおかしくなっていた。

「何やらかしたんだよ、ジーク」

《いえ、彼女は何もしていませんよ》

謎の声が話しかけてくる。

何か知ってるのか？

《ええ。……まさか二人の子孫が戦うことになるとは。運命とは皮肉ですね》

……こいつ、前々から思ってたけど何者なんだよ？

「チヒロ？　どうかしましたの？」

「あ？　あ、ヴィクターか……何でもねえ」

危ない危ない。

少し小声で話そうか。

「……で、何知ってるんだ？」

《彼女たちのご先祖さま……ですかね》

「ご先祖さま？」

ああ、そういうやジークは……ストラトスちゃんもなのか。

どんな奴なんだ……？

《簡単に言う……ド変態ストーカー野郎とガチレス男女ですね》

「まさかお前からそんな罵倒浴びさせられる奴がいるとは思わなかった」

ビックリだわ。

《まさか子孫にまでその業を背負わせるなんて……》

それは違うと思うけど……。

「けど、背負わせるつてことはストラトスちゃんの先祖が「ストーリーカー野郎」か。でもジークは？ あいつ別に百合じゃ……」

《ヴィヴィオちゃん……でしたっけ？ 彼女に会わせればわかりますよ》

……なんか会わせたくないんだけど、そう言われると。

ヴィヴィオちゃんには普通の環境で育ってほしい。

《誰目線なんですか、それ》

………パパ？

《……あなたがち間違いではない………んですかね？》

どゆこと？

まあ、いいや。

「それより……そのストーリーカー野郎と百合女からどんな被害を受けたんだよ」

《百合ではなくガチレズです。間違えないでください》

ああ、そうかい。

早く話せよ。

《そうですね………ではまずはストーリーカー被害の方から。日常を常に監視ストーリーキングされているのは当たり前、食事・入浴・トイレにいたるまで完璧に把握され……一度ぶちギレてボコボコにしなら今度はそつちに目覚めてしまい催促してくるようになって……》

うわあ………。

《ガチレズの方は毎晩全裸でベッドに潜り込んできたり、水浴びを共にすることを強要してきたり、下着も何枚盗まれたことか………》

「苦労したんだなあ………お前も」

俺より辛い目に合ってる奴二人目だよ………。

お前も仲間だ。

「よし！ 二人………いや、なのはさんも含めて三人でキチ○イどもに復讐しよう！ ヒガイシヤーズ、アツセンブローー」

『チャンピオン、勝ーッツ利!』

……は?

『終わってみれば磐石の勝利! しかしアインハルト選手もルーキーとは思えない……………』

……………え? え!?

「はあ!? えっ、試合終わっ……………!?!」

「チヒロ?」

「ゲフンゲフン……………いやあ、いい戦いだっただな。さすがゴキブリンデ・エレミア、さすがチャンピオン!」

「は、はあ……………?」

見てたし。ちゃんと試合見てたし。

見てたから満面の笑み浮かべてこっち見んなよジークっ!

《いつからあの二人はおかしくなってしまったのか……。出会った頃はまだまだもだったのに》

お前もいつまで続けてんだ!

……………うん、とりあえず……………。

「ごめん、ジーク。まじごめん」

六十八話

「はあー……終わった終わった。帰ろうぜ」

《エレミアの継承者を待たなくていいんですか?》

あ?

いいんだよ、どうせ取材会見とかだろ。待ってやる義理なんざないね。

「……見つけましたわッ!」

その時、よく聞き慣れた声が聞こえた。

振り向いた先にいたのは……ヴィクターにデコ助、ハリー?

「どうしたんだよ、そんな……」

「アレスティングネットッ!」

「はアッ!」

デコ助のバインド魔法!?

なんで!? 貴様謀反か!?

「今だッ! 捕まえろおおおッ!」

「はっ……はあああああああッ!」

「てな感じで拉致られてきたんだよ……」

「あ、あはは……その……お疲れさまやね……」

お疲れさまじゃねえよ。

「まったく……」

ヴィクターとハリー、裏切り者^{デコ助}に拉致られてたどり着いた場所にはジークやヴィヴィオちゃん、ミウラちゃんやストラトスちゃんたちを始めたとする見知った顔が揃っていた。

……数人知らないヤツもいるけど。

室内には様々な料理があり、そこでみんなは談笑しているようだ。「……で、ここどこなんだ？」

「あ、えっと……私^{ウチ}ら管理局の八神司令って人からお話があるって言われて連れてこられたんや。だから詳しくは知らへんけど……なんや凄く高級そうなところやね」

確かに。

どこぞの高層ビルの最上階なのだろう、窓から見える夜景は凄く綺麗だ。

「それで……今は何の時間なんだ？」

全員に大事な話があるんだろ？

みんな食い物片手に自由にくつちやべってるけど……。

「……………団欒の時間？」

「まんまか」

まあいいか。

じゃあ俺もなんか食おう。

「よし、そうと決まれば……ジーク、なんか取ってこい」

「ん、わかった」

コイツはうちに入り浸っていたこともあり、俺の好みを熟知している。

かつ、ハリーとは違い栄養がどうか言って嫌いな食べ物をおわせようとはしない。

……あれ？ ハリーじゃなくてこいつにメシ作ってもらえばいいじゃね？

「ふむ……。なあ、ジーク……うちで家政婦やらない？」

「えっ!？」

あ、ダメだ。こいつ家事できねえんだ。

そもそも衛生的にダメだった。

「いや、やっぱり何でもない」

「なっ、なんで!? 私^{ウチ}が家事できないから!？」

ジークがしつこく食い下がってくる。

「あ? あー……ま、そんなところ。それより早くメシ」

「ぐっ……い、いや！ まだチャンスはあるはずや……！」

なんかぶつぶつ言いながらジークは食料調達に行った。

「……よく考えたらジークを家政婦になんてありえないよな」

それにハリーのメシうまいからなあ……うん、やっぱりジークはいらないや。

「……よう、チヒロ。一人か？」

ジークにメシを取りに行かせるという名目で厄介払いをし、さつき自分で調達してきたメシに舌鼓を売っているとハリーが話しかけてきた。

「よう、誘拐犯」

「あ……や、やっぱり怒ってんのか……？ 悪かったよ……」

「……いや、もういいよ。お前の有用性を理解したから」

「……ん？ ま、まあ……許してくれるんならいいか」

その代わり利用価値のなくなるまで寄生してやるけどな。

「んで、どうしたんだよ？」

「何がだ？」

「用件だよ。何で俺のどこ来たんだ？」

取り巻きや他のヤツらを放置してまで……いったいどんなことだ？

「な、なんだよ……用もなく来ちゃダメなのか……？」

「いや別にダメってこたあねーけど」

「……気になったただけだ。ずっとジークばつかと話しやがって……」

あつそ。

それよりメシだメシ！ もつとメシ！

「……さて、みんなく！ 食べながらでええからちよう聞いてな」

さらにメシを食おうとしたところで女の人……確か、八神司令？
とか何とかがここにいる全員に呼び掛けた。
……ここに集められた本題に入るってことか。

「ところで八神司令あの人どつかで……………？」

「何やろ、ヴィクトーリアが後から連れてきたあの男の子……………どこかで……………？」

六十九話

みんなの注目を浴び、はやてさんは語りだした。

「みんなも知ってたのとおり、今日の試合を戦った二人には少し複雑な因縁がある」

何それ知らない……あ、いや、謎の声が言ってたヤツか。

『黒のエレミア』の継承者ジークリンデと『霸王イングヴァルド』の末裔アインハルト」

仰々しいな。

「二人を繋ぐのは聖王女オリヴィエ」

……何でみんなヴィヴィオちゃん見てるの？

可愛いから？ なるほど理解した。

《まあ、本人いますけどね》

謎の声よ、俺にもわかるように言ってくれ。

「かつて戦乱の時代を一緒に生きたベルカの末裔が今この時代にまた集まっている。それにこの場には雷帝ダールグリユンの血統ヴィクトーリアがいるし、ここにはおれへんけどもうひとり旧ベルカ王家直径の子がいる」

ほへー。

すげーなー。

《棒読みですよ》

「興味ねえしどうでもいいからな」

本当にどうでもいい。

それよりメシうまうま。

「これが偶然なのか何かの縁や導きの結果なのかはわかれへん。そやけどこれはあくまで老婆心というか……大人側の心配としてなんやけど、これだけ濃密な旧ベルカの血統継承者たちが一堂に会するゆへんはちよつぴり気にかかるところなんや」

……へー、そーなんだー。ふーん。

「インターミドル中の大事な時期や……みんなが事件に巻き込まれたりせえへんように私たちも守っていききたい。そのためにも二人が過

去のことを話し合う会に私も参加させてもらいたいんよ」

八神司令はジークとアインハルトちゃんを見て言った。

「同じ真正古代ベルカ継承者同士……行きたい場所や探したい資料があるなら私も全力で協力するよ」

「はい！」

あ、パスタ食いてえ！

《少しは関心持ちましょうよ……》

「……そして俺がメシを喰り続けるなか、ストラトスちゃんによる昔話が始まった。

「……ハッ!? きさま、見ているなッ!」

「い、いきなりどーしたん、チヒロ……!」

「いやなんか……誰かに見られてたよーな気が……」

「……気づかれた? でも、どうやって……」

《あの変態ストーリーカー野郎、自分の都合のいいように記憶改竄しやがって……!》

「まあまあ落ち着けよ。キャラ崩れてるぞ」

どうもストラトスちゃんから聞かされた昔話はそのストーリーカーに

より脚色されていたようだ。

重要な部分は間違つてなかったらしいが、プライベートなエピソードが。

「いいじゃねーか、別に。それよかさつさと帰って寝るぞ。今日は疲れた」

他のヤツらは八神司令の家に一泊するらしい。

あれだけの女子率だし、俺は帰ることにした。

「しかも朝イチで無限書庫行くんだろ？ 俺はごめんだね」

あそこには魔物がいたはずだ。我が同士のタソを苦しめる邪悪な魔物が。

「となると、明日暇になるな。何しよう？」

《あ、じゃあデートにでも洒落込みますか？ 二人つきりで》

「お前とか？ まあかまわねえけど……ん？」

その時だった。

道の真ん中に転がる物体を発見したのは。

「……おお……倒れている口^{ストラトスちゃん}りを発見……。

七十話

「……よお」

「あ、チヒロさん……先程ぶりです」

さすがに見過ごすことができなく、うつ伏せに倒れるストラトスちゃんに話しかける。

「……何してんの？」

「転びました。どうもチャンピオンとの試合のダメージがまだ残っていたらしく、足がもつれて……」

なるほど。まあ今日だしな、試合。

つか……

「何でここに？ 八神司令人家に泊まってんじやねえの？」

「あ、いえ……着替えを取りに」

ああ、そっか。

「送ってもらえばよかったのに」

「いえ、さすがにそこまで迷惑は掛けられませんから……」

俺には掛けまくってたけどな。

いや、まあ、それよりさ。

「……起きれば？」

いつまでうつ伏せで話してるんだコイツは。

「……そうですね」

俺の言葉を聞いてやっとストラトスちゃんはゆっくりと起き上がる。

……ん、膝を擦りむいてるな。

「はあ……」

仕方ねえな……。

財布を漁り、絆創膏を取り出す。

「ほれ、使え」

「……ありがとうございます。女子力高いですね」

「引き千切るぞクソガキ」

ナメてんのか、コイツ。

「ハリーのやつが持ち歩けつてうるせーからだよ」

「『ハリー』って……砲撃番長ですか？」
バスターヘッド

「そうそう。アパートの隣の部屋に住んでるからな
もはや同居レベルだけど。」

「知りませんでした……くっ……!」

「悔しがる意味が分からないから。いいから絆創膏貼れよ」

馬鹿かお前は。

「……………私たちは」

ん？

「もしかすると私たちは、出会いかたが間違っていたんでしょね」

「出会ったこと自体が間違いだろ」

何いきなり語りだしてんの？

「いえ、間違いなんかじゃないです」

「何で分かんた、そんなこと」

「何て言うか……本能的にでしょうか？」

獣かお前は。

《間違いなく遺伝ですよ……獣の血族です、彼女は……!》

だよな。

俺もそう思った、謎の声よ。

「……………よし」

ストラトスちちゃんが絆創膏を貼り終え、立ち上がる。

「助けていただいてありがとうございます、チヒロさん」

「おう。どういたしまして、ストラトスちちゃん」

……ふと、ストラトスちちゃんの口から零れた『iもしも』fの話
を考えた。

もしも……出会い方が違えばコイツもオモチヤになったの
だろうか。

「……………まさかな」

「どうかしました？」

「いや、なんでもねえ」

そーいやコイツ……最近まわりついて来てないな。

「あー……最近うち来ないよな、お前」

「あ、はい。……ある時ふと冷静になったんです。『あれ？　これはいわゆるストーカーではないか？』と」

「いわゆるなくてもストーカーだよ。」

「だからその……ご迷惑をお掛けした……といえますか……」

「恐怖も与えてくれたな。」

「……あの……申し訳ありませんでした！」

「……うくむ。」

「今までが今までだから素直に信じていいものなのか。」

「あと……」

「あん？」

「ずいぶん遅くなってしまいました……あの時は助けていただきありがとうございます」

「……おう」

「……ま、今後見極めていけばいいか。」

オモチャに
「信用できるかどうか。」

その後、ストラトスちゃんと別れたあとにヴィヴィオちゃんから連絡があった。

『今日、うちに泊まっていつてくれませんか？　私もフェイトママもいないので、なのはママが寂しいかもしれないので』

「あー……了承取ればいいー」

『あ、もう取ってあります！』

「あ、そうなの？　早いね」

『……よし。これで少しは進展するかな……？』

七十一話

翌日。

「おはようございます、なのはさん」

「あ、おはよう、チヒロくん」

朝起きるとすでになのはさんは朝食を準備してくれていた。

さすが天^{ヴィヴィオちゃん}使の親……朝からなかなか凝ったメニューになっている。しかも健康的で胃にも優しいそうだ。

「よく眠れた？」

「それはもう！ ヴィヴィオちゃんの香りに包まれて爆睡できました！」

「あ、あはは……そっか」

ちなみに俺はヴィヴィオちゃんのベッドで寝た。

「ヴィヴィオちゃんください」

「ふふふ、だぐめ」

なぜだし。

妹……いや、娘としてほしい。何か方法はないものか。

「……ハッ!? そうだ、なのはさんと結婚すれば合法的に娘にできる……!?!」

天才か……俺は!?

「というわけで結婚しましょう、なのはさん」

「うーん、チヒロくんだったらいいかな? ……なんてねっ!」

ペロツと舌を出す二十三歳。

可愛いじゃないの……!!

「さ、早く食べちゃって! 私、これから出勤だから」

「はい」

なのはさんに別れを告げ、自宅に帰っている。

『ゆっくりしていてもいいよ』と言われたが、さすがに遠慮した。

「……にしてもあの人一晩中いたなあ……………」

あの人は当然あの人のことだ。名前を言っただけとはいけない司書長。しかもなのはさんが出勤するとき後ろからついて行ったのも確認してしまった。

「……また泊まりに行つてあげよう」

あんなのがいる中、一人でいなくちやならないときがあるなんて……そんなの嫌すぎる。

「……ん？」

その時、前から黒塗りの車がすごい勢いでやってきた。あれは……ヴィクターんところの……？

車は俺の横まで来て止まる。すると窓が開き、案の定ヴィクターが顔を出した。

「よう、ヴィクター。お前、今日、無限書庫だかに行くんじやあなかつたの……」

「百式☆神雷」

「……ハッ!？」

「……あら、目が覚めました?？」

……ヴィクター?

……ここはどこだ……? 何でお前に膝枕されてるんだ……?

「そうだ……あの時……いきなり攻撃されて……
気を失ったのか。」

……いったい誰があんなことを……!

「確か……ヴィクターんところの車が……」

「ジークがチヒロを気絶させて連れてきましたの」
……なに?」

「だから、ジークがチヒロを殴つて気絶させて連れてきましたの。私は止めたのですが……」

「オーケー、あのゴキブリ殺してやる……!」

俺に齒向かったことを後悔しやがれ……！

……つと、その前に。

「……ジークへの報復は後々やるとして、ここはどこなんだ？」
現状を把握しなくては。

どこかの施設のロビー……みたいだけど。

「ここは……無限書庫のロビーですわ」

「マジで許さねえ、あの女」

よくもこんな魔境に連れてきやがったな、ジーク……覚悟しとけよ。

……あれ？ でも魔物はなのはさんについていったから……今は魔境ではない……のか？

「見苦しいところをお見せしました」

ハリーに宥められること約10分、なんとか落ち着くことができた。

「い、いえ……先輩らしいと言えば先輩らしいですし……」

それはどういう意味かな、ヴィヴィオちゃん。

可愛いから許す。

「ヴィヴィオちゃん」

「きゃー♪」

ヴィヴィオちゃんに後ろから抱き付く。

……娘に欲しい。

「あっ………うう………!」

「……なに? どうかしたの、ミウラちゃん?」

沈んだ表情だけ。

財布でも落としたとか?

「……じいじい」

「ジークこつち見んな」

「なっ、なんでやあ!」

うっとおしいから。

「……はーい、みなさん! 行きますよー!」

俺の腕の中からヴィヴィオちゃんが声をあげてみんなを先導する。

俺はヴィヴィオちゃんに引っ付いたままなので、数人がぎよつとして見てくるけど関係ない。ヴィヴィオちゃん好き。

「ここが……無限書庫?」

「いえ、ここは一般解放区です!」

「目的地はこの先ですよ!」

再び先導されて、受付のようなところにやって来る。

……あ、ヴィヴィオちゃんが俺の腕の中からするりと出て行ってし

まった。振り向き、片目を瞑りながら舌を出す。

「……………この小悪魔天使ちゃんめ…………ツ！」

「いらっしやい、ヴィヴィオ」

「こんにちは〜♪」

受付嬢らしき人たちと挨拶を交わすヴィヴィオちゃん。

「未整理区画の調査だね？ 一般人のお友達がいるってことだったけど…………」

「えーと、一般人ってどうか…………」

ちらつと後ろを振り返り、ヴィヴィオちゃんは受付嬢たちに言い放った。

「インターミドルトップファイター上位選手のみなさんです！」

「どくも〜！」

……………なあ。

「何でお前キメ顔なわけ？ デコ助」

「…………私だって上位選手なんですよ!?!」

「だから？」

「もういい…………もういいです…………ごめんなさいでした……………！」

な、泣くなよ…………。

「わ！ テレビで観た子がいるツ！」

「さ…………サインもらっていいかな？」

「だ、そうだよ、ジーク？」

「私ウチですかっ？」

いらねー。

「あと八神司令もいらっしやいます」

「こんにちは〜」

「お…………お疲れ様ですっ！」

慌ててあいさつする受付嬢たち。…………あ、八神司令は上司になるからか。

その時、受付嬢の片割れと目があつた。

「あれ…………？ チヒロくん…………!?!」

「ん？ ……ああ、あんた確か…………」

「先輩、お知り合いですか？」

みんなの視線が俺に集まる。

「あ、いや……なんだ、親父の知り合い？　つていうか部下？」
「諜報班だとか何とかって……。」

「えっ、チヒロくんのお父さんって局員なんか？」

八神司令が聞いてくる。

「え？　あ、いや、違いまー……。」

「まあ、そんなところですわ」

ヴィクターが前に出てきて俺の言葉を遮った。

そしてみんなに聞こえないような小声で一言。

「いいですか？　あなたのお父様のことをむやみやたらに喋ってはいけません。わかりましたか？」

「……わ、わかった」

変な迫力が……なんか質問とかもできる雰囲気じゃねえし。

「……では、こちらのゲートから入ります！　書庫の中は無重力です。で慣れていないと気分が悪くなる方もいらっしやいます。そういう時はお伝えくださいね！」

みんなで声を揃えて返事をする。

「それでは古代ベルカ区画に……ゲート・オープン！」

七十三話

「おおーっ！」

誰かが感嘆の声をあげた。

まあ、無理もないよな。ゲート……っっていうよりポータル？ が起動したと思っただらいきなり無重力空間。

みんなぶかぶか浮いている。

「わわわっ！」

「あつと……！ 大丈夫ですか？」

「す、すみません」

ミウラちゃんがバランスを崩し、それをヴィヴィオちゃんが支えた。

「わはは、どーした抜剣娘！ 体幹バランスがなってねーぞ！」

お前もわりかしダメな感じだけどな、ハリー。

「普段飛びなれてない子は無重力はちようキツいかなー」

「ですわね」

八神司令の言葉にヴィクターが同意する。

……っつか、まてよ。無重力空間でふらふらしてるスカート女子

……あれ、これイケんじゃね？

「えーと……他に慣れてない方は……」

「オレあ大丈夫だ。すぐに慣れんだろ」

「私^{ウチ}も……あれれ……っ!？」

ジークが体勢を崩した。

危な……チツ、スカートじゃねえのかよ。ゴミめ。

「……チツ、なんでスカートじゃありませんのゴミですわね」

「チツ……スカートやないんかい。……ゴミやんか」

……どうやら同志がいるようだな。

いつの間にか体制を崩したジークはストラトスちゃんに支えられていた。

「あ、チヒロ先輩は飛行魔法……というか魔法使えませんでしたよね？ でしたら……」

ヴィヴィオちゃんが目が合う。

「……………普通に慣れてますね」

「まあ、別に魔法なんてなかったって空くらい飛べるしな」

「えっ」

「えっ」

えっ……飛べる、よね？

「…………あれです！」

ヴィヴィオちゃんたちに先導されて辿り着いたのは巨大な扉の前。

「ここが今回の目的の場所！」

「B009254G未整理区画……どこかの王家が所蔵してた書物庫らしいですよ」

詳しいな、このガキンチヨ。あと八重歯すげーな。

「ふふん」

「……………なに？」

「褒めてくれたっていいんですよ！」

「ていうか誰？ いつからいたの？」

「先輩のバカあああああッ！」

初対面の娘に罵倒されたんだけど。

「…………それじゃ扉を開きますねー！」

いつの間にやら話が終わり、突入の時間になっていたらしい。

ヴィヴィオちゃんが手をかざすと巨大な扉は大きな音を立てゆっくりと開いた。

「ご覧のとおり迷宮型ですッ！」

……………白、ストライプ、ピンク、白、ヴィヴィオちゃん天 使のは謎の光さんで見えない、黒、いちご柄、白……………

「……………先輩？」

「なんだいヴィヴィオちゃん？」

「…………い、いえ。気のせいでした」

あぶねー。

「ヴィヴィちゃんたち楽しそうやね」

「おっと、いきなり話し掛けてくんなよ、ジーク。びっくりするだろ、このKY短パン」

「……ん？ 今、なんか……ん？」

「気のせいだろ」

コロナちゃんの話では目的のものがあろうな場所を10ヶ所くらいまで絞り込んでいるらしい。よく分かんないけど。

「手分けして探しませんか？」

「おし、そうすつか！」

さつき俺を罵倒してきた娘の提案にみんな賛同し、手分けして探すことになった。

「じゃあ、みなさんのデバイスに入り口の位置と通信コードを記録しましょう！」

「迷ったりしないようにですね！」

迷うほどなのか、……。

「ま、もしもの時は私たちが助けに行くからなー」

「何かあったらすぐに呼ぶようにな」

八神司令と赤髪のねーちゃんがそう言った。

「さー！ それでは調査に入りましょうっ！」

「上手く見つかるといいんだけどね」

「あたしたちで見つけましょうっ！ ーーーって痛い痛い！ 先輩

もみあげ引つ張らないでください！」

と、言うわけで。

俺は罵倒してきたガキンチョたちと行動することにした。

「先輩もみあげ離してください！・痛いってばあッ！」

「あ、あはは……」

罵倒してきた罰だ。

このままバナナボードの要領で引つ張っていつてもらおう。

「……ていうか今さらだけど今日って無限書庫こに何探しに来たの？」

「………先輩のバカ」

「あんだとクソガキッ！」

「ま、まあまあ……落ち着きなよ、君……」

七十四話

「そう言えば君とはジークたちと一緒に何度か会ってはいるがこうして話すのは初めてだね。私はミカヤ・シエベルだ」

「おー、篠崎チヒロっす。よろしくな、シヤベル」

なんか穴とか掘れそうな名前だな。

「いや……シエベルなんだが……」

「無駄ですよ、ミカヤさん。この人、基本的に興味ない人は名前ちゃんと覚えないう人ですから」

……あれ？ 俺、有名人？

俺の個人情報だだ漏れじゃんか。

「ところで俺に詳しい君はいつたい誰なんだい？」

「先輩のバカあああああッ！」

「♪♪♪♪」

怒るプレスリーちゃん（と言うらしい。……あれ？）の頭を撫でること数分、本来の目的である探し物をする事となった。

ヒストリーちゃんの周りには沢山の本が浮いている。

「すごいね、リオちゃん。見事な検索だよ」

「あはは〜♪ うち実家にもすごい量の本とか資料がありまして……それを調べたいってうちにいつの間にか覚えちゃって」

「そうなんだ？ たとえば……？」

「俺も気になるな。年上モノ？ それとも年下モノとか？」

すごく大切なことだぞ。

「と、年上……？ よく分からないですけどたぶん違います。うち、実家が何代か前から春光拳の道場をやってるんですけど……倉庫の中に技術書とか秘伝書とかそういうものがいっぱい死蔵されちゃってるんですよ」

春光拳……何かの拳法か？

それとエロ本に何の関係があるんだろうか……？

「リオちゃんにはいつか春光拳の話を……」

「あー！もしよかったら……」

よくわかんないけど盛り上がっていた。

「ところでシャベル」

「……シエベルなんだが」

「アイツのふとももばっか見てんじゃねえよ。さつきからチラチラとよお」

「なっ!? みつ、見てないッ！ い、言いがかりはよしてくれッ！」

嘘つけ。

ずつと見てたんだからな。

「ムツツリか、お前」

「違う……!」

パティスリーちゃんも鈍感というかまだそういうところまで気にならない年頃なのかまったく気付いてねえし。

「……ん？」

シャベルがぎやーぎやー喚くなか、俺はあることに気付いた。

いつのまにか、俺たちのすぐ側に知らないガキンチョがいた。

「ウォーリーちゃん」

「……ウエズリーです。何ですか？」

「あれ……」

魔女のコスプレした少女が本棚に垂直に立っている。

その周りには、なんかちまい変なのが三匹ほど浮かんでいた。魔女だから……使い魔とか？

「あれ？ えーと……あなたはたしか……」

「……エレミアの手記は見つかった？」

魔女コスちゃんの言葉を聞き、シャベルとプリークリーちゃんがデバイスを構えた。

「……え、何々？ 何が始まるの？」

「先輩……私たちの後ろに下がってください」

「克蘭ベリーちゃん……?」

「そろそろ怒りますよ」

ベリーちゃんがかつちを向いた瞬間、魔女コスちゃんの使い魔(?)がビシツと指をさす。

すると、シヤベルとほにやららリーちゃんのデバイスが花束になった。

「おお……!」

思わず拍手する。

「……どうもどうも」

スカートの上端をつまんで俺にお辞儀をする魔女コスちゃん。

俺は感想を述べながらゆつくりと近付いていく。

「いや、素晴らしかったよ。いくら欲しい?」

「……おひねりは受け取らない。魔女の誇り」

……なるほど。

よくわかんないが変なプライドがあるのか。宴会芸好きな女神様みたい。

「彼は何を……!? 危険じゃ……」

「しっ! きっと先輩には何か考えが……」

手を差し出す。

「俺は篠崎チヒロ。君は?」

「……ファビア・クロゼルグ。よろしく、チヒロ」

「クロゼルグちゃんか。よろしく」

「……クロでいい。あなたは似ているからそう呼んで欲しい」

「よくわかんないけど、わかった」

差し出した俺の手にクロが手を伸ばす。

……よし。握手ベネをしたな?

「……プチデビルズもいるから、五人」

「せつ……先輩のバカあああああああああッ!!」

“強きを助け、弱きを憎む”。
俺が大好きなヒーローのキャッチフレーズだ。

七十五話

その後、クロの魔法でシャベルと何かを裸にひん剥き小さくして小瓶に閉じ込めた。二人は抱き合うようにしているためナニも見えない。

そして現在、俺とクロは魔法の筈(?)に二人乗りで無限書庫内を移動していた。

「すごい……………サラマンダーより、ずっとはやい！」

「……………サラマンダー？」

《腹立ちますよね、あの淫売》

それはわかるけど。

最近なんか黒いな、お前。謎の声

「……………ん」

クロが俺の胸に体を擦り寄せてくる。

さつきから何回もやられてるんだけど……………懐きすぎじゃね？

《……………ああ、彼女の先祖も私の知り合いですから、それ繋がりがと》

まじで？

また変な感じのやつ？ ヴィヴィオちゃんに会わせちゃいけない

とかか？

《いえ、彼女は恐らく聖王家というよりはオリ……………もとい、私に反応しているんでしょう。なのでヴィヴィオちゃんには影響はないかと》

そうなのか。ふう……………安心した。

……………つていうか、お前コイツの先祖に何したんだよ？

《……………調教しました》

「何やらかしてんの、お前。グツジョブ」

「……………チヒロ？」

「ん？ あ、いや、何でもない」

クロの頭を撫でてやると気持ち良さそうに目を細めた。
……ていうか調教で。

《いえ、彼女の先祖はかなりいたずらっ子で。一度私の下着を使って
ストーカー野郎とガチレズで遊んでいたんですよ》
遅しいな、コイツの先祖。

《それでぶちギレてしまいました》
で、調教したと。

お前のイメージ180度くらい変わったわ。

《私のイメージ……？ ああ、夢く可憐な清楚系お嬢様から太陽のよ
うな天真爛漫活発系美少女にですか？ もう、なんなら攻略してもい
いんですよ？》

「……自分が『悪』と気づいていない、もつともドス黒い悪とかかなあ」
《なっ……なんですとっ!?!》

「……チヒロ、次、見つけた」

クロに言われ、ぎゃーぎゃー騒ぐ謎の声を放っておいてその『次』と
やらを見る。

……ジークとストラトスちゃんか。

「よしやれ」

《よしやれ》

「……やる。ジークリンデ・エレミア、アインハルト・ストラトス」
クロが二人を呼ぶ。

それに反応した二人がこちらを向くが……

『真名認識・水晶体認証終了……イタダキマス吸収』

クロの蝙蝠のような使い魔が巨大化、二人を飲み込んだ。

その直後、シャベルと同じ状態になった二人が出てきた。……あれ
？ シャベルの他にもう一人いたっけ？

「……ジークリンデ・エレミア。あなたには後で聞きたいことがある
から……他の子たちとは別の瓶。今はエレミアの手記を……」

あつ、ジークの神髄発動した。

「おい、クロ……」

「……分かってる。チヒロ、こっち」

クロは即座にジークの入った小瓶を投げ捨て、箒に乗り俺の手を掴んだ。

「……少し飛ばす」

「あ、ああ……。……って、今、お前の使い魔が一匹……」

ジークのもとに残ってたよな？

「……あの子なら大丈夫。これでエレミアはしばらく動けないはず。イングヴァルドの末裔は瓶の中。あとは『エレミアの手記』と他の……」

……よく分からんが大変なことになってきたなあ。

だから来たくなかったのに。

とりあえず今は……

「シェイクシェイクブギーなーーーーー……♪」

ストラトスちゃんと言っちゃベルと……ゴホツゲホツ……ちゃんたちの入った瓶で遊んでよーっと！

『ちよっ、振るのはやめっーーーーーうおええええええええええツ!!』

……誰が吐いたかは彼女の名誉のために黙っておくことにしよう。

七十六話

ジークの足止め（詳しい内容は知らない）とストラトスちゃんの捕獲を終えた俺とクロの次なるターゲットは……。

「ヴィヴィオちゃんかあ……」

あとミウラちゃん。

正直そっちはどうでもいいけど、ヴィヴィオちゃんを剥いて瓶詰めはなあ……。

「なあ、クロ」

「……なに？」

「あの瓶詰め魔法ってさ、発動条件とかあんの？」

阻止できるなら阻止したい。

「……名前を正確にフルネームで呼ぶ必要がある」

「あ、だから今まで瓶詰め直前に名前呼んでたのか」
なるほど名前か……。

「ちなみにあの娘の名前ちゃんと知ってる？」

ヴィヴィオちゃんを指差す。

「……確か、ヴィヴィオ・タカマチだったはず」

「おいおい、間違ってるぞ。あの娘はヴィヴィオ・タナマチだぜ」

「……そう。失敗するところだった。ありがとう」

感謝を述べながらクロは猫が甘えるように俺に体を擦り付ける。

これでよし……。あー、リニス撫でたくなってきた。

「いやいや、いいってことよ。俺とクロの仲だしな！」

「…………て、照れる」

《照れるとか……この雌猫。それがご主人様に褒められて抱く感情ですか！ 跪いて足に口付けくらいしなさい！》

落ち着け。

「……それならもう一人の名前も間違えているかもしれない。あの娘の名前は？」

「ん？ ああ、あれ？ ミウラ・リナルデイ」

「……ミウラ・リナルデイ、ヴィヴィオ・タナマチ」

クロの魔法が作動しヴィヴィオちゃんたちを襲うが、ヴィヴィオちゃんは瞬時に反応し砲撃を放ってきた。

使い魔の口の中に砲撃が直撃、使い魔はそのまま撃沈した。

「なっ、何をするだアーツ!? ヴィヴィオちゃんだから許すッ!」

「……フアビア・クロゼルグ選手ですよね? インターミドルで勝ち残ってる」

「あつ、俺はスルーなのねそういう方向なのね」

ヴィヴィオちゃんスルースキルまで取得してるのか。

スペックたけえー。

「説明してくれませんか? ということか。 ……あと先輩にはあとでお話があります」

「怒っちゃやーよ」

「……………先輩」

「あつ、すみません静かにしてます」

こえええー……………!

ヴィヴィオちゃんこえええ……………さすが魔王の娘やでえ……………!

「……私は魔女だから。欲しいものがあるから魔法を使って手に入れる」

クロの言葉を聞いてヴィヴィオちゃんとミウラちゃんが構える。

やーねー、最近の若者は血気盛んで。

ブラックカーテン
「失せよ光明」

クロが手をかざし、そう唱えると一瞬周りが暗くなった。

「魔女の呪いから逃れる術はない」

そして先程までダウンしていた使い魔がヴィヴィオちゃんとミウラちゃんを飲み込んだ。

そして出てくる瓶詰めミウラちゃん……?!

「あれ……………ミウラちゃん、だけ?」

ヴィヴィオちゃんは？

「オリヴィエの末裔は……？」

クロも分かっているようだ。

「お、おい、ヴィヴィオちゃんは……？」

「……もしかするとチヒロが教えてくれた名前が違っていたのかも」

……え、違うと捕まらないだけじゃないの？

「……まあ、いい。瓶詰めできなくてもどうせ逃げられな——」

「よ、よくないわケツ！ ヴィヴィオちゃんはどうした!？」

「……え、え……っ!？」

「ヴィヴィオちゃんは無事なのか!？」

ヴィヴィオちゃんに何かあったら……俺は……俺は……!

世界を滅ぼしてやるツ！ 三日もありや十分だツ！

「……だ、大丈夫。オリヴィエの末裔は無事……全部終わったらちゃんと戻す」

「本当だな!? 絶対に本当だな!？」

「……や、約束する」

……ふう。ならいい。

済まないな、ヴィヴィオちゃん……しばらく我慢してくれ。

「……ふう。なんでそんなにオリヴィエの末裔なんかを気にするの?」

「……何?」

《今、この雌猫さりげなく私のことディスりました?》

『なんか?』

ヴィヴィオちゃんを……俺のヴィヴィオちゃんを、『なんか?』

「……どうしたの?」

……ふっふっふっ、まさか俺の前でヴィヴィオちゃんのことを『なんか』呼ばわりするとは。

いい度胸してるじゃあねーか。

《調教タイム♪ 調教タイム♪》

いいだろう。

少しだけきつーいお仕置きをしてやる……！

「おしおきだべえええエエエエエエツ!!」

「……ひっ……!？」

七十七話

クロの調教が完了し、手分けしてブツを探すことになった。
……………あれ、何だっけ？

《レズミアの妄想日記ですよ》

あー、そうそう。それだ。

どこにあんのか……………ん？

ーーーーにやあ。

鳴き声のほうを見ると掌サイズの猫のぬいぐるみがいた。

誰かの使い魔か何か？

ーーーーにやおん。

猫のぬいぐるみは俺のほうへよつてくると、足元にじゃれついてきた。
た。

「ん？ どした？」

しゃがんで喉元を撫でてやるとぐるぐると喉をならす。

可愛いやつだなあ。

「……………おっ？」

猫のぬいぐるみが俺の膝に飛び乗り右のポケットのほうに前足を伸ばす。

そこにはストラトスちゃんを封じた小瓶が入っている。

「これ？」

小瓶を出してそう訪ねると猫のぬいぐるみは再び「にやあ」とな
いた。

どうやらこれが欲しいようだ。

「うくん、クロには誰にも渡さないでって言われてんだけど……………って、
そんな悲しそうな表情すんな。わかった、やるよ」

大切にしろよ。この俺が譲るんだから。

ーーーーにやあ！

猫のぬいぐるみは一鳴きすると俺の手に顔を擦り寄せてからどこ
かに走り去っていった。

「……………よし、日記……………だっけ？ 探すか」

よーし、じゃ、この棚からー……

「やあ」

「……ん？」

レズミアの妄想日記を探していると、後ろから声を掛けられた。

「……ジーク？」

振り向いた先にはいつもとは違い、髪を後ろで一つ結びにしたジークがいた。

「いや、人違いだよ」

どうやらジークではなく、そっくりさんだったようだ。

「じゃあ誰だよ、お前」

「僕が誰かなんて些細な問題だよ。それより……さつき君たちが戦っていた金髪の娘……名前を何て言ったかな？」

……ヴィヴィオちゃんのことか？

「そう、それだ！ ヴィヴィオちゃんだ」

「……おい、お前、本当に何者だよ？」

クロとヴィヴィオちゃんたちの戦いを知っていたり、俺の心の声を讀んだり。

明らかにこいつ不審だぞ……謎の声ッ！ 君の意見を聞こうッ！

……ん？ おい！ おいってば！

「……謎の声の霊圧が……消えた……!？」

「何を言っているんだい？」

「あ、いや……何でもねえよ」

「そう？ ならいいんだけど」

……どうしたんだ、謎の声。

「それより本題だ。ねえ、僕とー……」

「何だよ？ 『僕と契約して魔法少女になってよ』か？」

もう古いぜ？

「……僕と一緒にヴィヴィオちゃんにえっちなことしようよ」

「ツギけんなテメーぶち殺すぞオラアツ!!!」

《………ヒロ………ヒロ！　チヒロ！》

「………ハッ!?」

《あ、やっと起きましたか?》

な、何だ……!?

いったい何が……!?

《何がって……あの猫のぬいぐるみが走り去っていったしばらくあとにいきなり倒れたんですよ?》

た、倒れた?

俺が?

《ええ。もう、本当に驚いたんですから》

……俺は現在進行形で驚いてるんだけど。

あれ?　確かジークが………ジークだったっけ?

《ジーク……エレミアの末裔ですか?　来てませんよ?　そもそも貴方は先程まで倒れていたんですから、来たところで貴方にはわからないでしょう?》

……じゃあ、夢?

何だろう……はつきり思い出せない。とりあえずジークは後でシ
メル。

《まあ、無事ならそれでいいです。後で病院に行きましょう》

……その方がいいかも。

《それよりバカアホレズミアの自己中妄想日記のことですが、どうやらこの辺りにはないようです》

そんなに長かったっけ?

探してるやつ。

「マジか。……なあ、それどうやって調べたんだ？」

《え？ ……ひ・み・つ♡》

「うわぁ腹立つ」

……まあ、こいつは嘘は吐かないからな。

どうやったかは知らねえけど本当に調べたんだろう。

《とりあえず雌猫に合流したほうがいいですね》
だな。

じゃ、クロのもとに向かうか。

七十八話

クロがブツを探しているであろうエリアに向かう途中、これまたジークに似たヤツに出会った。

ヤツっていうか………ロリっ娘。

「あつ、チヒロやあ！」

「おやおや？ 何で俺の名前を知っているんだい、お嬢ちゃん？」

……俺、もしかしてかなり有名人？

「ええっ!? ……って、ああ、この姿だからかあ……。私ウチやよ、私ウチ！」

うくん……一人称が「ウチ」のロリっ娘の知り合いはいないなあ……。

「よく分かんないけど……迷子なのかな？」

……こんな場所？

「ちやうつてば！ 私ウチや私ウチ！ ジークやって！」

「そうか、ジークちゃんって言うのか」

似てるだけじゃなくて名前までジークと一緒にとか……可哀想だ……。

思わず抱き締める。

「ふあっ!?」

「よしよし……ジークちゃん、辛かったねえ……！」

「な、なに!? なにが!？」

うわあ……同情しすぎて涙が溢れてきた……！

「あのジークと似てるうえに名前まで同じなんて……いじめられたり、生きること疑問を抱いたりしたでしょ……？」

「どっ、どういう意味やツ！ あ、ああ、でもこの状況は夢にまで見てきたものやし……！」

ああ、この娘はこんなに小さいのに……神様は意地悪だ……！

《ああ………！ 何の罪もない幼子に神はなんという試練を……あのレズミアに似せて創造なさるなんて………ッ!》

謎の声も嘆いている。

「あつ……ううう……むかつく……！ むかつくんやけど喜んでる自

分もいる……私ウチは……私ウチはどうすればいいんや……っ!？」

ジークちゃんはぶつぶつと何かを言っている。

そうか、彼女は今まで色々でジークに似ていることから俺のように接してくれる人がいなかったんだ。

初めての対応に戸惑っているんだな……!」

「いいんだよ、ジークちゃん。素直になっていいんだよ……?」

「あうう……うう……! 私ウチは……私ウチはあ……っ!」

何だい……?」

「……おにいちゃん、ぎゅってして……?」

ジークちゃんを抱き抱えながらクロのもとへ移動していると何だか爆発音のようなものが聞こえてきた。

「何だ?」

「……私ウチ、こわいよう……おにいちゃあん……!」

「よしよし、大丈夫だよジークちゃん。俺が側にいるからね」

「……うんっ! えへへっ」

ジークちゃんを安心させ、爆音の発生源へと向かう。

そこには……。

「……あれ……もしかしてクロか?」

ヴィヴィオちゃんやストラトスちゃんの大人モードのようにならないすばでーになったクロがいた。

しかもヴィヴィオちゃんやストラトスちゃんと対峙中のようだ。

「……おにいちゃんのおともだち?」

「ん? ああ、そう。友達……かなあー?」

友達?

《ペットですよ》

何の躊躇いもなくそう答える謎の声。

そうかペットなのか。

「むー……」

俺が黙り込んだままだったのがジークちゃんの何かに触れたのか、彼女は頬を膨らませていた。

「おにいちゃんは私のっ！ 私ウチのなんやっ！」

子供ならではの独占欲だろうか？

かーわいー。

「……って、ありや？」

ジークちゃんと話しているうちに、ヴィヴィオちゃんの拘束魔法よってクロが捕らえられていた。

これは……。

もしかして、俺こっち側とクロ圧倒的に不利な状況？

七十九話

とりあえず、俺はジークちゃんをつれて本棚の影に隠れることにした。

「ぎゅ〜……♡」

弱冠うっとおしくなってきたぞ、この娘。

これがジークだったら一本背負いなのに。本棚目掛けて叩き付けるのに。

「……ま、今はそれどころじゃないしな」

「ん？ おにいちゃん、どーしたん？」

「何でもないよ」

さて、少し整理しようか。

現在、クロはヴィヴィオちゃんの拘束魔法を破りガチ戦闘中だ。

しかし、やはりというか天使はつおい。かなり圧されてる。

「……あれ？ でも、確かヴィヴィオちゃんは封じたはずじゃ？」

ストラトスちゃんもいるし。

瓶詰め魔法を何とか解除したってことか？

「……となると、かなり不利だな」

クロは一人、あちらにはヴィヴィオちゃんにストラトスちゃん、そして見知らぬガキ（たぶんヴィヴィオちゃん側だろう）がいる。

はつきり言って勝ち目は無い。無力化されるのも時間の問題だろう。

「……と、なればやることは一つ」

あとはタイミングを……お？

ヴィヴィオちゃんがクロの手を取って何かを話している。

まさかもう終了……と思いきや。

「————ブチ抜けエーツ！」

突然ハリーの声が聞こえ、ヴィヴィオちゃんとクロの方に光が放たれた。

「……っつて、ヴィヴィオちゃん!？」

無事か!？」

……どうやら寸前で避けていたようだ。良かった。

そして光の放たれたもとを見るとハリーやその取り巻き、デコ助にシヤベル……あと何か知らない娘がバリアジャケットを装着し、クロと対峙していた。

「あ、やばいこれクライマックスだ」

俺も動かなくては!

この期を逃したら後はないッ!

「あつ、おにいちゃん!？」 どこいくん!? まってや〜!」

「……っ待ってくださいってば! 今、私がフアビアさんと話してるんですから!」

「い……いや、そりやそうなのかもしれねーが……」

かかったなアホが!

「稲妻十字……じゃなくて、確保おーッ!」

「なっ……ち、チヒロっ!？」

「チヒロ先輩っ!？」

後ろからクロを羽交い締めにする。

「俺はッ! 最初からこの機会を伺っていたッ! 油断したところを拘束できるようになッ!」

大声で強調する。

「……ハッ!? ルーテシアさん、今です!」

「えっ? あ、ああ、そつか!」

突然の俺の出現に一同ぼかんとするなか、いち早く再起動したストラトスちゃんが叫ぶ。

それに反応して、先ほどの見知らぬガキが近寄ってきてクロに手錠をかけた。

「魔力錠オン！」

「あ……………」

クロの変身魔法が解けた。

よし。計画通り……………」

「…………リオちゃん、あれ本当かい？ あの油断したところをつていの」

「そんなわけないじゃないですか！ だって先輩ですよ!？」

聞こえてんぞ。

君らあとで殺す。

「ジーク！ ヴィヴィ！ 無事ですか!？」

何てやっている間にヴィクターとそのペアであるコロナちゃんまで到着。これはもうチエツクメイトだな。

ていうか。

「おい、ヴィクター。ヴィヴィオちゃんについてはいいとして、お前はジークの心配しかしねえのかよ」

「あら、他はともかくあなたはそう簡単にやられたりしないでしよう？ 守るべき存在である初等科組は私とペアを組んだ娘とヴィヴィで全員なのですから。心配すべきはジークが自分のおもちやが壊されていないか無事かどうかだけです」

「中等科組とか他の連中は？」

「自己責任ですわ」

なるほど。一理あるな。

…………っていうかジークいなくね？ ジークちゃんならいるけど。

ま、どうでもいいか。

「さあて、と」

クロについては見知らぬガキ…………確か、ルーテシアとか呼ばれてたか？ そいつに任せておいて…………。

「ヴィヴィオちゃん、大丈夫？ 酷いことされなかった？」

「…………先輩のばかっ！」

な、なぜにつ!？」

「ヴィ、ヴィヴィオちゃん…………？ いったい何で怒って…………」

「かくほお…………!!」

八十話

俺は今、たいへん怒っていらっしやる。
怒りすぎて口調が変になっている。

「だ、だからごめんって言うてるやん……!」
「まじ許さねえ」

ジークちゃんはジークだった。

クロの魔法で子供の姿になっていただけだった。

「ぶっ殺す」

「な、なんでや!?!」

人の同情心に漬け込みやがって……!

どうしてくれようか、コイツ。

《焼きましょう。いつの時代でも汚物とは消毒されるものなのですよ》

悪くないな。

「……うー、何でそんなに怒るん? 私^{ウチ}のこと、そんなに嫌い……?」

「いや、別に嫌いではない。分類的にはむしろ好きだぞ」

「へえあつ!?!」

「驚きすぎて声おかしいぞ、ベジーク」

「こんなに面白い玩具は他にない。」

「まあ、でもハリーのが好きだけどな」

「……それは、ポッターのことやよね?」

「ハリー・トライベツカに決まってるんだろ馬鹿か」

馬鹿か。

「な、なんで!?! なんで番長なんや!?!」

「当然だろ。飯はうまいし、家事全般やってくれるし……あんな家政婦探したって他にいないぞ」

冬場のこたつのごとく愛してる。

「……な、なんや、そういう意味やったんか……良かった」

「……よくわかんねーけど、良かったな」

そんじゃ、ま。

「覚悟はできてるよな?」

さて。

ジークへの制裁は完了した。

次にすべきことは……。

「ヴィ〜ヴィオちゃんっ!」

「……ぷいっ」

……くっ、めげないぞ。

これくらいでめげたりしないぞ……!

「な、何で怒ってるのかな?」

「……私がフアビアさんと話してたのに」

……なるほど、つまりクロが存在しなければこうなることはなかったと。

「クロてめえ覚悟しろ」

「……えっ……!?!」

「な、何でそうなるんですか!?! ちよっ、チヒロ先輩、ストップ!」

クロにも制裁しようとするが、ヴィヴィオちゃんに止められる。

「あーもー! わかりました! 許しますから、フアビアさんに何も
しないでください!」

「えっ? 本当に? 本当に許してくれるの?」

「本当です!」

よっしやあああああッ!

「……あーのー……出遅れてるうちに状況が解決しても……
……ってことでええんかな?」

おっ、ベストなタイミングで八神司令が来たな。

あの後、八神司令が来てくれたおかげで事態は完全に収束した。ヴィヴィオちゃんたちは……えつと……ウ、ウエー？　ちゃんとやらが見つけたエレミアの手記を残って読むことにしたらしい。

俺は……

《さ、目的は達成しましたし、さつさと帰りましょうか。あのレズ女の日記読むなんて絶対にごめんです》

というように謎の声が騒ぐので、無重力空間に酔ったという嘘をついて帰ることにした。

現在はクロをしょっぴくために同じく無限書庫から出ようとする八神司令たちと行動を共にしている。

「ねえ」

「あん？」

確かこいつ……ルーテシア、だっけ？

「まだあなたとはちゃんと喋ったことなかったよね？　私はルーテシ

ア・アルピーノ。あなたは？」

「篠崎チヒロ。趣味は盆栽」

「ぼ、盆栽って……な、なかなか渋い趣味ね」

嘘だけだな。

「無重力空間に酔ったっていつてたけど……大丈夫？」

「あー……大丈夫大丈夫。まだ酔い始めて感じだから」

本当は酔ってすらいないけど。

って、そうだ。

「クロ」

「……チヒロ」

クロに話しかける。

「獄中生活がんばれよ。出所したらまともに生きるんだぞ」

「いや別に刑務所入るわけじゃないよ!？」

ルーテシアがそう叫ぶ。

えっ、捕まる訳じゃないの？

「んだよ、甘いなあ、管理局」

「です」

……誰だこのガキンちよ。

「あ、ご挨拶が遅れました！ リインフォース・ツヴァイです！ よろしくお願ひします！」

「あ？ あ、ああ……よろしく」

何だろう……誰かに似てるような……？

「……チヒロは」

リインフォースが誰に似てるのか思い出そうとしていたら、クロが話しかけてきた。

……ま、これはいつか思い出すだろ。

「なんだ？」

「……チヒロは、私に刑務所に入ってほしいの？」

「え？ 別に」

どっちでもいい。

「……そう」

「……え？ 終わり？」

終わりたいだ。

「……ま、よくわかんねーけど。こつてり絞られてこい。……説教なんざ聞き流してりやいいんだからな」

「……わかった」

ぽんぽん、と頭を撫でてやる。

「また今度遊ぼーぜ、クロ」

「……うんっ！」

「あの魔女っ娘……あんなに喜んでるけど、目の前の相手に騙し討ちされたっての覚えてないの……？」

八十一話

「だからさあ、やっぱジークにさらしただけ着用させて管理局員の前を歩かせてみようぜ。ぜってー面白いつて」

「いえ、それなら変○仮面の格好であなたの家に突撃させるほうが……」

「うくん……け○こう仮面にしないか？」

「それ採用ですわ」

「……あんたら私ウチに恨みでもあるんかあっ!？」

「え？ 別にないけど？」

「え？ 別にありませんわよ？」

「余計に質タチが悪いわっ!」

今日も今日とてチヒロと私とジーク、三人集まってお茶会をしている。

「おい、ヴィクター。駄犬エドガーもいるぞ」

「あら、犬を数えるときは『匹』を使いますのよ？」

「あ、そっか」

駄犬エドガーはさめざめと泣いている。

って、あら？ 紅茶がもうありませんわね。

「紅茶のおかわりを持ってきてくださいいな、駄犬エドガー」

駄犬エドガーは泣きながら屋敷へと歩いていった。

「あいつ絶対DMだよな」

「あれ見てそう言うんやったらチヒロの目は曇った硝子玉やで」

チヒロが歩いていくエドガーを見てそう言った。

ふむ……。

「彼も昔からああだった訳ではないんですのよ？」

「そうなのか？」

「……あんな扱いになったのは、主にヴィクターが変わったせいやけどね」

孫なのだから。

私はそれしか知らないのだから。

「……………ジーク」

槍を振る手を止め屋敷の方を見る。

最近出会った少女——ジークリンデ・エレミア。彼女もまた
過去先祖に捕らわれた人間だ。

「……………大丈夫かしら」

触れるもの全てを消し去る彼女の……………いえ、エレミアの魔法。それが彼女を苦しめている。

救ってあげたい。けど私には救えない。その術がない。

「でも……………守ってあげることとはできる」

「雷帝」の技さえ身に付ければ。

私にだってできることはあるはずだ。それを見つけてみせる。

「……………ふっ！ はあっ！」

だから今日も槍を振る。

こうして、今日という日もいつもと変わりなく過ぎて行く——

「なあ、お前、何してんだ？」

——はずだった。

八十二話

「なあ、お前、何してんだ？」

「えっ……!?!」

背後から声をかけられる。

初めはエドガーかと思ったが、彼は今、用事があつて屋敷の方へ戻っているはずだ。

それに声が違う。

「なあ、おい」

「あ、あなたは誰ですの……っ!?!」

振り向いた先にいたのは、同年代か少し年下くらいの男の子だつた。

「人にものを訪ねるときは、まずは自分が名乗るべきだぜ」

男の子の答えに釈然としない何かを感じつつも、彼の言う通りだとも思つた。

「ここはまず私から名乗ろう。」

「……ヴィクトーリア・ダールグリユンですわ」

「ダールグリユン？ 変な名前……くっ!?!」

今こそ雷帝の技が習得しきれていないことを後悔したことはなかつた。

「……そ、それで、あなたは？」

「ん？ “もくひけん”を行使しまーす」

「なっ!?! 何ですのそれ!?!」

「えっ？ “もくひけん”知らねーの？ バカだなあ、お前」

「そういう意味じゃありませんわっ!」

それに黙秘権くらい知っている。

「いやあ、ほら。今は“ごじんじょーほー”とか“プライベート”が保護される時代だから」

……怒りを通り越して呆れを覚えた。

「この男の子は屁理屈の塊のようだった。」

「屁理屈も理屈だよーん」

「こいつマジ腹立ちますわ……ッ！」

「で、あなたはなぜここにいるのですか？」

「何がー？」

「はあ……。」

「ここは私の家の土地、勝手に入ってきたら『不法侵入』ですわよ」
「……ふむ。ここはお前の土地だったのか」

「だから、私っていうよりはダールグリユン家ですが……。」

「でもここ生み出したのはお前やご先祖様じゃないよな？」

「は、はい？」

「だから、元々あった土地を金やら何やらで買ったのがお前のご先祖
なんだよな」

「ま、まあ……そうですね」

「きつと金だけではなく、戦やらそこであげた戦果の功績やらで得た
というのもあるのだろう。」

「だが、それが何だと言うのか……？」

「じゃあ大丈夫だ。森も川も海もこの土地も『世界』が生み出したも
のだから、ここは『世界』のものだ」

「は、はあっ!？」

「な、何を言ってるんですの!？」

「何かねー、この前、一人で留守番してたら家に変な人が来てそう言っ
てた」

「そ、それって……宗教勧誘？」

「ちゃんと『世界』に許可とって『ここは自分の土地』っていつてるの
？」

「へっ!?! あ、いや……。」

「むしろ『世界』に許可をとる方法ってどうやるんでしょうか？」

「じゃあいいよな！俺がここにいても」

「え、ええええ……。」

「……こうして、いつもと変わらない日常のなかに僅かな『変化』が現れた。」

それからも、彼は週に一回、多いときには週に二、三回ほど現れるようになった。

「できあ、幼馴染みがうっせえのよ。いや、まだガキだから仕方ねーっちゃ仕方ねーのかもしれないけど……あ、この幼馴染みは前に話したのは違うヤツでさ……」

「……ふんっ！ はっ！」

はじめの頃は彼が一方的に喋っていて、私はそれを無視して訓練に励むというものだった。

しかし時間が経つにつれ、それも変わっていった。

「……って言うんだよ！ 酷くね!？」

「……それはあなたが悪いですわ」

「……そういや、ヴィクトーリア。お前って……」

「……ヴィクターでいいですわ」

「……ほら、レモンのハチミツ漬け作ってみたぞ」

「……わ、私のために？」

「他に誰がいんだよ。……母さんに聞いて初めて作ったから味は保証できないけど」

「い、いただきますわ……」

そして、とある日のこと。

「……よう、ヴィクター。今日も相変わらず無駄に頑張ってるのか？」

「む、無駄とか言わないでくださいなっ！」

数日前から私はあることを考えていた。

それを今日、実行に移そうと思う。

「あの……」

「……ん？ どした？」

「あなたに会ってもらいたい娘がいるんですの」

八十三話

「ここですわ」

“彼”を連れて彼女……ジークのいる部屋の前へとやってきた。

……この人なら彼女を救えるかもしれない。自分でもなぜそんなことを考えたのかはわからなかった。

「ふくん……」

「あの……さつきも話した通り彼女はデリケートですので、どうか手荒な真似はしないでくださいね？」

「分かってる分かっている。俺に任せなさい」

ジークの事情は説明済みだ。

「……お願いいたしますわ」

「おうよ」

「……おじゃましまーす！」

「……おじゃましまーす！」

彼は扉を開け、中へと入った。

私もそれに続く。

「アイツか……」

部屋の中心、膝を抱えてジークは座っていた。

部屋の半分は彼女を境にして破壊の限りを尽くされている。

「ぐつちやぐちやだなあ……」

「あれがさつき話した彼女の背負うもの……それが残した“痕”ですわ」

『……私が触るとみんな壊れてしまうから』

いつだったかジークが言っていたこと。

今でも鮮明に覚えている。

「……よし」

彼が動き出した。

ゆつくりとジークに近付いていく。

「……お願い……あの娘を……救ってください……ッ！」
そして……

……彼はジークの頭を踏みつけた。

「何してますの!? あなた何してますのっ!」

あの後すぐに彼を部屋から連れ出し、問い詰めている。

「いやあ……あんな風にずーっとウジウジしてる奴嫌いなんだよ
だからって踏みつけますか普通!」

それも傷心の女の子の頭を!

「だってムカつくじゃない?」

「馬鹿なんですか? あなた馬鹿なんですかね!」

「ばーかばーかお前がばーか!」

「イッ……ッ!」

「まじでブツ殺してやりますわ!」

「まあ待て。俺だって考えもなく踏みつけたわけじゃねえって」

「ムカつくからでしょうっ!? あなたさっきそう言ったではありませんせ
んかっ!」

「本当にそれだけだと思ってるのか?」

えっ……? や、やはりなにか理由があつて?

「……ああ、それだけの理由さ!」

「最も惨い殺し方してやる」

「お、おい！ 落ち着けて！　じ、冗談だよ冗談！」
本当に冗談なのか？

信用できない……。

「はあ……あなたに頼んだ私が馬鹿でしたわ」

「いやいやいや、まだ早いって！　言ったじやん、俺に任せなさいって」

「今ので任せるのは間違いだと確信しましたわ」

「信じろよ。絶対に大丈夫だから！」

何をもつてそんなことが言えるのか……。

「よおし、第二陣、突撃イー！」

彼は再び部屋の中へと入っていった。

——そして再びジークの頭を踏みつけた。

「な、何やねん、アンタ……っ！　人の頭をいきなり踏みつけるとか……それも二回やで……!?　何考えてんねん……っ！」

「うつせーブス……てめえみてーにウジウジしてる奴は嫌いなんだよ……っ！」

ああああ……何でこんなことに……!!

「あ、アンタには関係ないやろおお……っ！」

「知らねーよ、んなことはよおお……っ！」

ジークと彼は取っ組み合いの喧嘩をはじめた。

それはそうだ。見ず知らずの人物に頭を二回も踏まれたら誰だって怒るはずだ。

「だ、だいたいアンタ誰や!?　何でここにいるんや……!?」

八十四話

「ごめんなさいでした」

「反省してます」

土下座。二人は今、その体勢だ。

私はその前で訓練用の槍を手に仁王立ち。

「本当に分かってるんですの？」

「人ん家で喧嘩しちやいけないでした」

「いきなり人の頭踏みつけちやいけないでした」

「ちゃんとした言葉を使いなさい」

はあ……本当に分かってるのだろうか。

「テメーのせいだかんな」

「なんでや!! アンタのせいやろっ!」

聞こえてますわよ。

「ぶぎやっ!?!」

「あいたあっ!?!」

ジークの頭を踏み抜き、彼の背に槍の柄を刺す。

「……んっ………!」

……やっぱり。

何だろうか、この、人に……特にジークに酷いことをしたときに流れる甘美な電流のようなものは。

魔力異常……? 一度、検査をする必要がありますわね。

「……って、それは後ですわ。二人とも聞いていますの!?!」

今はこの二人を叱ることに集中しよう。

それからというもの、彼が来るたびに二人は喧嘩をしていた。
ある時はジークのおやつを彼が食べたと言って。

また、ある時は「彼」の肩にジークの肩がぶつかったと言って、やれ「彼」がどうの、ジークがどうの。

朝昼夜と時間を問わず、二人は会えば喧嘩ばかりしていた。

そのたびに私が制裁をする。……日増しにあの甘美な電流も強くなる。なんなのこれ。

「……そしてある時を境に、「彼」は私たちのもとに現れなくなった。」

「結局、名前も聞かないまま彼はいなくなってしまったのですわ」

「本当にひどい奴やったよね……あの馬鹿」

「……そんなこと言って、一番寂しがっていたのはあなたでしょうに。」

「ま、まあ……あの頃はあの馬鹿をどうぶちのめしたろうか考えてたおかげ……じゃなくて！ そのせいで、ご先祖様とかのことを一時的に忘れることができたのは事実やな。……た、楽しかったし」

そして心の余裕ができて、ジークは壁をひとつ乗り越えることができた。

「へえ……ん？ なあ、もしかしてジーク、ソイツのこと……」

「ええ、紛れもなくあれはジークの初恋ですわね」

「な、なな何言つとんの!? あ、あんなヤツ好きやない!っ」

「へえ……ほんとかなー? にやにや」

「にやにやすんな口で言うなああああああ!」

そして二人は追いかけてつこを始める。

「……実を言うと、私は「彼」のその後を知っている。」

「ダールグリウン家の総力を持って調べたのだ。」

私たちの前に「彼」が現れなくなった時期、「彼」は交通事故に巻

き込まれて入院していただそうだ。

その際に彼は、記憶の一部分をきれいさっぱり無くしてしまつたらしい。

だから私たちのところには現れなかつたのだ。記憶の一部分……つまり、私たちを忘れてしまつたから。

それから数年後、〝彼〞に再会した。

何の因果か、今度はジークから紹介されて。

ジークには〝彼〞だということは分かつていながつたようだ。男子三日会わざればなんとやら、確かにだいぶ印象が変わつていた。

もちろん〝彼〞のほうも私たちを分からなかつた。

でも私にはすぐに分かつた。

いまだに追いかけてつこを続ける二人を眺める。

「……あなたの初恋はまだ続いているんですよ、ジーク」

でも、それを言うつもりはない。

きつとそれでいいのだと思う。大切なのは〝今〞だから。

「ところでチヒロ……あなたの初恋っていつのですの？」

「ん？ ああ……俺さ、小さい頃に交通事故に巻き込まれたことがあるんだよ。で、入院してる時にさ、ずっと側にいてくれた娘がいたんだ。年下か、同じ年か……金髪の女の子でさ。でも今思えばおかしな話だよな？ だつてずっと……24時間ずっと一緒にいてくれたんだぜ？ まあ寝てる間はわかんないけど、たぶんずっとだ。同じ年くらいの子が、一人でだぜ？ ありえないだろ。……あ、そういやなんかヴィヴィオちゃんに似てたかも」

《……ふふっ♪》

八十五話

「……カポーン……なんて。」

アニメやドラマだったら、そんな音が鳴り響くかもな。

「ふいっ……！」

熱い湯の中で手足を伸ばす。

じんわりと体の芯から温められていく。

「やっぱいいねえ……デケー風呂は」

「……ああ、そうだなあ……」

俺の独り言に答える声があった。すぐ隣から「……若い男だ。」

「いやあ……朝から風呂つて最高つすよね」

「ああ、最高だな……こんな贅沢はない」

「そういや……何で俺、朝から風呂に入ってたんだろう？
ていうか。」

「あの……ちよつと聞いていいすかね？」

「ん？ 何だい？」

「……ここどこ？ あんた誰？ 何で俺、大浴場になんかいるの？」

「どうやらここは銭湯だったようだ。」

「はい、どうぞ」

「あ、ども……」

若い男が牛乳を差し出してきたので受け取る。

ぐいつ、と一気飲み。

「服、どうだい？ キツかったりしないかい？」

「あ、大丈夫です」

大浴場から出て更衣室に来てみたが俺の服はなかった。

朝ということもあり、人数はそんなにいない。あれば見つけることは難しくはないはずだが……俺に合うサイズの服は見当たらない。

そこでこの若い男が自宅に戻り、息子さんの服を持ってきてくれたのだ。……子供いるんだ、この人。

え？ じゃあ……そんなに若くないのか……？

「ありがとうございます」

「いや、何。困ったときはお互い様さ」

マジイケメソ。

「えつと……記憶喪失……ってやつなのかな？」

「はあ……たぶん」

「そ、そうか……」

先ほどの若い男から質問されて気づいたのだが、今まで何をしてたのか、どこに住んでいたのか……自分に関する情報をまったく思い出せないのだ。

にしても、なんか自分でもビックリするほどすごい落ち着いてるなあ。

「自分の名前は……思い出せないかい？」

「……篠崎チヒロです」

「ああ、よかった。名前は覚えてるみたいだね……」

唯一の手掛かりだよな、俺れの名前。

うーん……。

「困ったなあ……」

「困りましたねえ……」

これからどうしよう……。

「とりあえず、僕の家に行かないかい？」

「えっ？」

「僕は家族と喫茶店を経営しているんだ。自分で言うのも何だが、結

構繁盛していてね。お客さんがたくさん来るから、そのうちの誰か聞けば何かわかるかもしれない」

「ああ、なるほど。でも迷惑じゃ……」

「さっきも言っただろう？ 困ったときはお互い様さ」

「……ここは素直に甘えておくか。」

「じゃあ……お願いします」

「ああ、わかった。それじゃあ行こうか」

そう言って若い男は歩き出す。

……つて、まだ名前聞いてねえや。

「なあ」

「ん？ どうしたんだい？」

「アンタ名前は？」

「……そう言えばまだ名乗ってなかったか」

「……僕は高町士郎。よろしくね、チヒロくん」

八十六話

「さ、着いたよ。ここだ」

「……ほほう」

士郎さんに連れられて銭湯から歩くこと十数分、なかなかオサレな店に到着した。

「ここが士郎さんの店か……」

「喫茶翠屋って言うんだ」

「へえ……いい店ですね」

「だろう？」

まだ開店前なのだろう、扉には“closed”と書かれた看板がかかっている。

「……だいたいこういう店って10時くらいから開くんだよな？」

飲食店だからなんとも言えないけど。

「……本当は……あの銭湯は結構早い時間から開いてるんだなあ。」

「……本当に、なんでそんな時間に俺は入浴しに来ていたんだろうか。」

「さあ、入ろうか」

「あつ、はい」

扉を開くと可愛らしいベルの音が鳴り響く。

「桃子く、帰ったぞ」

桃子というのは僕の妻のことなんだ、と士郎さんは説明してくる。

「士郎さん、お帰りなさい……って、あら？」

店の奥からこれまた若い女性が現れる。この人が“桃子”さん？

うそ、子持ち？ 本当に？

若々しいとかそんなレベルじゃあないぞ。

「あらあら！ 可愛いコね！ 士郎さん、どこで拾ってきたの？」

「いや、拾ってきたって……動物じゃないんだから」

「……冗談が好きな人、なのか？」

「わかったわ。このコ、うちで飼いましょう」

桃子さんは、俺の事情聞いて開口一番にそう言い放った。

「いや、飼う。ってなんだい!?!」

「私もお世話手伝うわ」

「聞いている!?!」

桃子さんの言葉に士郎さんは焦っていた。

……なんていうか。

「士郎さんの奥さんって……っていうか士郎さんって……」

「ちよつ、待ってくれ! それで僕の評価が下がるのはとても不本意なんだが!?!」

「ところでワンちゃん、あなた名前は?」

「〴〵ワンちゃん? ……あ、篠崎チヒロつす」

「あら、お名前言えるのね、えらいえらい♪ 私は高町桃子よ。よろしくね、ワンちゃん」

「名乗った意味なくね? ていうか〴〵ワンちゃん。って……」

「二人して僕を無視するのはやめてっ!?!」

喚く士郎さんを無視して桃子さんは俺の頭を撫でる。

完全に犬扱いですね分かります。

「そうそう! さっきシュークリーム作ったんだけど食べるかしら?」

商品なんだけど二、三個くらいなら……」

そう言つて桃子さんは店の奥に消えていった。

「……えつと、失礼ですが……こう、おバカつていうか、おかしいつて
いうか……そういう方が好きなんですわね」

「違うからっ!?!」

「うひゃうひゃうひゃ」

桃子さんが持ってきてくれたシュークリームを、桃子さんに頭を撫でられながら頂いている。

すっげえ邪魔なのに……何だろうか、無下にし辛い。なんでだろうか？

「……えつと」

「あら、どうしたの？ ……あつ！ お散歩に行く？ リードあつたかしら……」

やはり無下にすべきだろうか。

「……で、土郎さん。この店って何時に開店するんですか？」

「えっ？ あ、ああ。時間は……」
なるほど。

「とりあえずお客さんが来たら君のことを片っ端から聞いてみるよ」

「ありがとうございます。……あー、よければ手伝いましょうか？」

「……しないって言うのは気が引けますし」

「……そうだね。そのほうが君も気分がいいだろうしね」

話のわかる人でよかった。

……趣味は悪いけど、色々。

八十七話

「……お待たせしました、ケーキセットになります」

現在、俺は翠屋の手伝いをしている。

士郎さんの言うとおり、かなり繁盛しているようだ。開店しからそう経たないにも関わらずぞくぞくと客が入ってくる。

「すいませーん！ オーダーお願いしまーす」

「あ、はい」

ちなみに“手伝い”とはホールスタッフだ。

さすがに飲食店で調理スタッフはできないからな。資格とかななし……たぶん。

「すいませーん！」

……もしも、このままこの店でバイトすることになったとしたら歩合制がいいなあ。

「やあ、チヒロくん。お疲れさま」

「超疲れましたよ……」

昼を過ぎ、客足が少しだけ途絶えてきたのを見計らって休憩に入った。

……すぐにまたたくさん来るのだろう、客ども奴らは。

「お客様は神様なんかじゃあねえ………アレは悪魔だ……地獄からの使者だ……！」

「は、ははは……」

笑いごとじゃねえよ……マジで。

「……で、どうでしたか？」

「うん……聞いてみたけど、誰も君のことを知らないようだ」

「……そうですか」

確かに来た客は多かった。だが、その中で“俺を知っている”なん

て条件が付けば……確率はかなり低いだろう。
ピンポイントで、なんてのはかなりキツイ。

「う〜む……どうしますかねえ……」

「……そうだねえ」

とりあえずこの後も手伝いながら聞き込みを続けてみて……見付
からなかったらどうしよう？

「記憶が戻れば手っ取り早いんだけどなあ……」

「……あ、そっか。チヒロくん、君、記憶喪失なんだったね。忘れてた
よ」

「むしろどうやったたらそんな重大なこと忘れるんすか……？」

「いやほら……すぐく落ち着いてるし？」

……あんたの評価はもはや酷いとこまで落ちたぞ。

「……は〜い、ワンちゃん！ ちよつと遅くなっちゃったけど、お
昼ごはんよろ♪」

桃子さんが嬉しそうにやって来る。犬扱いについては無視するこ
とにした。

よし、メシ食って午後も頑張るか！ ……つて、なんかもう普通に
バイトしてるみたいだ。

「はい、いっぱい食べて〜〜あつ」

何だ？

「うふふ……お手！」

……はい、無視無視。

やはりというか、客足が戻ってきて現在混雑なう。

おやつの間だからか今度は子連れ客が多いようだ。

「おにーちゃん！ ばいばあーい！」

「じゃーなー！ 気を付けて帰れよー！」

二歳くらいだろうか、小さな女の子がお母さんに抱っこされて手を
振って帰っていった。

よくわからんがさつきからガキどもに懐かれまくってる。

「……カランカラン。」

「あ、いらっしやいませ」

ドアベルが鳴り、入り口を見ると女性客が二人。

金髪の女と黒髪の女……あ、黒髪の方は光の角度によって紫っぽくも見えるな。

「ん？ 何よ、アンタ？ 見ない顔ね」

パツキン女ムカつく。

初対面にする言い方じゃねーぞ、それ。

「喧嘩売ってるのか？」

「あん？ 何よ、やるの？」

「えっ!? えっ!?」

俺とパツキン女のガンのくれ合いに黒髪女はあたふたしている。

「……おお！ アリサちゃん、すずかちゃん、今日も来てくれたんだね」

そこに土郎さんがやってくる。

アリサ？ すずか？ 誰？

「土郎さん、こんにちは」

「よ、よかったよお……ありがとう、土郎さん」

……土郎さんの、知り合い？

「し、土郎さん……この人たちは？」

「ん、ああ、そうだった。二人とも、紹介するよ。この子は篠崎チヒロくん……訳あってうちの^{翠屋}手伝いをしてくれてるんだ」

厳密に言えば、俺を助けてくれてるからせめてもの恩返しにっ感じだけだな。

んで、この人たちは？

「で、チヒロくん。彼女たちは……僕の末の娘の幼馴染なんだ」

八十八話

「大変、大変、大変なの〜！」
ん？ なんだ？

「どうした？ なの松姉さん？」

「あ、チー松くん」

「待ってせめてチヒ松とかにして」

血祭りっぽく聞こえるから。

「なんとね！ 『鮮烈なのは以下略』の連載が終了して、新しく『なの松さん』の連載がスタートするんだよ！」

「えー!? 本当なの、なの松姉さん！」

「本当だよ！ だから早くみんなにも知らせてあげなくちゃ！」
そうだな。

こんな重要なこと、早く教えてやらなくちゃ！

「おーい、みんな！」

「どうしたの？ チヒ松」

「……は、早いつすね。ふあて松姉さん」

「もう。わたしのことはママ松って呼びなさいって言ってるでしょ！」

「頭湧いてんのか」

なんだよママ松って。

「んー？ なんや、呼んだ？ チヒ松にい」

「おう、ゴキ松」

「ジーク松やけど!？」

相変わらずうるせえなあ。

さっさと自立しろクソニート。

「呼びましたか？ チヒ松兄さん」

「あ、アインハルト松……天井裏から出てくるな」

「本編ではお蔵入りしてしまったので。……あと語呂悪くないですか、アインハルト松って」

心底どうでもいい。

「どうしたのー？ チヒ松お兄ちゃん」

「おお、我が最愛の妹にしてキューティーモンスター、末っ子・ヴィ
ヴィ松！ あああ可愛い可愛い可愛いっ！」

「え、あ……う、うん。あ、ありがと……」

引いてる姿も可愛い可愛い可愛いっ！

「えっ!？」

「私^{ウチ}ら六っ子が!？」

「新しい連載で主役!？」

「それ本当!？」

「本当なの！ 間違いないの!！」

「おいおいおいおい！ ついにデビューの時だぜ!！」

わくわくしてきた！

それじゃ！ セーのっ！

『なの松さん、はーじまーるよー!！』

「ーハッ!? なんか電波を受信してた気がする……思い出せな
いけど」

「ぶぶっ、厨二乙」

「シバくぞクソ金髪」

「あ？ 上等よ、表出なさい」

「ち、ちよつと二人とも！ 喧嘩はダメだよ!！」

ーあのと、士郎さんから二人の紹介をしてもらった。

黒髪のほうが月村すずかさん。ちよつと話した感じでは、おしとや
かでどこかのご令嬢のような優雅さがある。そして車の人。

金髪はバーニング。あと、くぎゆう。以上。

二人は士郎さんの末の娘さんの幼馴染みということらしいが……
じゃあこの夫婦って普通にジジイとババアじゃね？

「で？ あんた、記憶喪失って本当なの？……クソガキ」

「ああ。気付いたらなぜか銭湯で風呂に入ってたんだよ。……クソ年
増」

思い出せるのは名前だけ。

「それで、^{翠屋}ここで手伝いしながら自分のことを聞いてみたんすけど
……」

「手がかりは見つからなかったんだね。……アリサちゃん、チヒロくん、
胸ぐら掴み合うのやめなよ……」

お互いに一睨みしてから振り払うように手を離す。

「つたく、この金髪は……！」

「士郎さん、届け出とかは……」

「あ……まだ出してなかったよ」

「時々あの娘みたいに抜けてますよね……士郎さんって」

金髪が士郎さんにそう言う。確かにこの人抜けてるところあるとは思
う。記憶がないって言ってもあんまり動じなかったし。

金髪が言った『あの娘』ってのは……士郎さんの末の娘さんかな？

「災難だったね、チヒロくん」

「いえ、そんな……思い出せない分、逆に辛くないっすから。でもあり
がとうございます、月村さん」

「……あんた、すずかには敬語なのになんであたしにはタメ口なのよ
ゴミン」

「尊敬できねーからだよカス」

再び無言で胸ぐらを掴み合う。

「どうやらこいつとは一度ケリをつけなくちゃならないようだ。」

「だからダメだってば！ なんですすぐ喧嘩するの!?!」

月村さんがあわてて止めに入ってくる。

金髪め、命拾いしたようだな……。

八十九話

夜になり、店を閉めたあとにベストタイミングで土郎さんの娘さんが帰ってきた。

高町美由希さんというらしい。特筆するような特徴はない。強いて言うなら近親○姦でもやらかしそう、というところだろうか。

さて、現在俺は高町家の風呂につきり自分の身になにが起きたか考えている。

「うーん……」

まず、俺はなぜか銭湯にいた。

持ち物はなにひとつーそれこそ服すらない。

覚えてることは名前と年齢など自分に関するものだけ。

「……銭湯にいた、が何かのヒントになるか？」

……ダメだ、いまいちぴんと来ない。

裸のまま銭湯に行ったってことか？ いやいや……。

「……とりあえず、そろそろ上がるか」

考えても考えても答えは浮かばない。

こういうときはさっさと寝るに限る。それに、あとには土郎さんが控えてるし……早くあがらないと迷惑になるしな。

「ーわーワンちゃん、わたしが体洗ってあげるわー♪」

「いやあああああああつ?! 変態いいいいいいつ?!」

「本当に、本当にごめんよ、チヒロくん……」

「本当に、本当に勘弁してほしいんですけど、土郎さん……」

リビングにて土郎さんと面談中。

風呂場に全裸凸かましてきた張本人は呑気にコーヒーを入れてい
る。

「勘弁してほしいのは僕だよ……」

そりやそうか。

そして気まずい沈黙が訪れる。話題かえよう。

「そういや、このパジャマも息子さんので？」

「あ……ああ、そうだよ。ちよつと大きいかな？」

「いや、これくらいなら大丈夫です」

……そういや、このパジャマの持ち主である息子さんと特筆するこ
とのない娘さんのほかに、もうひとり娘さんがいるんだよな？

息子さんと末の娘さんをまだ見ていない。

「えつと、息子さんと末の娘さんは……？ 帰つてこないんですか？」

「ああ、その二人は家を出ているんだ。息子はいま海外に、末の娘は
……まあ、そこそこ遠いところに。二人とも頑張っているみたいだ
よ。」

へえ……。

「息子……恭也はすずかちゃんのお姉さんと結婚したんだ」

「月村さんの？ ほほお……」

さぞかし常識人なんだろうな。

「末の娘は……」

「……はいい、コーヒーよ♪」

ちようど士郎さんが末の娘さんについて話そうとしたときに、桃子
さんがコーヒーを持ってきた。

「そういえば士郎さん、ワンちゃんは今日どこで寝るの？」

あ、そういやそうだな。

うーん……。

「別に、そのソファでいいですよ。」

「いや、それは流石に……」

そこで桃子さんが「いいこと思いついた」とでも言いたげな表情
を浮かべた。

「なら、わたしと寝ましようー！」

……ナニヲイツテイルノコノヒトハ。

「ちよ、桃子?! 僕はどうすればいいんだい?」

「いや、そこじゃないだろ」

士郎さんも士郎さんでどこかおかしいぞ。

……天然なのか? あのクソ金髪も言ってたしな。

「士郎さんは廊下で寝て」

「桃子?!」

……あれ? 今のやり取りどこかで……。

そこでふと、写真立てがおいてあるのに気がついた。

幸せそうに笑い、寄り添う士郎さんと桃子さん。その傍らに立つ士郎さん似の男性。息子さん（確かキョウヤさん……だっけ?）だろう。

キョウヤさんの隣には近親○姦さんと恐らく末の娘さん………桃子さんによく似た………あ。

思い出した。

九十話

それはある日の朝のことだった。

珍しく、ヴィヴィオちゃんが通信をしてきた。

『先輩、おはようございます！』

「おー、おあよう……」

『……寝起きですか？』

「そう……ふああ」

昨日の夜、スカさんと作ったハ○クバスターでジークのテントに襲撃かけてたからなあ……。

若干寝不足気味かもしれない。

「で、どったのヴィヴィオちゃん？ 何か用かい？」

『あ、はい！ 今日、アインハルトさんと試合をするので是非先輩にも見てほしいなあ、と』

……ストラトスちゃんかあ。何か会いづらいなあ。

あんなこともあったし……何かこつ恥ずかしい。

「でもまあ、ヴィヴィオちゃんのお願いだからなあ……」

よし、行くか。

「わかった、見に行くよ。何時にどこ行けばいい？」

「ありがとうございます！ えつとですね……」

時間と場所を聞き、通信を終了する。

よし、準備するか。ヴィヴィオちゃんに会うんだから……まずは身を清めなければ。風呂入る。

脱衣場で服を脱ぎ、洗濯カゴに放り込む。

その時、洗濯カゴのなかでチカリと何かが光った。

「……なんだ？」

端末でも入れっぱなしだったか？

そう思っ探してみると、光の出所は昨日履いていたズボンのポケットにあった。

これって……。

「確か……無限書庫に行った帰り道に拾った玉？」

ぐにゆ子に見せようとして、そのまま忘れてたのか。

結局何なんだ、コレ？

「ビー玉……ではないよな。光ってるし」

玉を指で摘まみ、いろんな角度から見してみる。

そのまま風呂場に入ると急に光が強くなってきた。

「うおっ!?! ま、まぶしい!?!」

太陽拳か!?

なんてボケてみるが、光はシャレにならないくらい強くなってきた。

あれ? これヤバイんじゃない? と考え始めたところで――

『――で、気づいたら海鳴にいたってこと?』

「そんな感じです」

通信ウィンドウに写るなのはさんが真剣な顔で聞いてくる。

……まさか士郎さんがなのはさんの父親だったとは。

『……もしかしたら、その光る玉はロストロギアだったのかもしれないね』

マジか。

『とりあえず明日迎えに行くから、今日はわたしの実家に泊まってね』

「あ、了解です。お世話になります」

『あはは、それはお父さんとお母さんに言ってね! けど本当に無事でよかったよ』

「しかも保護されたのがなのはさんの実家だったって……ラッキーなのかアンラッキーなのか」

『不幸中の幸い』ってやつだね』

本当に。

なのはさんとの通信を終えた俺は、士郎さんたちにかいつまんでコトの顛末と、なのはさんが迎えに来る明日まではお世話になりたいと伝えた。

士郎さんは快く了承を出してくれた。マジイケメンだわ。

問題は……

「いやあああああつ！ いやよおおおつ、ワンちゃんはどうで飼うのよおおおつ！」

桃子さんエ……。

九十一話

全てを思いだした翌日。

昨夜は桃子さんがどこぞの元ストーカーよろしく俺が眠る部屋に侵入しようとドアノブガチャガチャを一晩中し続けてきたため、かなり寝不足気味だ。

あくびが止まらん……。

「ふあああ……」

今日は土郎さんの好意で翠屋の手伝いは休み。

土郎さんによるとなのはさんは昼過ぎに迎えに来てくれるらしいので、それまでこの街を見て回って来てごらんと言われた。

好意に甘え、朝から散歩中なのだが……。

「見て回るつつつても……ここ知らないところだからなあ」

それに、時間的に店とかはまだ開いてないだろう。

あと2、30分もすれば開くと思うが……。そうしたらヴィヴィオちゃんとヴィクターへの土産でも選ぼう。あとハリーと……ついでにデコ助にも買ってやってやるか。

「となると、あとは店選びだな……」

ヴィクターの好みは誰よりも熟知してるし、デコ助はどんなの買つてつても文句は言わせない。受け取り拒否も許さない。

問題はヴィヴィオちゃんとハリーだ。

「あの二人が喜びそうなものってどこに売ってるんだ……?」

というか……あの二人が喜びそうなものってなに?

「これは……困ったぞ」

どうしよう。

適当に現地人捕まえて聞くっていうのは無理だな。俺、人見知りだし。知らない人キライ。

となると知り合いに聞くのがベストだが……。

「月村さん一択だな」

よし、そうと決まればいったん翠屋に帰って土郎さんに連絡を取ってもらう。

と、その時、俺の近くに黒塗りの車が一台止まった。
なんだ？　と思っていると、後部座席の窓が開く。

「あんた、何してるのよ？」
クソ金髪だった。

それから、約二時間後。

「アリサさん！　はい、あーん」

「あーん……ふふ、これおいしいわね、チヒロ」

「待って二人とも、いつの間にそんなに仲良くなったの……!？」

アリサさんの案内で買い物を終えて、翠屋に戻ってくると、月村さんがいた。

「どうやら士郎さんからなのはさんが来ることを聞いたらしく、翠屋で待つことになったそうだ。」

「なに言ってるのよ、すずか。あたしたちは最初から仲良しだったじゃない。ねえ、チヒロ？」

「そうっすよ。生まれた時からベストフレンドでしたよ？　ね、アリサさん？」

「えええええええ………」

まあ、生まれた時から嘘だけだ。

土産選びを手伝ってもらい、まさかの意気投合。お互いでもビックリするくらい仲良くなった。

なぜかプリクラまで撮った。ウチらは、ズツ友だヨ。

「まさかヴィクターより気の合うやつがいるとは思わなかったぜ……」

「あたしもビックリよ。まさかあんたがここまで話の分かる人間だったなんて……」

「わたしが一番ビツクリだよ……」

たぶん、ファーストコンタクトが悪かったんだと思う。

「……ねえ、本当に二人に何があったの?」

「だから、誤解が解けただけよ。何回言わせるのよ、すずか……あんたバカなの? ……あ、ごめんバカだったわね」

「ばーかばーか!」

「喧嘩売ってるのかな、二人とも……?」

士郎さんに感謝だな。

あの時、海鳴を見て回って来てごらんと言ってくれなかつたら……俺はセリヌンティウスに会うこともなく死んでいたかもしれない。

「ああ、アリサさん……!」

「ん? どうしたのよ、チヒロ? 急に抱き付いてきたりして……まあいいけど。ぎゅー」

「あれ……これ仲良しってレベルじゃやらないかな……?」

これで海鳴に思い残すことはない……!

あとはなのはさんを待つだけか。

「ねえ、チヒロ。すずかの恥ずかしい話聞きたくない? 何歳までお漏らししてたとか」

「え、聞く聞く! ついでにネットで拡散したいっす!」

「え!? ちよ、二人とも!」

「えつと……これ、どういう状況なのかな……?」

なのはさんがついに到着したようだ。

九十二話

「来たわね、悪魔……！ ワンちゃんは連れていかせたりしないわ！ 去りなさい、命が惜しいのなら！ ……そう、引く気はないのね。なら、仕方ないわね……殲滅してあげるわ！」

「えっ!? ちよつ、お母さん!?!」

なのはさんが俺を迎えに来ました、包丁を二本を逆手に持った桃子さんが現れました、桃子さんがなのはさんに襲いかかりました（今ここ）。

どうしてこうなった。

「わかるわけないでしょ。……なのはが桃子さんに殺されるにシュークリームひとつ」

「じゃあ俺は……なんだかんだでなのはさんが桃子さんを無力化するにコーヒー一杯」

よっし、賭けは成立した。

「ちよつと!?! 二人とも、賭けとかしてる場合じゃないでしょ!? なのはちゃんを助けないとっ!」

「じゃあ月村さんは……『自分があの二人に挑んで勝利する』ね」

「賭けるのはあんたの家の全財産よ」

「……え、あう……じゃあ……わ、わたしもなのはちゃんが負けるで……」

「すずかちゃんっ!?!」

神は死んだようだ。

結局、土郎さんが来て桃子さんを無力化した。

「賭けはお流れかー」

「つまんないわね」

「よかった……! 本当に流れてよかった……!」

「三人とも酷いよっ!?!」

いや、本当に酷いのは月村さんだと思う。

小声で「お願いなのはちゃん……死……いや、負けて……！」
ずつと言つてたし。

「ガルルルル……！」

「……お、お母さん。威嚇しないでよ……」

ちなみに桃子さんは、土郎さんに取り押さえられた後になのはさんが簀巻きにしたため身動きが取れない。

「なのはさーんぎゅー」

「えつと……チヒロくん？ 何でわたしに抱きついてるの？」

桃子さんの視線がさらに険しさを増した。

「どんな気持ちですか桃子さん？ ねえどんな気持ち？ 最愛の『ワ
ンちゃん』を娘に寝取られたのは。教えてくださいよお、ねえねえ
ねえねえねえッ！」

「うっ、うおおおおおおああああアアアアアッ！ なのはアアア
アああッ！」

「アリサちゃん、お母さん煽るのやめてよ!? ていうかお母さんもそ
んな叫び声あげないで！ あとのたうち回らないでっ！」

すっごい。打ち上げられた魚のごとくビツタンビツタン荒ぶつて
おられる。

ていうか、桃子さんを縛る縄がブチブチいい始めた。

「も、桃子!! 何をやって……お、落ち着くんだ！」

すかさず土郎さんがやって来て桃子さんを抑えつける。

「うおおおおおおッ！ この程度の拘束でわたしを止めることは
……できぬう！」

「ぐっ、ぐおお……なんだこの力は……!?! くっ……なのは！ チヒ
ロくんを連れて行くんだ！ 突破されるのは時間の問題だ！」

「で、でも……お父さん！」

何この茶番。

「何よ、この茶番」

「チヒロくん……アリサちゃんも、やめなよ……」

えー、だって。

つか士郎あさんと桃子たさん仕事しろよ。客がみんな見てるぞ。

「行くんだ……行けえええええつ！」

「……ごめんなさい、お父さんっ！ 行くよ、チヒロくんっ！」

「……えっ、あ、はい」

なのはさんが俺の手を捕み、走り出す。

アーマメテールウデガトレチャウヨー。

「チヒロー、ちゃんと毎日メール寄越しなさいよー」

「了解ですアリサさん」

「あ、えつと……ばいばい、チヒロくん」

「あ、月村さん今ちよつと喜びましたね？ アリサさん、やっといてくださいーい」

「任せときなさい」

「えええええええつ!!」

ーーーこうして、締まらない感じのまま俺は海鳴魔境から離救出されるれることとなった。

そして、数日後。久しぶりに家に帰ってきた。

管理局での書類記入だとか、検査入院だとかで今までは家に帰ってこられなかった（着替えとかはなのはさんが取ってきてくれた）。

つまり……。

「ただいまー」

『なっ、チヒロ!? おまえ、いままでどこにいったんだ!?』

ーーーチヒロチヒロチヒロおー！ うえええええん……！
こうなる。

「だああ、ひつつくな！ 色々あったんだよ！」

『いろいろってなんだ、いろいろって!? ちゃんとせつめいしろー！』
はいはい。あとで説明するから。

あ、そうだ。メールとか来てないか確認しないと。

「お」

ヴィヴィオちゃんからだ。これは……海鳴に飛ばされた日の夜だな。

なになに……？

『先輩のばか。きらい』

……………えつ。

九十三話

翌日、俺は旅行に出掛けようとしていた。
ベランダから。

『お、おちつけ！ なにかりゆうがあるはずだ！』

「離せ、ぐにゆ子。俺はこれから天国に遊びに行くんだ」

『いっしょうかえってこれないぞ、そこにいったら！ ……あと、おまえはいくなら、てんごくじゃなくてじごくだとおもう』

そんなのどっちでもいい。

ていうかお前案外力強いな……！

ーチヒロ！ だめだよお！ あぶないよお！

「……ここから落ちたら、ずっと金髪幼女おまえといられるぞ」

ーほんどー？ チヒロ、はやくとんで！ はやくはやく！

すっごいぐいぐい押して来た。

はっはっはっ、バカめぐにゆ子、これで止められまい。

さあ、そろそろ出発するか……！

「いってきまー……」

「おい、朝からうるせーぞ！ ……って、チヒロ!? お前いつ帰って

……ってか、お前なにやってんだ!? 今そっちいくから早まるなよ

!」

お母さんハハに見つかった。

「ぐすつ……あのね、天ウイワイオちゃん使がね……ひつく……俺のことね、嫌いてね……っ!」

「おー、そうか。よしよし、何言ってるのかさっぱりわからねーけど、落ち着け」

ハリーの腰にしがみついて頭を撫でてもらう。

少し気分が落ち着いてきた。

「ハリー……」

「ん? どした?」

「ちよつと太つた……？」

「ぶん殴るぞ」

理不尽だ。

それから数分後、完全に落ち着きを取り戻した俺は、だいたいの経緯をハリーに話した。

「そんなことがあったのか……おい、体とかは大丈夫なのかよ？」

「大丈夫。心はもうだめ。スタボロボンボン」

意味不明な仮面をつけてうーうー言いたい。

「あー、きつとあつちにも何かあつたんだらうよ。思い返してみろよ、何かやつたんじやないのか？」

「なつ、バカ言うな！ ジークならまだしも、ヴィヴィオちゃんに嫌われるようなことなんかするかよ！」

「ジークにはすんのかよ……」

あいつはいいんだよ。

若干喜んでるようにも見えるし……たぶん、Mなんだろ。

「なあ、ハリーどうしよう……！！ ヴィヴィオちゃんに嫌われたままなんていやだぞ……！！」

「うーん……そうだなあ……。理由がわからないなら、直接本人に聞くしかないんじゃないか？」

「……なるほど！ さすがハリー！ つまりヴィヴィオちゃんを拉致して監禁しちやえばいいのか！」

「話聞いてたか？」

そうと決まればさつそくなのはさん宅へ向かうしかない……！！

まずはなのはさんを無力化しないと……いれただけぞ。

「とりあえず行きながら考える！ じゃあなハリー！」

「は？ ちよつ、おいつ！ お前本当に拉致してくるきじや……ああー、なんか、ヤバイことになった？」

なんて飛び出してみたけど、普通に犯罪だよな。却下却下。
……普通に謝りに行こう。

九十四話

そんなこんなで、やってきました高町家。

……さて、ここからどうするか。

「目下の問題は天使たるヴィヴィオさんの『きれい』発言……ではない、高町家に住む高町じゃない奴がいなかどうかだ」

自称母親がいたら謝ることもできん。それどころじゃあなくなっちまうからな。

ま、そればつかりは運次第か。いないことを願おう。

「じゃあ……ヴィヴィオちゃんへの謝罪をどうするか、か」

とりあえずケーキを買ってきてみた。月並みだが、プレゼント作戦。これで心証は悪くないはず。

次に、いきなりヴィヴィオちゃんと喋るのは気まずい。直接『きれい』なんて言われたら……シヨックで何しでかすか自分でもわからな。そこで、なのはさんを通しての話し合いだ。

話し合いにおいて第三者がいるのといないのでは大きく違う。なのはさんにフオローしてもらえば間違いないける。

ましてやな母のはさん親の言葉ならヴィヴィオちゃんも言うことを聞きやすいはずだ。

完璧な作戦だ。いける。これならいける……!!
天国インターホンのベルを押すを鳴らす。さあ、いざ行かん、天ヴィヴィオちゃん使のもとへ——!!

「……どうぞ。普通のジュースで申し訳ないですが」

「い、いや……ありがとね」

天国には天使しかいなかった。

「あのさ……な、なのはさんは？」

「……仕事です。なのはママに何かご用事が？」

「い、いや……」

なぜ来るとき確認しなかったんだ……!!

ちなみに自称母親も仕事らしい。それが唯一の救いか。

「……………えっと」

どうしよう。ヴィヴィオちゃん無言でうつ向いちゃってるよ。と、とりあえずケーキ渡そう。

「あ、そうだ。ケーキ買ってきたんだ。なのはさんたちと食べて」

「……………ありがとうございます」

「あ……………うん」

はい、会話終了……………どうすりゃいいんだよおお。

くつ、仕方ない。ここはストレートに切り出すか……………！

「あの、さ……………ヴィヴィオちゃん」

「……………なんですか？」

「今日来たのはさ、その……………このメッセージのことなんだけど……………」

ヴィヴィオちゃんに件のメッセージを見せる。

「……………あ」

「これって一体……………ん？ ヴィヴィオちゃん？」

なんかヴィヴィオちゃんの様子が……………うつ向いたまま肩を震わせて……………。

「うつ…………………………うえええん……………っ！」

「えっ!？」

なんか天使が泣き出した！

その後、泣き続けるヴィヴィオちゃんを抱っこしてナデナデするというご褒美タイムを得た。やったぜッ！

……………じゃなくて、なんであんなメッセージを送ったのか訳を聞いた。

それは、俺が海鳴に飛ばされた日の朝のこと。色々あったからか忘れていたが、ヴィヴィオちゃんから直々にお誘いがあった。確かストラトスちゃんと試合をするから見に来てほしいとかなんとか。

試合が始まる直前まで待ったものの、俺は来ず。

『何かがあつて遅れてるのだろう、きつと試合中に来てくれるはずだ。』

だって大事な……とても大事な一戦なのだから』

しかし、試合が終わっても俺の姿はない。

『そういえば、連絡いれた時、先輩眠そうにしてたなあ。……もしかして、二度寝?』

勘違いしたヴィヴィオちゃんは激おこぷんぷん丸。感情のままに『きらい』とメッセージを送ったらしい。

そして後日(俺が海鳴から帰還した日の翌日)、なのはさんから事情——海鳴に次元漂流していたため行けなかったということ聞き呆然。どうしようどうしようとパニックつてる間(数日)に俺氏来訪。

その結果、ヴィヴィオちゃん感情爆発。いまここ。

「ふええ……せんぱい、きらいとかゆってごめんなざいい……!」

「ああああ、泣かないで! 大丈夫大丈夫にしないで大丈夫だから! というか、むしろごめん! そんな大事な試合すつぽかしちやって!」

「ぐすつ……せ、せんぱいはわるくないです……。勝手に勘違いしたわたしがわるいんです……」

どうしよう。むしろ罪悪感が湧くんだけど。

「だ、大丈夫だから! 本当にごめんねヴィヴィオちゃん!」

「ん……じゃあ、わたしもせんぱいもわるいです。だから、ごめんなさい。……これでおあいこ、です。」

ヴィヴィオちゃんが指で涙を拭いながら微笑む。

なにこれかわいい。

「えへへっ……せんぱい、だいすきっ!」

——ヴィヴィオちゃんがぐずり始めた辺りから録音していた俺は神だと思う。

九十五話

天使と和解してから数日後、俺はあることに気付いた。

どこからか視線を感じる。まるで監視されているみたいだ。

「俺はこの感じを知っているッ！ いや！ この絶え間ない視線の感覚を知っている！」

……ボケてみたけど、それどころじゃない。

これはあれだ。いつしかのストラトスちゃんのあれと同じやつだ。……まさかあのヤロー、やめるとかほざいというて実は続けてたんじゃあないだろうな!?

「確認、してみるか……」

端末を取りだし、ストラトスちゃんをコールすると数秒もしないで出た。

『チヒロさん……?』

「よう、ストラトスちゃん。いきなりで悪いけど、今どこにいる？」

『え？ 今ですか？ 今はリオさんと飲食店でお食事を……』

ストラトスちゃんの後ろの方から『アインハルトさん！ お食事じゃなくて、スイーツですよ！』と聞こえてくる。メシだろうがスイーツだろうがどうでもいいけどな。

とりあえず、アリバイはあるのか。

「ちよつと確認したいことがあってな。ちよつとだけでいいから会って話す時間よこせ」

『それは構いませんが……』

「じゃあ、今からお前がいるところいくから。どこにいるんだ？」

『えつと……』

ストラトスちゃんから場所を聞き、通話を終了する。

よし、すぐに向かおう………とところで、『リオ』って誰？

ストラトスちゃんから聞いた飲食店（一般的なファミレスだった）に到着し、中に入る。

「——チヒロさん、こちらです！」

いた。入り口からすぐのボックス席に座っている。ストラトスちゃんの向かい側には……誰だ、あのガキンチョ？

ていうか、呑気に手なんか振りやがってえ……！

「お前、死刑な」

「え!?! い、いきなり何を……?」

死刑宣告をしながら、ストラトスちゃんの向かい側——知らないガキンチョの隣に座る。

緊急事態だ。許せ、ガキンチョ。

「あ、先ば——」

「ストラトスちゃん……お前には今、ある疑いがかけられている。よく言うだろ、『疑わしきは処す』って」

『疑わしきは罰せず』では……? それでは独裁者ですよ」

生ぬるい。そんなこと言ってるから犯罪はなくならないんだ!

「なのはさんも言ってたぞ! 『調子乗ったら即砲撃』って!」

「趣旨かわってませんか……?」

まあ、いい。説明しとこうか。

とりあえず、たまたま通ったウェイトレスにコーヒーを注文する。

「本題に入ろう。最近、視線を感じるんだ」

「視線……ですか?」

「ああ、どこに行ってもそれがついてくる」

常にある、ってわけではない。

家とか、学校とかまではさすがにないけど……。

「先輩、それってス——」

「それは……ストーカー、ということですか?」

「ああ。……お前だろ」

「えっ!?! ち、違います!」

前科があるんだ……信用できねえ。

それに他に誰がいるんだよ。俺をストーカーしそうなヤツなんて

……ああ、ゴキ〇リがいたわ。

「うーん、本当にお前じゃないのか?」

「違いますよ！」

「……わかった。とりあえず、信じる」

「信じるものにも、疑わないでほしいのですが……」

「前科あるやつが何をほざく」

「——あの頃も、今も、嘘だけはつきませんよ。私は」

「……無駄にカツコいいな、おい。」

まあ、確かにコイツは嘘をついたことだけはなかったな。

「よし、なら手伝ってくれ」

「手伝う、とは？」

「ストーカーを捕まえる。お前は腕つぶしも強いし、元ストーカーだ。適任だろ？」

ストーカーのことはストーカーに聞け、だ。

「……わかりました。チヒロさんには借りがたくさんありますから……微力ながらお手伝いさせて頂きます」

借りってか、迷惑料になるな。

「微力ってか、主力だけどな。頑張れよ、肉盾！」

「いくらなんでも、それはあんまりですよ……！」

頬を膨らませるストラトスちゃん。

これがかつて四六時中俺を追い回していたとは思えないな。……

だが、今はこれほど頼もしい盾……じゃなくて、仲間はいない。

「よし、いくぞストラトスちゃん！ ストーカーを捕まえるぞ！」

「はいっ！」

「先輩たち、最後までわたしの存在ガン無視だったなあ。……先輩のばか。アインハルトさんのあほ。……あれ、ちよつと待って、アインハルトさんのケーキと先輩のコーヒーの支払いは？ えっ、うそ!? せ、先輩たちのばかあああああつ！」